

違法の副會長選舉

の辭職の結果にして、止むを得ずとするも、任期中の副會長二名の改選を同時に行ふの必要なく、管に必要なのみならず、當人の意志にあらずして、漫之を行ふは、法規上不當の選舉と謂ふべかりき。翁は此の點に留意し、高木氏の誤を訂して副會長の選舉を取消し、大澤氏に事情を説きて辭任せしめ、山本覺馬氏を新任會長に、市田副會長を従前通副會長となし、事は漸く一段落を告げし也。

以上の如き所謂勘違ひや誤は、今日に於てこそ笑止千萬の事柄なれ、法規に慣れざりし當年にありては、京都全市の有識階級を殆むど網羅し盡くせる商工會議所とても、敢へて珍らしからざりし如く、而して一般者が此の種の施設に無理解なりしは、より以上に於て、全く今人の想像の外にあり。翁の同志にして、創立發企人の一人なる中村榮助氏の追懷談に、

*大正九年十月京都商業會議所發行「京都の實業」第六號所載

何んといつても當時は商業會議所の效用と云ふものを識つて居る人が殆んど少なく且つ實業の發展と云ふことに就ても、トント眼中にない人が多數ありました。これは

翁の直話

甚だ面白い例ですが、私が會議所創立に關する有志金の勸誘に出掛けた時、或る立派な中京の商人の家へ参りました所、主人は机に向ひ一生懸命何かやつて居りました。して私の云ふことを一一書き留めながら、傍ら自分の用向にも筆を運ばして居る様子でしたから、私は何心なくフトそれを見ますと、何ぞ知らん謠曲本に符點を加へて居る有様で、私は呆れて了ひました。云云。

とあるにより、其の一端を察知するを得む乎。而して翁もまた當時市内屈指の商家の主人を訪ひ、會議所創立の發企人として其の名を列せしむべく、口を酸くして説き勧めしも、その主人公は頑として應ぜず、その理由として、それがし近頃或る人に勧められ、神戸の某會社の發企人に名を借せしが、その爲めに飛むでもなき損害を蒙りたり。依つて爾來は、何種の事業たるを問はず、發企人などに名前を出すことは眞つ平御免なりと述べ、堂堂たる京都商工會議所も、斯様な人の目からみれば、一箇營利會社と何の選ぶなきの明かに知られしより、手のつけやうなくて引取りしてふ、をかしく苦き經驗あり。然かも、

斯かる時代に處して、翁は毫もその勇氣を沮喪するなく、將來の覺醒に大なる期待を懸け、終始一貫、斯業界の啓發、指導の爲めに、間斷なき努力を續けたるなりき。

會頭としての翁

斯くて明治十八年十二月、山本覺馬氏辭任後、翁は會長に擧げられ、二十三年、商業會議所法の公布により、翁は衆望を負ふて京都商業會議所最初の會頭に選舉せられ、以來、明治三十四年、翁はその經營せる關西貿易の破綻により一時引退せる期間を除き、明治四十四年、再び會頭に推され數次重任して晩年に及び、翁の全生涯は殆むごその半ば以上商業會議所の經營に傾盡せられ、會頭といへば翁、翁といへば會頭。商業會議所と翁と、二にして一なるの觀を呈し、その名、海内海外に知らるるに及び、翁の宿志、また以て聊か酬はれたりとすべし。

第參章 翁、當年の公、私生活

一 財界安定の曙光現る

紙幣切斷進抄す

松方大藏卿の紙幣切斷、正貨蓄積の二大政策は、明治十五年我が國金融の中樞機關たる日本銀行の創設を以て始められ、以來、大藏證券の發行に、官業の整理に、租税の増徴に、歳計の節約に、外國貿易の保護に、卿は決死的努力を以て萬難を排し、着着之に當りたれば、明治十七年を迎へ、果然、銀貨一圓に對する紙幣の相場は一圓八錢に回復し、次いで翌十八年には兩者の差價全然消滅。國庫に紙幣兌換の準備金たる銀貨の蓄積を得、同年六月を以て政府紙幣は明治十九年一月より漸次銀貨に交換すべき旨を布告するに至り、當初の目的は茲に全く達成せられて、我が國に於て始めて兌換紙幣の制度を實現するの運びとなりき。

日本銀行は政府の命令により、明治十八年五月、兌換券を發行し、經濟界の要望に應ずることとなりしが、紙幣切斷の結果、物價の低落、市場沈衰のため一時、商工業界に破産、休業する者續續として出でしも、翁等の眞摯なる啓沃指導、提唱により、業界一般に普く政府の貨幣政策が國家將來の興亡に關與すべき重大の意義あるを諒解し、これが反動に對して豫じめ具ふるところありしより、當初憂懼せしほどの大恐慌を來たさず。漸次斯界安定の曙光を見るに及べり。

財界更生の時機は、斯くして到來せり。我が國の金融機關が確乎たる地盤の上に立ちて、その機能を發揮し始めたは、將に此の時にして、有らゆる事業家が疲弊、困憊の舊衣を脱し、新装一番、華華しく發展の舞臺に登場し來れるも、また此の時代なりき。翁の奮然として京都の實業界を代表し、斯業者を督勵して直往邁進、市の繁榮を圖らむ爲めに蹶起せるは、もとよりその處とすべく、これより翁が取引所、銀行、倉庫、鐵道、織物、其の他各種の事業を起し

て、その席殆むど暖まるに違なからむとするに臨み、暫らく筆を轉じて、當年に於ける翁の公、私生活の一斑を傳へむ。

二 翁の新家庭の慶弔事

私生活の方面に於いて、翁は謹嚴にして、然かも洒脫なる好紳士なりしと同時、家庭の人としてもまた極めて温順なる孝子たり、和平なる良主人公にてありき。父君は翁を嗣子とし得て後事の憂ふべきなく、八十五歳の長壽を以て、明治十八年に永眠。母堂樂子刀自(濱岡家)は家君の長逝後、健康を害し、一時重患に冒されしことあり。母堂の疾病は、口腔の患ひにして、齒斷より絶えず出血し、當時市内の諸名醫を聘し、百方診療に當らしめしも其の効なく、次第に老體に衰弱を加へ、命且夕に迫るの狀を呈しき。

時に翁は知人に勧められ、蛭醫者として其の頃有名の新宮涼閣氏の來診を請ひしに氏は診察していふ。蛭をかけて見ませう、必ず日ならずして止血し九死

に一生を得ますと。親族の人人皆驚いて、たださへ出血に苦しめる病人に、此の上蛭をかけ、血を吸はしてはと止めしが、翁は諸名醫皆回復の見込なしとて匙を投げたるに、ひとり涼閣先生のみ療治の望なきにあらずとて施術せむと云はるる以上は、子として主治醫の命に従ひ、最後まで手を盡さざるべからずとて、人人の意見を排して、其の手當をうけしめけるに、奇効神の如く、さしもの重患もほごなく癒えて、母堂は後、明治二十四年まで存命し、七十九歳の長壽を以て逝去せられしといふ。

母堂の臥床せられし當時のことなり。翁は主治醫より牛肉のスープの栄養分多くして、患者の衰弱に卓効あるを説かれしが、昔氣質の母堂のこととて、牛肉なりといひては到底口にせられざるを慮り、翁は自ら牛肉を煮てスープを作り、汁の上に鯛の切身など浮べ、いかにも鯛の吸物のやうに装ひてこれを母堂に勧めつ。翁の心づくしの甲斐ありて、母堂の健康は頓に回復するに至りしが或る日、母堂は自らスープを作るとて鯛を煮て調理し、頻りにその味を試みて

光哲のしてくれたのは、たいへんうまかつたが、これはどうもまづいと訝かられしに、翁は微笑を含みて、初めてこれ迄の種を明かし、母堂は今更氣味悪るがりても及ばず、これこそ本當に光哲に一杯たべさせられたるなれとて、大笑ひとなりて止みきとむ。翁がいかに温かなる愛をもて母堂に仕へつつありしかはこの一事を以て推知せらるべきにあらずや。

翁が夫人を迎へたるは廿四歳の時、即ち明治九年にてありき。夫人の名は幾子、實家は洛南上鳥羽村岡仙造氏にして、十九歳にして翁に嫁し、明治十三年十月十五日女子を分娩し久子と命名せしが、不幸にして夫人は出産後病を發し、幾何もなくして不歸の旅にかしまだち芳魂再び還らず。享年僅かに二十五歳なりき。それより久子の君は、洛北修學院村の西村彌右衛門氏の妻女を乳母とし、同家に預けられて育ち、六歳にして濱岡家に引取られ、長じて五雄氏(現在日本銀行理事)の室となりき。

翁の後夫人は江州栗太郡草津村高田茂是氏の長女章子にして、明治十八年を

の二十歳なるを迎へ、明治二十年に次女恭子、三十五年に長男達郎氏各出生。然かも章子夫人もまたその翌三十六年、三十八歳の短命を以て病歿せしかば翁は頗る琴瑟相和の縁に恵まれざる人と謂ふべかりき。室に芳蘭の香を絶ちて、丈夫四方の志愈々急。私心を棄てて公事に殉ずるの意氣は、翁に於いて、これが爲め、一層熾烈なるものありしと窺はる。

三翁の交友と後進

家門を出でて知己を江湖に求むれば、翁には、敢へてその人乏しきを憂ひず。然かも翁が多数の交友間にも、故中川横太郎氏の如き愉快なる人物は稀なりしが如し。氏は眼に一丁字なくして、天生の才智全湧、錯綜せる事務を處理すること恰も快刀の亂麻を斷つに似。無筆を以て當代に鳴りしもの「三艦長の一人」と呼ばれし江角少將の如き其の一人、岡山西郷の名ありし杉山の兄なる中川横太郎氏の如き其の一人」と稱せらるるに至る。氏は岡山縣に生れて岡山縣廳

名物男中川
横太郎氏に
交る

*三宅雪嶺博
士の論文
「文章大觀」
に出づ

襦袍のまま
で活動する
人

に奉職、大祿だいさかんに任ぜられ、然かも平素縣廳に出勤すること稀。縣下にて新政府が徵稅其の他の施設に不満を起し、往往百姓一揆の勃發を見るや、氏は襦袍じゆほうのまま馬に飛び乗り、息をもつがす現場に電馳し、洒洒磊磊、首謀者を説破して手もなく騷擾を鎮定するなど、非常に際して非常の能力を發揮し、常人の企て及ばざる邊に及ぶ。その入洛して翁を初めて訪へるは明治十一年頃の事。翁の年若うして眉目清秀なるを見、都育ちの坊ちやむ何ほどのことやあるとて翁を擲論するの色あり。然かも翁と、當世の事務を談すること三日三夜。その論議の博大にして識見また群を抜けるに驚き、氏は參つた、參つたと連呼し、竟に胃を脱ぎて翁に服し、以後、爾汝の交を訂するに至れり。

翁は青年時代より、志士と交り論客と應酬して、その名廣く世に知られけるより、當世に不遇の士來りて翁の門を叩くもの多く、彼の世に鬼縣令とうたはれし極端なる保守官僚派の三島通庸氏が、「私が在職中は、火つけ強盜と自由黨とには頭を擡げさせない」と豪語し、福島縣に在りて河野廣中氏一派を國事犯

金子重光氏
を同志社に
學ばしむ

金子重光氏は當時常五郎と稱す。なほ翁の庇護を受けし人人のうち望月興三郎氏の如きその名を知らる

に問ひ、猛烈なる彈壓に着手するや、遁れて京都に入り、或ひは俠客會津の小鐵を手頼り、或ひは翁に請ふて身の振り方を定めむとする者尠なからず。金子重光氏の如き其の一人なりしが、氏は縣令の糺彈が山田内務卿(顯義伯)の命令に出でたるものなりと猜し、憤慨の極、第一に内務卿を刺し、次いで山縣公を刺さむとて翁にその旨を告ぐ。翁は徐ろに氏を諭して、學問をせよと勧め、學資を給し、新島襄氏に依頼して同志社に入らしむ。北垣知事、或る日、翁を招きて、近來京都に物騒な奴等が入り込むでゐるとの噂あり、足下に心當りありやといふ。翁笑つて、物騒な奴、必ずしも物騒ならず。然かも之に教ふるに道を以つてせずして妄に官憲の力を加ふれば、物騒ならざる奴も竟に物騒たるに至るべしと説き、知事にこれを拉致するなからしめ、氏等をして、意を安すむじて就學せしむ。金子氏は新島氏の薰陶をうけて同志社を出で、現に郷里若松に在りて基督教の傳道に従事し、傍ら幼稚園を創設して、兒女の保育に當りつつありといへり。

快漢山中茂氏

當時、叡麓學舎より出でて、同志社に在學しつつありし山中茂氏の如きも、また翁の厚意をうけし快漢中の一人にして、垢面蓬頭、學事に疎に、殊に外國語は最も禁物。その學修時間、必ず岑岑たる頭痛を覚え、氷囊を戴かずしては勉強出來ずといふ頭腦の持主なるが、此の漢、先輩大家を物の數とも思はざる度胸と、辨才とを有し、在學中、飄然として東京に遊び、遠慮會釋もなく元勳顯官連を歴訪して寄附金を集め、之を資として洛東靈山に、平野國臣の碑を建て、事の餘りに意外なるに、謹嚴重厚の新島社長をして舌を卷かしめたる逸話あり。同志社を半途退學して、或ひは九州の炭坑に働き、或ひは渡米して勞働に従事せしに、滯米中、獨逸人に誘拐せられて捕鯨船に乗込み、ベーリング海峽の北、三百海里の邊まで連れ行かれしも、後、桑港附近に歸航せる時、氏は身を海中に投じて踪跡を晦まし、漸く命からがら陸に泳ぎ着きて苦役を免がれ元の奎阿彌となりて歸朝せりとのことなるが、氏等を始めとし、叡麓學舎以來諸國の書生連にして、その頃、翁より補助をうけし人人は枚舉するに堪へず。

市原盛宏氏
其他
喜田貞吉博
士編「和田
豊治傳」第
二章參照

翁、初めて
内貴氏を識
る

舎長村上作夫氏も後年、翁の經營せる新聞社に勤務し、何かと翁の世話を蒙りしなりき。

富士紡の和田豊治氏の如き、興銀の小野英二郎氏の如き、韓銀の市原盛宏氏の如き、また此の時代、翁に愛撫せられし人人にして、殊に和田氏は村上作夫氏の推薦に係り、村上氏と同じく大分縣の出身なるが、翁は氏の人爲を觀、その將來に矚望して、氏を中外電報社の準社員に擧げ、氏を東京に出して慶應義塾に學ばしめしつ。氏は後、外國に赴き、歸朝して鐘紡に就職し、轉じて富士紡に入りて大に成功し、斯界に雄飛せしは今日、知らざる人なけむ。

此の當時、翁は内貴甚三郎氏と初めて相識るに至れるなりき。翁の先代より昵近なる醫師に吉岡清造氏といふ人、市内室町通竹屋町下る所に寓しけるが、或る日、翁を訪ふて内貴氏を紹介し、氏の有爲の青年なるを語りしが縁となり初對面よりして、宛ら舊知の感をなし、京都取引所創設の際、共に發企人として名を列し、翁と氏とは、以來、各種の事業に參劃し、互に協力して市の發展

雨森菊太郎
氏

に盡せるなりき。また彼の雨森菊太郎氏の如き翁と此の時代相前後して府會議員に擧げられし際、翁より多大の援助をうけ、之により氏は政治的社會的活動に入るの端を開きしものにて、氏は田中源太郎氏とも懇意なりしより、三人相訂盟して、不偏不黨を旗幟とし、公民會を起して府市民の自治的精神の涵養に力めたるが、後、雨森氏は翁の經營せる日出新聞社の編輯課長となり、明治三十年、翁の辭職するや氏はその後を承け、同社の社長として在職二十有餘年、識見の高邁、操守の堅實を以て、翁の創始せる新聞事業をして、有終の美を濟さしめしなりき。

四翁、會津の小鐵を援く

關西の俠客とし今にその名を唄はるる會津の小鐵が、翁の援助をうけたるは明治十八九年の交にして、小鐵が北垣知事の嚴厲なる檢舉方針に依り、洛北白川の宅にて逮捕せられ、京都監獄に服役中、堀内典獄は翁を訪ひ、小鐵が出獄

堀内典獄、
小鐵を紹介
す

後の始末に就き翁の配慮を請ふところあり。典獄の談によれば、小鐵は極めて柔順に獄則を守り、進退起居、同囚の模範たるのみならず、性質卒直にして氣概あり、また一廉の人物なるやう見受けられ、出獄後、正業に就き社會公共の爲めに働かむと切望しつつありとのことに、翁快く之を諾したるが、斯がて小鐵は刑期満ちて後、翁の許に來りてその援助を求めけるより、翁は北垣知事に依頼し、府廳關係の工事を小鐵に請負はしめむとせしも、知事の容るるところならざりしを以て、翁は種種考慮せる折柄、小鐵また來りて、おかげで北野神社の樓門建立の工事を請負ふことになりました。就いては資金が足らぬので五百圓ばかり恩借がねがひ度いといふに、翁、即座に之を貸與し、なほ中心より工事の滞りなく竣成するやう大に小鐵を勵ましたるなりき。翁の曰、

北垣知事が小鐵を檢舉してしまつたのは、當時琵琶湖疏水の大工事が起されたときであり、隧道の穿鑿に多數の工夫や人夫が入り込むでくるのに、小鐵の手下の者が邪魔をしては困ると思つたからである。それで出獄後、小鐵の身の振り方に就いて私が

頼みに行つたときも、知事は小鐵は見込のある人物にせよ、手下の無頼の輩が跋扈してはいけないと云つて聞かなかつた。知事の意見にも一流の見識はあつたのである。何しろ彼れの乾分は直參の者だけでも二百人に上り、その直參の乾分の一人づつが各二百人以上の手下を率ゐてゐたのだから、彼れには近畿で三四萬人の者を動かす勢力があつたのである。その大勢の人間が親分親分といつて隨いてをり、収入は賭博や諸方の心づけなどで莫大の額に上つてゐたらしい。それが一朝正業に就くとなると乾分を養つて行くことはもとより、自分の生計さへ支へることが出来ないで、流石の小鐵も餘程困つてゐた。しかし根がシツカリした男で心機一轉、出獄後は何處までも正業で遣り通すといひ、最初米屋を遣り、次いで請負師となり、北野の樓門工事も芽出度く終つたので、私のところへ遣つて來て五百圓を返済し、利子は、と聞くから馬鹿なことをいへ、俺は金貸でない、君を授けるつもりで貸したのだといつて笑つたことだつた。その時、小鐵は少し餘裕も出來ましたので學校を創めて乾分を教育したい。また新聞事業も遣つて見たいと思ひますなどと云つてゐた。私は新聞は兎に角、學校

翁小鐵を山
本氏に會は
しむ

は是非遣つてみるがよからうと勸めておいた。後、小鐵は白川で學校を經營したが、學校と云つたところで私塾に毛の生えたやうなもので、會津藩の士族や、政治に關係して逃げてきた志士などが教師格になつて、乾分達を教へてゐたのである。云云。

翁が小鐵の心事を憐れみ、先輩山本覺馬氏に彼れを紹介せしもこの當時の事にして、翁は歩行の困難なる山本氏を介抱して祇園中村樓に至り、小鐵は稍、遅れてたづね來り、三人鼎坐して當世の時務を語り、興盡きざるものありしがこれらの斡旋をうけ、小鐵は終生、翁の厚誼を感銘して止まざりしとぞ。

五府會議員に選舉せらる

府縣會規則の發布に基き、京都府會の開設せられしは、明治十三年三月二十五日にして、山本覺馬氏は市部(上京區)より議員に擧げられ、氏の教をうけたる垂水新太郎氏は南桑より、田中源太郎氏は船井郡より、中村榮助氏と翁とは市部より同年及び翌年の補缺にいづれも選出せられて府會に議席を占めつ。就中

明治十三年
府會開設

翁は夙に中外電報社長として世に知られければ、その言議は、最も活氣に富める進歩主義の代表的のものとし、府政界を擧げて傾聽する處となれり。

翁の議政壇に立つや、常に府行政の大局より立論し、區區たる小地方的の利害關係を離れ、大聲せず、疾呼せず、且つ絶えて情實因縁に囚はるるなくして諄諄乎として衆議を率ゆるの風あり。明治十四年府會區部會副議長に選舉せられ、一度び之を辭して後、十六年更に同副議長に選舉。十九年更に府會議員に再選せらるるに及び、翁は府政上の重要問題にあらざれば、議場に出席せずとし、それにてよろしきやと、一應おのれを擁立せし重なる人人に駄目を押し然かる後に當選を受諾せしなりき。

府會は歳計豫算の關係上、三部制を採用し、議案の審議は市、郡及び市郡聯帶の各部會に分ちて當れるが、教育費及び土木費の如き、多額の歳出を要する費目に就き往往市郡の間に意見の衝突を生じ、時に議場に大波瀾を生ずるを免がれず。翁の出でて活動するは、概ね斯かる時にして、翁は或ひは壇上に立ち

府會の三部
制

翁の活動す
る時

得意の大局論を説きて議員の反省を求め、或ひは部屋を斡旋して市郡の調停を計り、波瀾を収めて議事を進事せしむるに獨特の手腕を有したりき。たとへば當年府會に於いて京都市より丹後宮津町に通ずる車道敷設案の出でし際の如き翁は交通政策の意義より説き起し、車道開通の利便を享受するは、市郡いづれにも等差なきを論じて、その負擔に異議を唱へし議員連を納得せしめし如き、其の好適例とし舉ぐべく、而して翁は徒らに自己の手腕を恃まず、恃むところは唯府市の繁榮を念とする滿腔の熱誠即ち之にして、翁はそれを披瀝するに天空海潤の態度と懇篤の辯舌とを以てし、對手方を説伏せずむば止まざりしなりき。翁の曰、

私はその時分から一黨一派のことなどを眼中に置かない方で、大局から観て是と信ずることは、堂堂と遣ればいいのだと思つてゐた。道理の前に自分の感情や地方の利害關係などを挟むのが一番わるい。然かし當時は府會といつても開設早々で、役人を無暗に有難がる人があるかと思ふと、一も二もなく理事者を攻撃するのが豪らいと感

府會議員と
しての翁

ずる様な人もあつて中中賑かだつた。今から見るとそれらの人人も無邪氣で府を思ふ心をお互に負けずに持つてゐた様に思ふ。故人のことだが罪のない話だから一つ二つ披露すると、或る日、田中源が私のところに來て、けふの府會は面白かつた。知事を思ひきり遣つつけて原案を叩きつぶしてきたよと云ふ。何の事かと聞いてみると、中學校で雨天體操場を設けると云つて豫算に組んどもものだから、雨天に體操場などが要るか否決したとのことだつた。私は田中に馬鹿なこととしては困る。理事者の提案は體育上是非必要ではないかと教育論から段段その理由を説くと、田中は成程これは俺が拙かつたと云つて苦笑してゐたが、それ以來田中は教育問題の研究に熱中しだし學校關係の案など云ふと、どれもこれも眞つ先に賛成して理事者を援けたものであつた。また或る議員の如きは商業學校で校服を制定するといふと、商業の生徒に洋服の必要はない、前垂掛けて澤山だと云つて議場で演説したり、噴飯すやうなことも澤山あつた。その上、土木費や道路、橋梁費の如き問題になると、市郡双方、負擔の關係があるものだから、皆が我流論を立てて争つたものである。云云。

翁は明治二十年外遊に際し府會を退きたるが、當年に於る翁が公平無私の風姿は、深く市民の腦裡に印象せしものから、衆望自ら翁に歸し、その明治二十三年、我が國最初の衆議院議員の候補者とし立つに及び、市民は一齊に之を授けて、翁を中央政界に送り出せしなりき。

六 琵琶湖疏水大工事に協力す

琵琶湖疏水工事は、明治年間に於て京都府市民の全力を傾倒せる我が國屈指の大事業たるに同時、「所謂後進國たる日本が世界最長の運河インクラインを完成し其の水力を利用して二千馬力の水力電氣を起したといふ報道は當時晴天の霹靂の如く歐羅巴諸國に響いた」る世界に於ける劃期的大工事也。而してこの大工事を擔當せるは工學博士田邊朔郎氏にして、博士は北垣知事のもとに京都府御用掛となり、明治十八年六月を以て工を起せるが、工事の計劃及び調査はこれより以前、明治十四年博士二十一歳の時に着手せられしものにして、本事

*拙著「田邊朔郎博士六十年史」引用

*以下此の節は主として田邊博士著「琵琶湖疏水誌」に據る

業の動機に就き博士は、一、聖駕東遷以後の京都の衰頹を挽回させたい事。二、明治初年京都府へ下賜された産業基金を永久的事業に投資して恩澤を不朽にしようとした事。三、猪苗代湖疏水事業の完成に依つて田地灌漑事業の有益なことが立證された事。四、此のやうな機運に際し指導監督の任に當つた北垣府知事以下當局有志の斡旋經營宜しきを得た事。の四點を擧げつ。

明治十四年は、北垣氏が榎村府知事の後を襲ひし年にして、氏の任に着くや聰明敢爲の資、奮つて任地に於ける前人未着手の事業に注目し、府民の福祉を増進する爲め、萬難を排して之に當らむとするの意氣あり。氏は翁を招いて懇懃にその志を告げ、翁は之を諒として滿腹の經綸を傾けて氏に説き、以來互に胸襟を披き肘をとりて施政の要務を談じて倦まず。兩人相會すれば獻酬夜に入るを常とし、深更に至りて要談なほ盡きず、夜を徹するに及ぶも稀ならざりき。即ち知事は翁の議によりて民間の事情に通じ、輿論の趨嚮を察するを得、翁また知事の談によりて政府の方針、施政の緩急を知るを得て、官民一致の施設に

翁、北垣知事と府政の要務を談ず

勸業諮問會

資せしこと尠なからず。當年の府市政は概ね斯くの如くにして、極めて適切且つ圓滑に行はれ、疏水大工事の如き、空前の大事業をよく和衷協同裡に、成し竟げたる也。

田邊博士が明治十四年十月を以て着手せる疏水の實測並びに工事計劃は、約二箇年を費し、十六年に至り完成せしかば、北垣知事は之を政府に提出して、工事の特許を得るため、直議出願の手續を取るべく、同年九月、勸業諮問會を起し、京都市内を中心有力者五十名を會員として、起工趣意書を附議したりき。此の趣意書は、琵琶湖疏水工事の概念を知り、併せて翁等が此の大工事の遂行を協賛せる意義と價值を知る上に於いて、極めて重要な文獻なるにより、左に其の一節を掲ぐ。

疏水起工趣意書の一節

夫れ京都の繁盛を維持せんと欲せば其策亦少なからざるべし然ども風俗地理に因て之を考ふれば工藝を精巧にして以て物産を振興し水利を開通して以て運輸を便にするを第一とす幸にして近接の地方にして其高低の位置を得たる近江國琵琶湖水の疏通す

べきものあり是我京都全區を潤澤せしむる一大元素と謂はざる可からず此の利に因りて運輸を便にし器械を運轉して以て諸製造を盛大にせば將に衰頹せんとするの京都を以て忽ち轉じて天府富有の地となすことを得可し其餘力の及ぶ所管内に在ては之を京都市街縦横に引用して以て井水の缺乏を補ひ又火災防禦の用に備ふべく水車を製して精米の用をなし下水を清淨にして衛生に取るべく加之宇治紀伊及び愛宕葛野の郡内旱損の田面を灌漑して若干の收穫を得べし其管外に在ては舟楫の利東近江國より西攝津國に及び内外公益の大なる未だ遽に概算すべからざるなり琵琶湖疏水の工事一舉して百益相ひ聯貫して創興すべきこと如此是此工を起さんとす所以の主旨なり。云云。

勸業諮問會の議場は府立中學校の講堂を以て之に充て、知事は會長として右趣意書説明の任に當り、會員側は、彼の山本覺馬氏を筆頭に翁等の出席により滿場一致、知事の提案を可決し、越えて同年十一月十五日、同じく此の講堂にて上下京聯合區會を開き、設計豫算等全部を議了し愈、知事の東上出願となり、後、幾多の曲折を経、明治十八年六月に至り、初めて起工式を擧げ、爾來六星

疏水の起工式及び竣工

霜。田邊博士の天才と献身的努力のもとに、官民の後援その效を奏して、明治二十三年四月一日を迎へ、天皇后兩陛下の御臨幸を仰ぎ奉りて盛大なる竣工式を舉行せるが、畏くも陛下には此の日式場にて優渥なる左の勅語を賜へり。

勅語

疏水の工事竣るを告ぐ吏民協戮の功洵に嘉す可し從來我國美術工藝の盛なる此土を最とす自今此水利に藉て以て人工を資け倍す精良を加へ他日の殷富を期せよ。

工事に要したる總計費百二十五萬餘圓。其中三十九萬六千九百餘圓は、既述の、明治天皇御下賜の京都府産業基金十萬圓に年來の利殖金二十九萬六千九百餘圓を加へて之を辨じたるに見ても、此の大工事がいかに、聖恩を無窮に傳ふべき至大の使命を有する市産業開發の基礎的の大事業たりしやを思ふべく、然かも當時、之が起工に際しては、政府部内に幾多の異論あり。主務省囑託の權威ある外國技師さへ、琵琶湖疏水の絶對に不可能事なるを唱へ、民間知名の

本書第一編
第六章第三
節參照

實業家もまた經濟的方面より、之が無謀の舉たるを難じ、各方面にも反對意見尠なからず續出せしが、此の間に立ち、幾多の難關を切り抜け、斷斷乎として當初の計金を實現し得たるは、北垣田邊氏等當事者の絶倫の效績に外ならずと、これらの當事者の背後に在りて、これを翼賛しこれを支持し、竟に其の大成果を見るに至らしめたる點、一に翁等有志の功勞として、後世に傳ふべき也。

第四章 翁の各事業創設時代

一 京都取引所の創設

斯界覺醒後
の發展

明治十五年を以て、政府が極力遂行に力めし紙幣切斷の政策が、當時の業界に一大痛棒を與へ、一般商況をして萎靡不振の底に陥らしめしは前章に説ける處の如し。然かもそは、物價の不自然なる暴騰に陶醉せる當業者を覺醒して將來、堅實なる進歩發達の方途に就かしむるために避くべからざる打撃なると同時、打撃の大なるだけ、覺醒後に健全の發展を期すべしとし、翁は夙に爰に觀るところあり。自ら經營せる中外電報紙上に於いて、將たその主宰せる商工會議所の機關に於いて、機會ある毎に、市内の商工業者に對し、徒らに刻下の不況を悲觀するなく、大に奮發して業務擴張の準備を爲すべきを説き、且つ當面の用意としては、有價證券に投資するの必要、且つ有利なるを唱道しつつあり

しが、遺憾なるは此の場合、當時京都市に株式取引市場の存在せざりしことにして、有價證券賣買に際し、京都人は止むを得ず大阪に出で、大阪取引所に手数料を徴せられ、採算上不利なるのみならず、これが爲め、取引の敏活を缺き將來斯業の發達を策する上に種種の不便を免がれざるを以て、翁は有志とともに京都取引所設置を計劃するに至り、機、漸く熟して明治十六年十一月二十八日、有志と共に愈、其の設立願を政府に提出することなれり。

京都取引所
の設立の效
用

翁の眞意をいへば、手数料問題の如きは、京都取引所設置の目的の從たるものに過ぎず。その主たる目的は、市内に取引所を起すことによりて、沈滞せる市の企業界に新生氣を吹き込み、事業創興の機運を促進し、一般市民に事業熱を喚起して、活潑潑地の經濟的活動を將來するにありしが、當時、政府は大阪の取引所に於ける檢舉事件に手を焼ける折柄とて翌十七年一月十九日、翁等の出願難聞届旨指命せられき。依つて同月二十九日に再出願を行ひ、七月三日漸く許可を得しより、翁並びに高本文平、福井矢之助、大江長右衛門、田中藏一

明治十七年
開業式を舉ぐ

竹原彌兵衛、竹村藤太郎、内貴甚三郎、市田文次郎、市田理八の諸氏發起人となりて、一切の手續を了り、此の年十一月に及び愈、開業の認許を受けつ。取引所の建物は下京區第三十組東鹽小路町に於いて内貴、市田(文)兩氏建築事務委員として建築に着手し、之が竣工を俟ち、右認許の翌十二月十五日を以て開業式を舉行せり。

資本金は十萬圓、株式組織にて募集せしに、株主の申込数は總高に十倍するの盛況を呈したるにつき、その申込高の十分の一の株を配當し、百七十三名の株主を得しものなるが、「當時本市に於ては僅かに數個國立銀行の外、株式組織に成る會社とては資本金三萬圓を以て成る米商會社の外になく當取引所が十萬圓の資本を齎察したるは其の額多きに過ぎ、市中殆んど驚きたる程なり」き。翁は、その頃市の金融機關として商工銀行の創設に當れるため、理事長に田中源太郎氏を推し自身は肝煎(監査役)となりしが、理事長以下各役員、いづれも當時、取引所に關する知識經驗に乏しく、爲めに幾多の逸話を遺しき。彼の「解

*京都取引所
史より引用

當時の笑話

創立前景氣
よく創立後
景氣わるし

けあひ」なる方法を知らざりしたため、或る時の如き、限月の終りに臨み、受渡し株の不足につき大紛擾を起し、取引所員は賣買兩者の間に板挟みとなり、夜に入りて田中理事長を腕車にて自宅より呼び迎へしが埒明かず、深更に及び、また腕車を走らして翁を迎へ來り、翁、現場に到りて、漸く落着を告げし事さへありしといふ。

取引所の創立案は、翁がその知人小野梓氏をして執筆せしめしものにして、創立に臨み前景氣よく、創立後景氣悪く事業微微として振はざりき。こは右の如く何人も取引所の勝手が解らざりしと、有價證券其の他一般株券の賣買銘柄の少なかりしによる外、當時取引所に對する政府の課税の過多なりしに起因しき、斯くて開業以來市場閑散裡に一周年を閲みし、明治十八年下半年期に入り、事務の方面は多少整頓せるも、一般商工業界の景氣いまだ回復せず、加ふるに六七月に兩度の洪水あり、人氣はこれが爲め一層沈衰して取引殆むど皆無。所員は欠びをしに毎日出勤するの狀態にて、欠びをまぎらすために、碁盤、將棋

取引所は宛
然碁會所の
如し

翁、松方藏相に迫る

盤を場に持ち出し、勝負に夢中になりて、時に立會の拍子木の鳴るを知らず。理事長田中氏は精力絶倫、一刻も手を束ねて晏坐する能はざるの人、到頭此の閑散の状態に痺れを切らし馬鹿らしくて致方がない、思ひ切つて持株を賣つてしまひ取引所から手をひかうぢやないか、と翁に相談するに至る。翁は氏を慰留し、我れに一策あり、松方藏相に交渉してみれば、その結果如何により君は止めなければ止めよとて茲に翁の東上となりぬ。時に明治十八年十月也。翁の藏相を訪ふや卒然として曰、閣下は取引所を以つて不必要なりと認めらるるや、或ひは、必要なりと認めらるるやと。藏相怪訝な顔して、勿論、必要と認むといふ。翁隙かさず、必要と思はるるならば何故に現在の如く禁止税収税法のこゝをかけらるるか。藏相の曰、いづれ来る十二月には法令を出すつもりなり。翁の曰、十二月では困るのです。事は一刻を争ふ。御用終ひまで待たさず、せひ來月は發令し、悪税を撤廢して取引所の發達を援けて下さいと陳情に力む。藏相竟に諾す。

田中理事長驚く

翁、藏相官邸を辭するや、直ちに田中理事長に打電して取引所の株は時價八十圓以上いくらでも買へと通ず。田中氏返電して目下九十圓以上に騰がる、買ふべからずと。翁、九十圓以上にても可、買ふべし。氏また返電、百圓以上に騰がれり。翁重ねて打電。百圓以上いくらでも買へと。然かも株は翁が買へ、買へと電報を打つごとに、鰻のぼりに上りて竟に百二十圓臺を突破。田中氏が一株も買はざるうちに、翁の電報が刺戟となり、動機となり、折柄財界一陽來復の機をうけ、諸株の氣勢漸く動きて、賣買高は増加し始め、翌十一月二十八日、政府が收税法改正の布告と相俟つて、取引所内は、絶えて久しき活氣を帯び來れり。

取引所今昔の感

これより後、京都取引所は幾多の試練を經、試練毎に益、實力を蓄積し、我が財界の發展に伴ふて、其の機能を擴張發揮し來りしが、その結果、明治二十九年十二月を以て十萬圓を増資し、日露戦争後從來の米穀商品取引所を合併して更に三十萬圓を増し、資本金は計五十萬圓となり、明治四十三年一月、三度目

の増資を以て百二十萬圓に、更に其の以後、三回の増資を行ひ現在の資本金五百萬圓(内拂込額三百五十萬圓)に上り、昭和三年度に於ける期米の賣買高は一千二百六十四萬六千七百石。同年中の株券取引高六百十萬二千九百十枚、金額八億五千二百六十三萬五千三百五十五圓内譯、長期取引百〇一萬四千七十枚金額一億二千四百三十六萬二千二百十圓、短期取引五百〇八萬八千八百四十枚金額七億二千八百二十七萬三千四百四十五圓を示し、市場社屋、また數次の改、新築を行ひ、規模宏壯、設備整頓、巍巍乎たる現在の盛觀を見ることとなりしが、之を寂寂寥寥、宛ら基、將棋の會所たるに過ぎざりし如き當年のそれに想ひあはせ、恍として今昔の感にうたるると同時、何人もその寂寥不振に屈せずして拮据經營の任に當りし翁等の勞を多とせざるを得ざらむ。

二 京都商工銀行の創設

一般財界の投資力を刺戟して各種企業の勃興に資し、商界の沈滞を打破して

取引の敏活を期すべく、翁等の努力により、京都取引所は右の如く愈、創設のこととなりしが、これに伴ひ、商工業者の利便を趣旨とする健全なる金融機關設立の必要は、一層その急を加へつ。由來京都市に本據を置きて創設せられし銀行としては、彼の明治九年八月、國立銀行の改正條例發布後に於いて、第四十九國立銀行明治十一年六月及び第一百一銀行(同年十一月)等の如き之ありしが、國立銀行は其の條例に依る特種の立場を有せるを以て、純然たる商工業者の機關と見難く、なほ市には他に竹原銀行、三井銀行支店の如きありて、此の邊の不備を補ひつつありしも、これまた其の取引關係は一部に止まり、市の斯業者は金融上幾多の不利不便を感じざる能はりき。これが爲め翁は、市の業界を中心とし本店銀行創設の計劃を進むるや一旦夕の事にあらざりしが、恰も善し、明治十五年八月、松方大藏卿の入洛により、これが機運の太く促進せられし上に搗てて加へて、京都取引所の設立により、當業者は痛切に金融機關に對する必要に迫られ、續いて十九年一月、政府紙幣の銀貨交換を開始せるにより其の

計劃は頗る具體化せらるるに至り、同年七月、愈、翁等を發企人とする京都商工銀行の創立事務所は、京都下京第四組御射山町(東洞院蛸薬師上)に於いて、設置の運びを見ることとなりぬ。

京都商工銀行は、京都の物産を振起せむことを目的とする一大金融機關たるにあること、當時翁等發企人によりて作製せられし其の創立主意書により明かなるが、翁等は物産振起の方策とし、該銀行の任務に説き及び「^{***}一は資本の各所に散在し、若くば埋藏せるものを集めて之を利用し、一は手形の流通を盛にして、更に資本の缺乏を補ふの方策を求むるに在り」とし、「然らざるときは金融の道終に開けず。金融の道開けずんば工業家其の業を改良し、其の基を増殖せんと欲するも得べからざるなり。而して其の不利たる一人一家に止らず、延て一府の不利となり、一府の不利は延て一國の不利となり、遂に全國の富源をして空しく凋枯せしむるの憂なしとせず、豈戒しめざるべけんや。是に於て乎生等有志者と謀り茲に商工銀行を發起する所以なり」と、堂堂その經營の大抱

負を示せるなりき。

斯くて商工銀行の創立事務は、着着進捗し、資本金五十萬圓。その半數は發企人の持株を以て之に充つるに定め、他の半數のみを公募せしが、應募成績は極めて良好にして、その年八月十五日の締切期日までに八十九萬千五百圓に達せるより、發企人はその持株を割き十株の申込に對し三株を配與し、所定の手續を履みて政府の特許をうけ、十月十七日に開業式を舉行せり。役員の顔觸は翁を頭取に、副頭取田中源太郎、取締役市田理八、内貴甚三郎、西村治兵衛、常務委員竹村彌兵衛、藤原忠兵衛、井上利助、山中利右衛門、山添直治郎、大原直次郎、熊谷市兵衛の諸氏、支配人に芝廣吉氏を擧げたるが、その開業式の盛大なりしは、市に於いて前代未聞と稱せられ、當日、翁並びに田中源太郎氏等の調査により、京都市内に於ける一萬圓以上の資産家百七人、これに諸官衙長官、學校長、府市名譽職、近府縣知事其の他を合せ約八百人を招待せしが、松方大藏大臣も之が祝賀のため入浴し、大臣の臨席する中村樓行の招待狀は、

銀行業に對する一般者の理解

芝廣吉氏の談

希望者多數のため市價を生じ、當時の物價にて大枚二圓を以て賣買せられたるほどの熱狂的人氣を呈し、宴會の當夜は、京名物都踊りを臨時開催して主客盛歡を極めたりといふ。

翁等が商工銀行の創立は、斯様に華華しき人氣を博したりしが、然かも當時一般者の銀行事業に對する理解程度の淺膚にして幼稚なること驚くに値ひするものあり。我が學界の耆宿として福澤諭吉氏と並び稱せられたる中村敬字氏は或る日、^{****}支配人芝廣吉氏に會し、談、銀行の事に及び、芝氏が銀行の業務を述べ、預金利子に就て語るや、敬字氏の曰、人の金を保管して遣つてゐてその上利子を拂ふと云ふやうなわけはない。寧ろ保管料を徴つても可いでないかと。識者にしてなほ斯くの如く、市内一流の商人さへ手形の割引の意味を解せざるの稀ならざりしといへば、此の時代、これらの人人を對手として銀行經營の重任に當りつつありし翁等の苦心は、また取引所創立當時のそれに譲らざりしなりき。業務の成績は其の苦心の賜として極めて順調を告げ、開業後二箇月たる

明治十九年下半年末には、諸預金十一萬七千圓、貸金十六萬圓を計上し、翌二十年下半年末に躍進して、諸預金三十七萬八千圓、貸金四十七萬三千圓に達するに及び、創立當初の目的を實現するの能力、津津乎として充溢し來れるを見つ。

三 京都織物會社と京都陶器會社

翁の事業とし、既に新聞紙と商工會議所とを經營して、一般の指導、獎勵に當り、また既に京都取引所と商工銀行とを創始して、金融の利便と商取引の敏活を期したる以上、斯業發展の基礎はここに最早成れりと謂ふべく、翁は今や進むで此の基礎に立ち府市商工業の振興を圖るべく、先づ京都織物會社を發企し、次いで、京都陶器會社を新設し、更に京都倉庫會社を起して物資の保管、調節に資せるが、翁は單に市の生産に係る物資を他府縣に移出するのみにて満足せず、關西貿易會社を創立して廣く海外に新販路を開拓せむとし、また翻つて

翁の事業着手の順序

之が運輸の途を講ずるの急務なるに鑑み、敢然自ら關西鐵道の敷設を計企するに及ぶ。共にこれ盡く翁が明治十九年中の事業にして、翁、時に三十有四歳也。京都織物會社は、市に於いて明治初年織殿創始當時の眞摯なる先覺者的精神を繼承して、翁等の發企せしものにして、經營の規模は翁一流の企劃により極めて積極的に擴大せられ、その資本金五十萬圓は、當時の業界稀有の大資本にして、恐らく現在一千萬圓の會社創立に相當し、或ひは夫れ以上に相當す。翁は田中(源)、内貴氏等市の富豪の外、澁澤、大倉、淺野氏等中央財界の巨頭を大株主に加へたるが、澁澤子は翁と親密にして最初より會社の設立に太く盡力するところあり。内貴氏を最初の社長とし、氏辭任の後、子は出でて社長となり子の後、田中源太郎氏の就任を見たるが、翁は單に一重役たるに止まり、依然表面に立たずして、その經營につき應援し、明治二十、二十一年の外遊中に於ても、専ら會社の設備を整ふるため奔走し、會社將來の發展を圖るに餘念なかりき。

京都織物創立の趣旨は、精巧の國産品を生産して、外國品の輸入を防遏し、進むで、京都織物の精華を發揮して海外輸出の途を拓くにあり。當時、我が國策は條約改正問題を控へて、事毎に歐化政略を採用するに傾き、伊藤首相、井上馨外相等舉つて洋風を鼓吹し、政府者自ら、首相官邸に、鹿鳴館に、頻頻として夜會、舞踏會、假裝會等の催しを行ひ、國民の衣、食、住を舉げて歐米化せしめむとせし所謂西洋かぶれの時勢なりければ、翁や、澁澤子や、其の他發企人諸氏や、皆我が國に西洋婦人服の需要の將來必ず夥しかるべきを豫想し、會社の營業科目を先づ高級婦人服地の製織に置きて、彼の佛國里昂府の織物に譲らざる優良品を生産するを理想とし、次いで羽二重、縞子等の生産に力め、染、再製をも製織に合せ行ふこととし、社内に之が各工場を設け、織物は近藤徳太郎、再製は高松長四郎、染は稻畑勝太郎の三氏各主任技師として當るに決定。三氏は共に織殿染殿時代、舍密局の傳習生にして、就中、稻畑、近藤兩氏は明治十年、京都府より佛蘭西へ、化學工藝研究の爲め派遣せられたる留學生

京都陶器會社の創立

團中の俊才なりし也。

織物會社に次いで、稻畑勝太郎、田中原太郎、山添直次郎氏等と共に、翁の主唱し創設せるは京都陶器會社也。最初、北垣知事の斡旋により獨逸人を發企人中に加へ、日獨人の合辦事業として經營すべしとの議ありしも、後、多數の意見にて矢張邦人のみの株式組織となし、澁澤子もまた之に加入し、資本金二十萬圓を以て洛南深草村福稻に於いて設立の事となりつ。營業科目には、貿易向のものに力を入れ、洋式器具の生産を専らとせるが、こは彼の京都織物會社に於いて、婦人洋服地に重きを置きしと同様、歐化主義の時勢の然からしむるところたるやいふまでもなけむ。

京都の陶器事業は、舍密局の當時、獨人ワグネル博士主として之が指導に當り、「五條阪、粟田の名工は悉く博士の教へを受けて以來京都陶磁器界に一生涯を開き、七寶セブンスは今日の如く我が國特産品として多數海外に輸出するの盛況の源は茲に發せられ」たりと謂はれ、京都陶器會社の技師長佐藤友太郎氏もまた、

*前掲明石染人氏の「論文中」より引用

不幸解散す

稻畑、近藤氏と同じく當年の舍密局傳習生にして府より佛蘭西へ留學せし一人とす。氏は長崎の出。渡佛してリモージユンの陶磁器研究所に入りて技を研ぎしたりてふ逸話の持主なりき。會社は創設後一年、翁、外遊の途次、佐藤氏が思ひ出多きリモージユンに至り、最新式の製陶機械を購入し、會社の生産能力はこれにより愈、揚らむとせしに、後、數年にして、株主重役間に意見の衝突を來し、竟に會社は解散の止むなきに及びき。翁の曰、

經營難の原因

京都陶器の解散も、其の原因はあながち事業の不振ばかりでなかつた。株主や重役が無配當を覺悟して、腹を括つてしつかり遣れば、充分に成功の見込はあつたのだが大多數が目前の利益を逐うて、少し無配當が続くと、これでは困ると苦情を云ひ出すものだから、遣り通せなかつたのである。大體、事業といふものは、恚う、いふことでは、經營が出来るわけのものではないのだ。加之、當時は、一般に科學的常識は殆ど皆無だといつて可い位で、われわれが陶器會社に試験所を置いて大に製品の試験や研

究を行ひ、品質の改良向上を計らうとすれば、そむな試験をせられては困る。馬鹿らしい。止めてくれと云つて斯業者が苦情を持ち出して来る。理解を説いてきかしても中解らないで、到頭折角の試験所を叩きつぶしてしまつて、やれやれ厄介拂ひをしたと云つた調子だつた。織物會社の如きも、動力に水力を使ふことを私が提議した當時は、多數の重役は織物に水力などを使ふといふやうな亂暴なことがあるか。水といふものは急激に澤山出るときもあれば、緩漫に少量しか出ないときもある。そむなもので機械を動かしては、織物にむらが出来て駄目だと云つて反對した。重役ばかりでなく、堂堂たる専門技師までが反對するのだから、始末に終へなかつた。さういふ人達を相手にして新しい事業を經營していつた當年のわれわれの苦心は、今の人に談しても、ちよつと想像がつき難からうと思ふ。云云。

京都陶器は斯く短命なりしも、京都織物は、以來約四十年の星霜を經、大小幾多の試練に會ひつつ、現在に及び、その資本は漸増して五百萬圓(内拂込三百五十萬圓)に達し一ヶ年の製産高の如き昭和元年度は、五百四萬七十三圓餘(内譯、

製品四百四十萬五千四百五十九圓餘、加工賃六十三萬四千六百十三圓餘。二年度、三百九十四萬三千三百九十四圓餘(内譯、製品三百三十七萬三千八百二十六圓餘、加工賃五十六萬九千五百六十七圓餘)。三年度、四百六十萬二千二百二十九圓餘(内譯、製品三百九十六萬四千十一圓、加工賃六十三萬八千二百十七圓餘)に達し、經營の堅實と、製品の優秀とを以て、現在京都機業界の爲めに萬丈の氣を吐きつつあるを見る也。

四 京都倉庫株式會社と關西貿易合資會社

京都倉庫株式會社は、翁を始め、田中源太郎、市田理八、竹村彌兵衛、上野彌一郎、堀五郎兵衛氏等發企のもとに、明治十九年度に於る翁の創始事業の一として設立せられたるもの。社長に堀氏を擧げ、資本金十萬圓。京都府廳の倉庫の拂ひ下げをうけ、本社を下京區三哲烏丸西入に置き、營業を開始せり。これまで市には、此の種の會社なかりしを以て、集散貨物は問屋及び仲買人各自

關西貿易に
翁、全力を
擧ぐ

の倉庫、或ひは、小規模なる個人經營の運送問屋に積み置くの外なく、從てこの貨物を利用して、迅速に金融の便をうけ能はざりしは勿論、市内に米穀の不足せし際など、急に地方の米を持ち運ばしめ、小學校の物置又は體操場に之を積み、時に校内に商人相集りて取引を行ひ、其の受渡をなさざるを得ざるに至り、これが爲めに生ずる不利、不體裁は擧げて計ふべからざりき。

翁等の倉庫會社は、當面斯様な市商工業上の施設の不備を補ひ、惹いて市民の食糧政策上に具ふるため起されしものなるや言を俟たず。而して物資の金融に對して翁はその關係せる京都商工銀行をして、倉庫内に出張所を設けしめ斯業者が荷爲替の取組み、または倉荷證券による現金の授受に便益を與ふる等諸種の新施設を講じて至らざるなかりしより、市に於ける物資の集散及び斯界の商取引状態は、會社の設立によりこれらの設備の整頓を俟つて、全く積年の面目を一新するを得たりき。

翁は是に於いて、以上の機關を運用し、自ら手を下して物資交易の業に當る

關西貿易の
み合資組織
とす

べく、關西貿易合資會社の設立に全力を擧ぐることなれり。從來、内地取引は業界他に其の人なきを苦します。ひとり大仕掛の海外貿易に至つては、殆むど當年、市商工業界の處女事業とし之を譬ふれば不毛の原野を開拓するに似、成果の多きを期待すると同時、少なからざる危険を伴ひ、危険を懼れては何人も着手するを得ず。これが爲め、市の當業者は多年、手を束ねて他都市商人の跋扈するに委せ、市の特産品の如きすら、他商人の手によりて僅に輸出せらるるに甘むじ、京都貿易業界は依然萎靡不振の域を脱せざりき。翁の奮然、斯業に志せるは斯様な状態に慨するに出で、市の當業者が因循姑息の風を破り、斯界に新生面を開かむが爲め、他の最も困難とせし點に全力を擧げつ。即ち翁は、その創始せし諸餘の事業の盡く株式會社組織なるに反し、此の關西貿易のみを合資組織とし、翁、上野榮三郎、山田定七、中村榮助氏等の出資を以て設立するに及び直接事業に關係薄き人人の参加を求めず。而して當時日本商會といへるが貿易事業に従事し、逕信省より數十萬圓の補助を受けながら採算不利

翁の傾倒せし二大事業

官設鐵道の沿革

を以て倒れ、その後を承けし起立工商會社もまた不況のため營業の繼續不可能に陥りしを、翁は進むで買収し、これにより關西貿易會社の創立を行ひしものにして、本社を京都市三條御幸町西入に置き、各支店を内外の重要都市に設け會社の營業科目に就きては、輸出を主として輸入を主とせず、其の輸出は、玩具、織物、刷毛其の他の生産品とし、翁、自ら社長として愈々業界の第一線に立つこととなりける也。

五關西鐵道會社創設事業及び其他

鐵道事業は關西貿易會社の設立と相並び、明治二十年以後、翁の極力經營に當りしものにして、その詳細の叙述を次編に譲るとし、ここには翁が明治十九年創設の關西鐵道の事業一斑を記するに止むべし。

我が國に於ける鐵道の濫觴は、明治五年九月に開通せし東京横濱間約十八哩の官設鐵道にして、次いで明治七年五月に大阪神戸間。九年中には大阪京都間

私設鐵道

の各線開通を見、十三年に京都大津間を通じ、十五年に長濱關ヶ原間開通、十六年關ヶ原大垣間の延線工事に着手し十七年に長濱敦賀間全通。以上を通算し當時、官設鐵道の敷設哩數は僅に約百十二三哩に過ぎず。一方、中山道鐵道は十七年を以て敷設工事の測量を始め、揖斐、長良、木曾の各川に面して設計の行き悩みを來し、竟に中山道線よりも東海道線の便利なるを認め、政府が設計變更の命令を發したるは明治十九年に入りての事にして、これにより漸く東は横濱より西は大垣まで二百四五十哩。並に大津長濱間約四十哩の鐵道を各敷設するに決定を見たるが、之が開通までには前途ただ遼遠の感ならず。翻つて私設鐵道は如何にといふに、岩倉右府公の主唱により、華族に下賜せられし秩祿公債を以て資本とし、創立せられたる日本鐵道會社が、政府の指導と保護とのもとに明治十四年敷設工事に着手したる東京青森間四百五十餘哩の鐵道は、十九年には既にその半以上の業を終へ、官設鐵道の遅遅たるに比し遙かに優越の觀を呈しつ。加之、日本鐵道會社の發企に後ること二三年にして、前田侯

*此項、主として井上勝子の「鐵道誌」に據る

翁の官民共
營論

は北陸鐵道會社を起さむとし、こは不成立に終りしも、明治十八九年に山陽鐵道會社及び九州鐵道會社の相前後して創立せらるるに至り、民間の鐵道熱は頓に熾烈を加へつつありき。

翁の鐵道事業に意を須ふるや年既に久し。明治十六年には、その經營に係る「中外電報」の社説に於いて、翁は屢、經濟上、軍事上の兩方面より交通機關を完備するの急務を述べ、政府は須らく全國に於ける鐵道幹線の調査をなすべしと説き、政府に對し幹線の敷設方針の決定を督勵すると同時、之が敷設に官民共營の必要なることを力説し、明治十七、八兩年度引續き社説を以て輿論の喚起に努め、全國の幹線鐵道を五つに分ち、關東方面は既設の日本鐵道會社を更に擴張せしめて之に當り、關西方面は關西鐵道會社。九州、四國、北海道の各方面にても夫夫鐵道會社を起して、官民協同のもとに鐵道事業の統一、完成を期すべきを主張せしが、翁は以上の主張を實行に移し、愈同志とともに、明治十九年、關西鐵道の敷設に着手するに至れり。

關西鐵道の
計劃

北海道開發
に關する諸
事業

關西鐵道最初の計劃は、極めて雄大にして周匝。東は四日市を起點とし、北は丹後宮津港に及び、途中、山陰幹線と連繫して西は山陰道の重要都市に通じ南は四日市よりし、飛び、米、か、し、を越えて京都に達せしめ、京都にて更に山陰線と相合して循環狀をなし、貨客の集散を行はしめむとしつ。而して翁の所期は四日市よりして中京の財力を引き入れ伊勢一圓を京都の勢力範圍に置き、一方また浦塩斯德及び北海道の物資を海路宮津港に引きつけ宮津より關西鐵道に積載して四日市に出で名古屋と連絡を取るにありたりとす。會社の資本金を五百萬圓とし、株主を京都、滋賀、三重、東京等に募りたるが、大株主には翁並びに諸戸清六、三井三郎助、田中源太郎、塚本定兵衛、山中次右衛門、小泉新助九鬼紋七氏等の顔觸を揃へ翁は取締役となり、銳意事業の進捗を圖りしが、時勢はいまだ斯かる雄大なる鐵道計劃實現の域に達せず、幾多の障礙に會しつ四日市草津間の敷設を見るに及びき。

翁の明治十九年代に於ける創設事業は、大要右の如くなるが、この外になほ

外遊の途に
就く

記すべきは、此の年、翁が北海道廳の委囑に應じて、北海道製麻會社の設立に
參劃し、重役の一人として盡力せしことなりとす。翁は後年、北海道航路開拓
北海道鐵道、十勝開墾(合資)等各會社の創立に際し之が發企人に擧げられ、其の
經營に參與せしが、翁の北海道開發に關する諸事業に斯くまで熱心なりしは、
彼の地と京都との物資の需給關係を緊密にし、これにより北海道を市の商工業
者の勢力範圍に置かむとせる翁の深慮に出で、その關西鐵道が最初の計劃とし
宮津港まで鐵道幹線を達せしめむとしたる如き、また以て翁が此の政策の一端
を現はせるものに外ならざりき。斯くて、翁は京都の繁榮を期するがために、
各種事業の發企に次ぐに發企、創設に次ぐに創設を以てし、世人をして翁の活
動の奈邊に底止するやを疑はしめ、當時、京極の寄席に流行せるヘラヘラ節に
「何でも會社は濱岡さむ」と唄はしめつつ、明治二十年七月、翁は飄然として外
遊の途に就くに至れり。然かも外遊の擧は、翁にありては事業の休止にあらず
休止の反對なる活動を意味し、翁は、其の各關係事業の一應目鼻のつきたるに

安むぜず、更に進むで將來に於ける各事業の發展資料を得むとし、出でて大に
海外に活動せむが爲め、西航の客となりしに外ならざる也。

第五章 翁の外遊

一 外遊の用件

鵬程萬里の
悦び

翁の外遊を志すや多年。いくたびか夢は西歐の空に馳せたりしも、然かも容易にその志を果す能はざりしは、家に老いたる嚴君のおはしまししと、年少にして既に社會の第一線に立ち責任多き事業經營の衝に當りしためなるに依る。今や先考の服喪は滞りなく終はり其の事業また一段落を告げ、後圖を同志の諸氏に托して心置きなく萬里の鵬程に就かむとするに至り翁の悦び知るべき也。當時の我が國は最も西洋文明の輸入に忙しき時代なりき。既説の如く明治初年以來、醫事衛生、化學工業、其他學術技藝上の最新知識を西人に學び、致致として洋風の新施設に力め來り、明治十八年末、初めて第一次伊藤内閣成り條約改正を提げて其の大政綱とするに及び、國民が衣食住の様式までも、擧げ

翁、井上侯
に献策す

て歐米のそれを踏襲し、模倣せすむば止まざるの觀を呈しき。十九年翁東上、井上（馨）新外相を訪ふて條約改正を論じ、國庫の増收を計り且つ民間の生産事業の振興を期する爲めに、政府は須らく先づ關稅を引上げざるべからずと献策し内地雜居の如き即時之を許可するも何の差支へなしと云へるに、外相、翁の意見を可とし、後、英公使パークスに會ひ交渉を開始するや、パークスの曰、貴官の言にはわれ敬意を表するも、貴國には未だ國民生活の基準たる民法や、商法や、民事訴訟法や、其の他の法典すら制定せられざるにあらすやと。外相返へす言葉なく、赧然として目下法典調査會にて調査中に候と答へて止みにき。調査は種種の方面に亙り、或ひは我が國古來の法規法令を調査し、或ひは慣習民情を調査し、而して調査資料の大部分が歐米の現行法にあるを見、結局、新法は佛蘭西乃至獨逸の法律に範を取りて制定するの外なきに及び、調査よりも模倣といふの當れるが、模倣するにせよ。或ひは模倣せざるにせよ。國民日常生活より、國家の法制に至るまで、之に關與する者は一應洋行して、彼地の

翁の同行者
と其の行程

實情を知るを急務とし、従つて翁の外遊も、また斯かる時代の必要に促されて
決行せられしや謂ふまでもなしとす。

翁の同行者は、佐藤友太郎、稻畑勝太郎、高木才藏、高松長四郎、近藤徳太
郎の諸氏なりき。而して一行、概ね翁より年少の人人なりければ、翁は團長格
となりて行程を定め、明治二十年七月、神戸港を後にし、先づ亞米利加に赴き
次いで佛、英、獨を歴遊し、伊太利、白耳義、埃太利等を各視察して、翌二十
一年五月に歸朝せるが、一行は外遊によりて、親しく海外先進國の文物を見、
各地の状況を視察するに止まらず。その主たる用件は、彼地に於いて夫々然る
べき當業者に會ひ、専門的施設を調査し、事業上の用件を果たすにありしかば
ほどほど異國の煙霞を楽しむが如き暇とてはなかりき。殊に翁は、その關係せ
る事業の範圍の廣汎なりしものから南船北馬、一層の繁劇を加へたりと見ゆ。
翁は外遊中に於いて、歐米の各商業會議所の制度、組織、並びに之が實際上
の運用に關し、精緻綿密の視察を竟ぐるごころありき。これ我が政府が、當時

商業會議所
條例の基礎
的調査

歐米の各商
業會議所の
實地

商業會議所條例の制定に着手しつつありしが爲めにして、京都商工會議所會長
として令名ある翁が、其の貴重なる經驗に立脚して行へる調査の結果は、官民
ともに多大の期待を以て之を迎へざるを得ざるなりき。翁の曰、

外遊して段段實地に就いて調べてみると、商業會議所も國によつて其の組織や機能
を異にし、就中、最も生氣に富み活動の盛むであつたのは米國であつた。米國では會
議所の建物の階下はブルース即ち會員組織の取引所であつて、會議所へは取引商人な
どが絶えず出入して、宛ら取引所の延長のやうな賑かさであつた。次いで私は歐羅巴
へ渡つて視察したが、白耳義の如きは會議所の建物の敷地の地租を免じ、議員候補者
は皇帝の勅裁を経るといふやうな風で中中權威を持つてをり、佛蘭西はまた會議所内
に生糸検査所等の設備を置き斯業者の監督や指導に當つてゐた。私はわが國では白耳
義と佛蘭西との長所を合せた極めて整頓した組織を探ることが最善であると信じ、歸
朝後澁澤子に相談し商業會議所法の草案を執筆し、之を農商務大臣の手許に提出して
置いた。當時の大臣は井上馨さむであつたが、商業會議所條例は、斯くして明治二十

三年九月陸奥農商務大臣の時代に發布せられたのである。議員も此の條例によつて公選となり會議所の基礎はこれで確立したが、それまでの京都商工會議所時代は寔に貧弱で、經費は組合の定款に依つて、組合から徴收することにしてあつたが、最初は一ケ年に僅か五六百圓位しか集らず、私など重なる關係者が醵金したり寄附したりして漸く書記の給料が渡せたものであつたのである。云云。

次いで翁は獨逸にて、染料其の他各工業施設の方面を視察せるが、京都織物會社の機械購入及び其の他直接業務上の用件にて、最も長期間、翁一行の逗留せしは佛蘭西なりき。京都織物は前年創立當時の營業方針に基き單に手織りの製織に従事すべく、翁が外遊に當り田中、内貴氏等の重役より托せられたるは里昂府にてジャカード式の織機五十臺を購入するに過ぎざりしも、翁は里昂府に至り機械工業の實地を視察するや、手織り以外、京都に於いて機械事業を大規模に起すの必要を痛切に感じ、機械機五十臺並びに佛蘭西最新式の紋揚げ機械五十臺を始め、縋子の再製に要するロールヤ、毛立ての機械や、其の他の夥

里昂府にて
織機注文

しき機械器具はもとより、これらの機械を運轉するに必要なる、インジン、ボイラの類までも片つ端より、翁は獨斷を以て、或ひは購入し、或ひは注文し、一電一報、出荷通知を頻發し、在京都の重役連をして呆然たらしむるに至れり。翁の曰、

歐洲機業の本場に於る嶄新の設備を視て、あまり私が思ひきつて新らしい機械器具を續續購入するものだから、濱岡が里昂で何を注文してくるか解らぬと云つて、重役間に大恐慌を起してゐた模様である。里昂の専門家も、京都織物會社で、製織も、染も、再製も皆一所に造るのだと聞いて驚いてゐた。元來外國では、この三つは皆別箇の會社で造ることになつてゐたからである。滯留期間、機械は近藤、染は稻畑、再製は高松の各氏が彼地の技師から夫々機械の組立や使用法を學び、貿易の方面は高木が研究し、私は全體を總括して、苟も善いといふ事は何の躊躇するところなく、極めて大膽に獨斷専行したわけである。云云。

*「輕雲外山
翁傳」参照

翁が大阪の實業界の雄、外山脩造氏に邂逅せるも、此の外遊中の事なりき。
*外山氏は紐育中央公園に於いて電氣鐵道の模型を見、他日之を我が國に適用し
て大に交通事業を起さむとし、端なくも翁と巴里のオテルペレーに會せるもの
にして、氏は此の時翁に京都大津間の電氣鐵道敷設を勧めたりと傳へらる。翁
が歸朝後、彼の高木文平氏に京都電鐵を創立せしむるに當り、先づ外山氏の贊
助を求めしは右の事情に基きしに外ならず。なほ其の他に交通事業の方面にて
は、翁が從來の官民協同の鐵道經營論を抛ち、鐵道國有の主張を抱くに至れる
も、此の外遊中、親しく歐米の現狀を視察調査せる結果にして、翁の識見はこ
こに於いて一進境を示すに至れりとすべく、實務の方面にては織物以外、關西
貿易會社の事業に就いて直接當業者に就き、數多の交渉を爲すところあり。別
に京都陶器會社の所用をも辨する等、前後一箇年の外遊期間は、翁にとりては
極めて多事、多忙。従つて其の收穫また常人の企及し得ざる底のものありて存
しき。

其の他の視
察、調査、
用件

赤毛布ロマ
ンス

飛むだ失敗

ニ外遊中の思ひ出

翁を團長格とせる外遊の一行は、稻畑、近藤、佐藤氏等、概ね明治十年京都
府の派遣留學生として、一度び彼の地に遊びし人人なりしにより、相當勝手が
呑み込めて、旅程はまづ好都合に運ばれしものから、然かも社會百般、進歩の
速度の急激なる彼の地に於いて曾遊以來彼れ是れ十年の歲月は、到るところ面
目一變の觀を呈し、一廉の外國通をして往往赤毛布の昔に返らせ、飛むだ失敗
を演ぜしめしことも稀ならざりき。

一行が市俄古に着せしときの如き、ホテルにて部屋を間違へ、翁は他人の部
屋をわが一行の部屋なりと思ひ、ノックせずして扉を排し、窺窺たる英國美人
が半裸の化粧姿を室内に見出だし、「これは失禮」とばかり、驚いて逃げかへれ
ることあり。やがて間もなくホテルの番頭は翁一行の部屋を訪ひきたり、件の
英國美人は紳士ながしの令嬢にて、こちらのお客様が、前刻よりいくたびと

なく無断に扉を開け、部屋内を覗き込みたりとて、非常に立腹し、嚴重なる抗議を申し込まれしゆゑ、お氣の毒ながら、即刻此のホテルを引き拂はれ度しといふに、翁、内心不審に堪へず、わが龜相をなしたるは唯の一度なりしにと、そつと一座の人人の顔を見るに誰れも彼れも、皆赤面して頭を掻きをりて、番頭に辯明するをきけば、部屋違ひをなせしは翁のみにてはあらざりけり。翁の後にて、高木、高松、佐藤、近藤氏等もまた、宛ら申しあはしたらむやうに、ひとりひとり部屋を間違へ、邦人の常とて、翁とひとしくノックをせず扉をあけ、艶やかなる化粧姿を見ては、逃げ出したるを、その令嬢の眼には、東邦人の顔のこととて、恰も同一人が何遍となく部屋を覗き込みたらむがやうに見へたるなりけり。先方の立腹せらるるも道理千萬ながら、悪る氣ありてせしことならねばとて、英語に熟達せし佐藤氏が一行を代表して、令嬢に會ひ、部屋違ひの筋道を辯じて諒解を乞ひ、やつとのことにはホテル立退きの憂き目をまぬがれしが、その上、その夜は、和解のためにお茶の會を催し、令嬢を主賓とし

て招待し隔意なき會話を交換などして、久方振に羈旅の寂寞を慰め、席上にて佐藤氏は、日本の道徳的ローマンスをおきかせ致すべしとて、件の令嬢の前に「桃太郎」、「かちかち山」のお伽ばなしを鹿爪らしく、得意の英語にて辯じ立てたりしとぞ。

長途の旅行中、斯様なる失敗は、まだ無難にて、思ひ出としても、愛嬌のある方なれど、血氣盛りの一行、多少彼地の事情に通じをれるだけに、時として所謂なま兵法大疵の基、今日顧みて背に冷汗を覚え、お互に生命冥加なりしを喜ぶやうなる、念の入りし失敗もまた無きにあらず。翁の曰、

念の入りし
失敗

失敗談も随分多いが、そのうちで今なほ忘れ難いのは亞米利加での出來事である。

明治二十年の初秋とおもふ。ボストンの附近でサウス、マンチエスターの市外れにシルクの工場があり、それを見に行かうと云ふ事になつて一行は汽車に乗つたが、眞夜中にマンチエスター驛を乗り越してしまひ、ボーイに聞いて始めてそれと氣がついて二哩ほど驛を歩き過ぎたところで途中下車し、線路傳ひで逆戻りを遣つた。雨はシヨ

ボシヨボ降るし暗さは暗し、遠く前方に點綴する市の灯をころあてに、詩を吟ずるやら、俗諺を怒鳴るやら、寂しいものだから一行空元氣で勢をつけて歩いて行くうちに、マンチエスター驛に近づくに従ひ、列車の線路は右からも左からも寄つてきて脚下一帯に錯綜しどれがどれやら解らないところへ、轟然として汽車が疾走してきた。これはと思つたが、逃げた方がいいのか、このままゐる方がいいのか、どの軌道レールをどう走つて汽車がくるのか全く見當がつかないので、一行はそのまま軌道と軌道との間に平蜘蛛のやうに平太張つてしまつて全く生きた心地はなかつた。と汽車は恐しい勢ひで疾風のやうに通つて行つた。ヤレ嬉しやと皆が立ちあがつて少し歩き出すとまた汽車だ。また平太張る。かうしていつ轢き殺されるかわからないといふ危機一髪いふの恐しい目に何回か會つたが、幸ひドノ汽車もドノ汽車も、都合よく遣り過ごして無事に驛近くの廣場へ出た。この時は流石の元氣な連中も土のやうな顔色になつて、高松の如きは殆むど氣落ちしてしまつてゐた。

その時、廣場から遠くないところに家の灯が見えたので、兎に角、そこまで辿りつ

くと恰度開業したばかりのホテルであつたから、運よく露宿を免がれて一泊した。ところが一同寢に就くか就かぬに、けたたましく表の戸を叩く音がして目を覺まされてしまつた。まだ午前四時前後である。不案内の土地ではあり、調度も整つてゐぬ殺風景なホテルだし、てつきり泥棒に襲はれたに違ひないと思ひ、一同跳ね起きて、ピストルを取り出すやら、護身用の匕首を握るやら、とりどりに息を殺して様子を窺つてゐたが、やがて戸を亂打する音も止み、起きてきた家の者と家のうちそとで聲高に話をする聲が聞こえてきたので、さては泥棒ではなかつたかと、ホット胸を撫でおろしたことである。

拂曉、一行はこの宿を出ようとして、昨夜から生命からがらの重なる御難を思ひ、兎に角生命が無事であつたのは芽出度い、ひとつお互に健康を祝さうではないかといふことになり、ホテルの主人に酒を命じたが、ここは禁酒法が施行されてゐるので酒がありませんといふ。よほど據なくラムネか、サイダーか、水つばいもので苦笑しながら乾杯し、それから朝早くシルクの工場へ馬車で出かけた。馬車が阪を登つて行くと職工

らしい男が三三、五五現はれて崖の上からさかむに石を投げる。あぶなくて致方がない。馭者は青くなつて馬車から降りて呉れと云つてきかない。後で解つたのだがこれはシルク工場の職工が一行を支那人と間違へてしたことだつた。馬車から降りると、一層危険なので馭者を宥めたり、叱つたりして無理に工場まで走らせ、刺を通じて主人に會つたが、この主人といふのは獨身で至つて親切な男で、われわれの遠來をよるこび愛想よく話をしてくれ、紙風琴など鳴らして一行を接待してくれた。そこへ工場長が現はれて前刻投石した罪を詫び、視察後、その歸途を職工一同整列して、見送つてくれた。この時ほど嬉しく思つたことはなかつた。さうして我我は斯様に過を改むるに憚らない潔い一種の米人氣質に深く動かされたのであつた。云云。

三 羅馬法王と伯拉爾國王に拜謁

滯歐中、一行は、明治初年の京都に於ける歐學校の舊師レオン・ジュリー氏に邂逅し、氏より里昂の各織物、染料工場等視察の案内をうけ、種種の便宜を得

たるが、就中、此の地にてマルナスといふ人の經營せる染工場は約一千人の就業員を使役し、設備萬端頗る整頓せる工場とて、往年稻畑勝太郎氏が留學當時ここに入りて實地の研究をなしたることありしたため、一行はマルナス氏より極めて懇篤なる待遇をうけぬ。氏は元、貧しきパン焼の職人より身を起したる人なりしより、昔の境遇を忘れざらむため、立志當時の舊棲地なるリオンの郊外に別業を設け、その邸内にパン焼き時代の家を保存し置き、をりをり、其處に赴きて、奮發心を振ひ起すすがとなしけるが、翁等がリオンを去らむとする時、惜別のため氏は一行をその別業に招待せり。

氏に一令嬢あり。芳紀二十四にして才色ともに世にすぐれ、夙にカトリック教に歸依すること篤く、尼僧として神に仕へむとする志切なりしも、父君の許しを得ざるため、せめてもの心やりに、社會教育の事業に一身を捧げむとし、當時は父君の經營せる工場の労働者のことも達のために、授託所といふやうなるものを設け、嬢は専らその世話をなすを樂しみとしつつありしが、一行が送

別の席上に、嬢は父君とともに列席して、懇ろに翁等を接待しき。翁はこの異郷びとの優しく温かなるころづくしに感激し、夜更くるまで歡談しけるが、そのとき、翁は此の交歡の記念にも嬢の持てる白きハンカチフの中央に「誠」といふ字を書し、なほその空白に、「國と國、海路を遠く隔つとも隔てぬものは誠なりけり」といふ即事一首をもつて與へ、佛語に譯して其の意を語りきかせけるより、一同手を拍ちて興がりつ。その夜は月も明かりきと、いふさへ懐しの思ひ出にこそ。

翁等一行が、レオン・ジュリー氏の斡旋にて、羅馬法王に謁したるも、また彼の風光明媚なる佛蘭西のカーヌに滞留中の南米伯拉爾の國王に謁見せるも、共にまた此の外遊中のことなりき。法王に謁謁の際、一行は宮殿の莊嚴なる結構と基督舊教の様式に則れる種種の典雅なる儀禮に目を眩せしめられつつ、法王より懇懃の握手を賜はり、我が國の商業貿易關係等に就き、さまざまの下問をうけ、いたく法王の知見の該博なるに驚きしが、翁等は退出せむとするに臨み

羅馬法王に謁謁

法王より、このほど、予の誕辰七十年祭に、貴國の 皇帝陛下より、使臣西園寺公を遣はされ、御丁重の祝賀を寄せられき。卿等歸朝して 陛下に拜謁の砌予が深厚の謝意を表しむる趣をよろしく 陛下に執奏せられよと云はれたるに、一行太く恐縮し、宮殿を辭去して後、いづれも顔見合せて流るる汗を拭ひもあへざりけり。

伯刺爾國王に拜謁

伯刺爾國王に謁せし際は、國王を侍從の一人なりと間違へて一層恐縮せし逸話あり。一行は御旅館を訪ひて謁見の間に入れるに、極めて謙讓なる物腰にて翁等を席に迎へし紳士ありければ翁は、貴下の御取りはからひにて今日拜謁の光榮に浴することを厚く感謝す。さて陛下は、ごなたさまなりやと問ひたるに、とく紳士は、徐ろに口を開いて、陛下は陛下ですと答へしより、翁は始めて、此の紳士の國王にてありしを知り、狼狽してその無禮を謝したるが、王は微笑を含みて、毫も意に介せらるるところなく、それより一同に對して種種歡談せられ、弊國は軍備といへば僅に軍艦二隻を有するのみなれど、國內には天産に

翁、卒先して伯刺爾の開發事業に投資す

富み、特に珈琲の産出は世界的に名高し、卿等も一度來遊しては如何と、國王より懇ろに勧められき。後、數年にして同國は共和政體に革まりしが、翁は此の時、國王の溫容と、その勸奨の辭とを腦裡に印して忘れず。我が國朝野の有志者に先むじて、翁が伯刺爾の富源開發に着眼し、夙に資を同國に投じ、若干の土地を購入して、これが開拓に當り、また、商業會議所會頭として、南洋の移民事業に聲援し、我が國人口問題の解決に力を濺ぎたるも、當年に於いて、斯かる奇しき因縁の結ばれたりしに依れるになむ。

四翁の疝癧玉を破裂さした話

外遊當時の思ひ出のうち、特に興味あるは寛厚なる翁が、珍らしくも疝癧玉を破裂せしめし珍談なり。翁の曰、

奥太利で土産品に、日本の煙管のやうに太い口の開いてゐる彫のある名物のパイプを五六本買つて鞆に入れておいたが、國境のストラスブルグといふところで税關吏に

疝癧玉破裂の珍談

調べられた。税關吏が課税品は携帯して居ないかと聞くから、僅かに五六本のパイプのことであり、私は別に氣にも止めてゐなかつたので、持つて居ないと答へると、鞆の中をまぜ返してパイプを取り出しこれは乍麼かと云つて詰問し規則に依つて税金を徴收するといふ。私は携帯品を調べる態度や何かが非常に氣に障つた上に、いづれこのパイプを持つて佛蘭西に歸り、マルセーユから出發するのだから、ここで税金を拂ふ必要はないと云つても、税關吏は規則だから徴收すると頑張つてきかぬので竟に立腹し、私はそのパイプを鋪石に叩きつけて壊はしてしまつた。

すると税關長が遣つてきて、私を宥め、そんなに立腹せられては困る。實はこのあひだ貴國の大官や富豪がここを通過せられた際、課税品は無いかと聞くと無いと云はれたので、左様かと思つて荷物を明けると、葉巻やナイフが行李に一杯詰つてゐたやうなことがあり、以來嚴重に調べることになつたのですと理由を語り、こんなパイプは課税したところで一箇に一フランかそこら僅かなものなのに、怒つてお壊はしなつて、大變な御損であつたと氣の毒がつてゐた。さうからする間に接續の汽車は出て

第 参 編

自明治二十二年、至同四十三年

しまひ、その汽車が最終列車だったので一晩其處で泊らなければならなくなり、晚餐に一同は、税關長は感じのよい男だから、ここへ呼んで一杯吞まさうぢやないかと云ふことになつた。怒つたおかげでパイプを壊はしたり、ホテルの支拂をしたり、一晩用事もないところで時間を空費し、堪忍といふことの大切さをつくづく感じ、それ以來私は一層忍耐といふことに意を用ひた次第である。云云。

第壹章 翁の政治的事業的發展時代（上）

一 明治二十二三年の不景氣

翁の海外に遊ばむとするや、京都全市の官民有志は祇園の正傳院に會して惜別の宴を張り、大に翁の行を壯にす。席上、翁は起つて有志の厚情を謝し且つ盃を舉げて云ふ。不肖の出發に際し斯くも多數諸君の貴臨を得欣然として交驩せらるるを見るは寔に愉悅に堪へず。知らず、他日不肖の歸朝を迎へらるるに當り、果して世は今日の如く好景氣にして諸君の意氣また現在の如く軒昂たるを得るや否やを。財界の風雲且にして夕を保し難し、諸君夫れ自愛せられよと。翁は斯くて滯歐一ヶ年餘、明治二十一年五月豫期の行程を了へて歸朝せるが、翻つて此の一箇年間に於ける我が經濟界の推移を見れば、翁が當時の言は、單に一片の諧謔にあらず、また所謂杞人の憂にてもあらずして、翁の斯界に對す

翁、好景氣
の反動來を
豫察す

好景氣の頂上

る先見の明の歴歴徴すべきものあるを覚えしめき。即ち好景氣は翁の渡歐せしその時前後を以て頂上とし、明治二十年下半年末に於いて財界の低氣壓は既に株式市場に現はれそめ、株券の估價に變動を生じて一高一低常なく、二十一年上半期に至り、大勢なほ従來の情力に支配せられて上調子を脱せざりしも、翁の歸朝せる頃には、最早や商況一般、其の足取りに疲れを生じ、不況の襲來を蓋はむとして能はざる状態にてありき。

内地雜居の聲に動かさる

好景氣は前編に述べしが如く、政府の貨幣政策即ち紙幣切斷の成功に因由し當時、正貨の蓄積潤澤にして金利の低落せし關係上、會社事業の勃興、株式熱の沸騰となりて招來せられしものに外ならず。明治二十年に於いて、既にその好景氣は絶頂に達しつつ、なほ多數者は内地雜居の聲に動かされ、今のうちに競ふて新事業を起し置かざれば、間もなく外人の手に利益を壟斷せらるる惧あるべしなどいふ説を立て、總じて前後の分別もなく、會社を濫興して株式を募りしより、果然、これが反動は資金の固着に因由する金融の硬塞より生じ、不

財界生色なし

況は忽ち株式市場に反映し、二十一年には漸次一般商業界に波及し來りしものなりとす。

二十二年には米作凶歉のため米價の昂騰を告げ、二十三年愈暴騰して多額の外米輸入を餘儀なからしめしが、加之、米國の購銀條例に依る銀貨騰貴のため外國爲替相場に激變を起したるより、兩兩相待つて大に正貨の海外流出を促し生糸の輸出もまた不振を極めしかば、金融は逼迫する一方にて、恐慌來の聲は各方面に起り、財界の生色を失はしむるに餘りありき。

彼の好景氣の唯中に於いて、夙に此の反動の到るべきを看破し、成金連中に頂門の一針を惜しまざりし翁は、歸朝早早、いまだ不況の斯くまでに甚しからざる以前、斷乎として其の關係事業に緊縮方針を取り、徐ろに財界の機運の轉換するを待ちつつありしが、翁の勃勃たる進取の氣象は、徒らに手を束ねて晏如たるを許さず、不知不識、新生面に馬首を轉ぜしむるに至りき。翁が事業界より政治界に進出せるは、即ち此の時のことにてありける也。

翁をして馬首を轉ぜしむ

二翁、中央政界に出づ

翁が京都市政の方面に打つて出でしは、我が國市町村制の發布の翌年即ち明治二十二年にして、次いで二十三年の我が國最初の衆議院議員選舉に、翁は上京區より候補者として名乗を擧げき。

當時、市に阪本則美といふ人物あり。北垣知事の前任地高知縣の出身者にして知事が京都府に轉じ來りし際、氏も共に京都に來住し、疏水事業などの用務に従ひつつありしが、知事は前任地以來の舊誼に酬うべく、氏を衆議院に出さむとして、翁にその希望をうち明け、翁は知事の希望を容れて己れの地盤を氏に譲らむとするの色あり。翁を議員候補に擁立せしは京都公民會の有力者なりけるが、翁が右の事情により出馬せざるを見て大に失望し、來りて翁に告げていふ。われわれは貴下のためにこそ全力を擧げて應援せむことを期したるなれ、貴下の代りに阪本氏を後援するが如きは思ひもよらず。貴下にして若し飽く迄

も出馬せじとならば、公民會も茲に斷然解散するの外なきのみと。翁止むなく阪本氏に會見し、事情右の如くなれば、足下を援助せむとせし余の微衷も施すに餘地なし。今日まで余等が同志とともに組織し來りし公民會を、おのれ一個の行き懸かりのために瓦解せしむるは義として許さざるところなれば、足下これを諒せよと告げ、氏は貴下の厚誼を感謝す。この上は互に正堂堂君子の争ひを争ふべしと答へ、双方公民會より立候補せる結果、阪本氏は敗れ、翁は大多數の投票を得て當選したるなりき。因みに、公民會は當時京都府下に約八千有餘の會員を有せし最も有力なる團體にして、府下の代議士定員八名のうち七候補者を會より推し、田中、石原、神鞭、松尾の四氏は郡部より、翁と中村榮助氏とは市部より、以上六人の當選者を出だしたりといへり。

當年の政界は、財界の萎靡不振なりしに反し、活氣充溢の觀あり。明治二十一年二月、多年野に在りし大隈重信(侯)の入閣に次ぎ、同年四月伊藤首相は挂冠して黒田清隆内閣の成立を見、翌二十二年二月、憲法發布の盛事あり。黒田内

第一議會の形勢

閣の事實上の首相は大隈外相なりしが、外相の條約改正に關して物論を招き、竟に處士の投彈により、その隻脚を失ふや、黒田首相は辭職して三條公臨時首相となり、同年十二月第一次山縣内閣の出現となり、二十三年十一月を迎へて我が國最初の國會開設を告げたるなりき。

第一議會の形勢は如何といふに、山縣首相は人も知る超然内閣の本尊として作戦計劃に怠りなく、之に對し反超然内閣の急先鋒板垣(伯)立憲自由黨を起して大同協和會舊自由黨系、舊愛國公黨系の人人を打つて一丸とし、改進黨の四十餘議員と聯盟して議會の大多數を占め、政府攻撃の巨彈を放つに決せしが、民黨が斯く一致して火蓋を切りては、政府は敗衄を免る能はざるものから、山縣系の策士が暗中飛躍は頻りに行はれ、超然内閣の本尊、いつしか議員買収の御開山となるに及び、暗雲政界の一角より瀰漫して雨か風か、國會の前途容易に豫測すべからざるものあるに至れり。

民黨豫算削減を以て突

翁の出馬せしは斯かる政界多事の際なりき。果然、議會は民黨の痛烈なる政

翁、田中氏等の活動

府攻撃に始まり、第一に外交問題即ち大隈(侯)失脚後の條約改正に對する質問より、次いで豫算案に及べるが、豫算委員長は自由黨の大江卓氏、理事は改進黨の尾崎行雄氏にしてその調査辛辣を極め、總豫算八千餘萬圓中より八百萬圓の削除を主張し、政府側は、陸奥農相を起して、板垣(伯)を説破するに力めつつありしも、民黨は結束して徹頭徹尾政府を窮追して止まず。形勢愈々切迫し來り、人をして憲法發布直後の議會は到底解散の外なかるべく想はしめき。而して此の時、奮然議席より身を挺して立ち不偏不黨の見地より極力調停に盡くしたるは翁等が同志と共に組織せる大成會の人人に外ならず。就中、翁の盟友田中源太郎氏の如き、得意の計數的、理財的智囊を傾けて總豫算の修正案を編成し、翁並びに三崎龜之助氏等この修正案を提げて斡旋せる結果、竟に民黨の削減額を六百五十萬圓に止め、陸奥(伯)の板垣(伯)説得の奏功せると相俟つて、さしも急迫せる政局を切り抜け、議會の解散を免れしむることなれり。以來中央政界にありては、田中氏は常に得意の理財方面の調査に當り、翁は専ら朝野の間に

奔走して事を纏め、兩人輔翼して國事に竭くせるもの尠なからず。明治二十四年十二月、松方内閣により第二議會の解散となり、翁は後、長く衆議院に出でざりしも、明治四十四年第二次西園寺内閣時代に再び議員となりて、中央政界に活動せしが、その次第は後編に於いて述べむ。

三 京都商業會議所會頭としての事業

京都商工會議所は翁等の創設後九年、即ち明治二十四年を以て、商業會議所條例の發布により、組織を變更して、京都商業會議所と名稱を改め、翁を會頭に、内貴甚三郎、中村榮助の二氏を副會頭に擧げき。翁が當時の關係事業は、京都商工銀行、^{*}京都日出新聞社、關西貿易會社等を主とし、翁は専らこれらの業務を擔當して財界の不況に耐へ、斯界に着實なる發展の歩武を進め、就中、商業會議所會頭としての翁は、最も精彩ある新知識の所有者として、商工業者に對する指導誘掖を任とし、又常に日出新聞を通じて、或ひは鐵道國有を論じ

會頭としての
の貢獻

^{*}京都日出新聞社に於て翁を授け最も力を經營の方面に竭くし、終始變らざりしは翁が商事

迅報以來の部下たる豊高正方氏なりとす。氏は年少時代より翁の新開事業に參し、幾多の艱苦に耐へ社の基礎を鞏め、斯界に功勞多き人にして、現在引退して餘生を樂しみつつあり

或ひは外資の輸入を説き、諄諄乎として倦むところなかりしなりき。

回顧すれば翁の鐵道國有論の如き、當年の我が國にては宛ら空谷の跫音に比すべき先覺の主張にして、所謂大聲俚耳に入らず、「時事新報」は、その社説欄に、「濱岡光哲氏の愚論」と題し之を論駁して憚らざるしまつなりき。愚論か、愚論ならざるかは、後、十數年を経て事實の決定するところとなり、明治三十九年、第三十二議會の協賛のもとに鐵道國有法の公布を見るに至り、何人も翁の識見の時勢に先むすること甚しきものあるに驚きしが、識者を以て、我れも許し、人にも許されたる福翁門の才人すら斯様の謬見を有しつつありし當時に於いては、翁の外資輸入説が社會に何の反響を起さず、多數の人人は外資といふ言葉すら満足に解せざりしとてまた怪しむべきにあらざりき。然かも翁は毫もこれに失望せずして、不斷の熱心を以て斯界を啓沃するに力めたりしかば、明治三十四年五月、一先づ有らゆる公職より退きて、蟄居するに至るまで前後十年間、翁を戴ける京都商業會議所の事業は絶えず駁駁乎として進み、或ひは

翁を戴きし
會議所の事
業

當業者の輿論を率ゐて政府に建議し、或ひは政府の諮問に答へて緊密須要の政
策を具申し、常に全國の斯業界に魁け、我が國産業の發達に裨補せるの尠少な
らざりしや言ふを俟たず。

今、試みにその活動の一端を擧ぐれば、通信運輸の方面に於いて、政府に對
し東京京都間直通線の架設並びに山陰鐵道の敷設を促がしたるは、明治二十五
年五月にして、翌翌二十七年二月を以て京阪神間複線の急設を建議し、又市内
電話の架設に關しては明治二十六七年前後二回建議して之が急施を要求しき。
税制の方面には、明治三十年より實施の營業税に就き、當業者の申告高と收税
吏の査定とに、甚しき懸隔を生じ、相互に當惑すること夥しかりしより、京都
商業會議所はその間に立ちて之が解決に盡力し、更に此の機會に一步を進めて
委員を置き、全市の土地及び建物の賃貸價格を調査し、一定の標準を設定して
以來長く官民共にこれに準據するを得せしめたるが、その他官立工藝學校の建
設、實業練習生の海外増派の件を政府に建議し、明治三十二年十一月には、市

最も顯著な
る成績

内の實業家を勸奨して商工業視察のため海外に赴かしめ、また法制上の施設と
し商業會議所法以外、商法輸入税法等の重要事項に關し、政府に改正を要望せ
る如き即ち之にして、就中、府市の繁榮を計るために、政府をして、第四回内
國勸業博を京都市に於いて開催せしめ、同時に、平安奠都千百年の祭典を執行
するに當り或ひは衆議を纏め、或ひは臺閣の大官連を説き、百方奔走して至ら
ざるなく竟に所期の目的を達したるを、此の期間に於ける翁の活動の齎らせし
著大の功績とこそせめ。

四翁、京都電鐵敷設事業に參劃す

第四回内國勸業博覽會の開設、並びに奠都一千百年祭典の舉行せらるる以前
京都市内に於いて起されし事業として、最も注目すべきは電氣鐵道及び電燈事
業の創始とすべく、而して此の二大事業は、共に、前編に略述せしが如く、翁
等の協賛に力めたる琵琶湖疏水事業に、直接又は間接相關聯して企劃せられた

市の二大事
業

るものに外ならざりき。

電燈事業は大澤善助氏専ら之に當り、翁の歸朝せる明治二十一年には、既に氏は京都電燈の會社組織に着手し、翁は氏より參加の勸誘を受けしも、曩に滯歐中、フラクフォール市にて親しく電燈事業を視察し、以來、翁は此の種の事業はその公共的性質上市營或ひは公營を可とするの意見を抱くに至りしと、他に當時翁自身數多の事業を經營しつつありて、氏の企劃に參與するの暇を有せざりしなりき。唯電氣鐵道の敷設事業に至りては、主として舊友高木文平氏に對する情誼より、翁は田中源太郎氏とともに多大の援助を與へしのみならず、高木氏が該事業に着手するを得し其の發端を尋ねれば、實に翁の友情の賜なりきと謂ふも過言にあらざるを見る也。

翁の曰、

電鐵事業は外遊中、外山修造氏にも邂逅し、親しく斯業に關する彼地の狀況も視察して歸つたのであるが、自分が事業に直接當らうとは思つて居なかつた。そこへ恰度

翁と電鐵事業の關係

高木君が田邊博士に同行して米國の電氣事業を見て歸り當時まだ京都で遊ぶであつたので、私は田中(源)と相談し、一つ同君に遣らしては乍麼だといふことになつて、或日私は同君を料理屋から呼びにやつた。同君は早速來て話を聞き、それは有難いが會社を始めてまた借金取りに押しかけられるやうなことはあるまいかと小首を傾けたものである。何しろ同君は名産會社の失敗以來弱りきつてゐた際であるから、かやうな心配を抱くのも無理ではなかつた。私はさう心配するにも及ぶまい。君が事業をやるといふことに決心すれば、さしあたり無論金は要るが、その金は田中と私から出すことにしよう。それで君は先づ豫じめ市内の代表的の人達から應援を求めて置くがよい。それには恁う恁うすれば善からうと、自分の考へてゐた方法を同君に話したところ、同君は非常に悦むで、デハさう云ふ運びにしようといふことになつた。これが後に、市に於ける電鐵敷設事業の出發點となつたことである。

その方法は乍麼かといふと大變面白い。それから間もない或日の深更に、高木君は私の家の門を叩き、いそいそとして報告に遣つてきた。同君のいふには、前日鴨東の

万東樓といふのに高木自身の名で、市内の有力者全部を招待しておき、けふ定刻にそれらの人人が續續来てくれるのを待ちうけてゐて何分暑いさかりのことだといふので客の顔を見るなり、仲居に命じて手拭に氷塊を包むで出す(當時氷はまだ珍らしかつた)やら、冷たい呑物をすすめるやら、下にも置かない優遇振を發揮した。さて、恠うして十分機嫌を取つておいて、開宴となり、酒三行に及むでから、時分はよしと同君は席末に身をひいて、うやうやしく一同に挨拶した後、久しく私も御無沙汰を致してゐましたが愈々近く仕事をしたいと思ふので何卒各位の御配慮、御高擧に預りたいと切り出したものだ。満座は何の仕事が高木がするのか、それをドウ應援してよいのか一向解らぬが、心易い仲であるし、御馳走の手前もあり、いやそれは結構です。御役にたつことなら御遠慮なくと云つたやうな次第で、有耶無耶のうちに挨拶も済んでしまひそれから藝者の酌で盛むに酒杯の交換をやつて十二分に一同酩酊していま散會したとのことだつた。うまく行つた。うまく行つたと高木君は喜色満面だつた。

私や田中は、まづ之を序幕として、段段事業の計劃を進めて行き、さうして再び時

分を見計らつて、またもや高木の名で前に饗應した連中を万東樓に招待した。そこで前同様盛むに一同を御馳走して、さてこの時挨拶の段になつて、高木は仕事に就いていろいろ考へまして京都に電氣鐵道を敷くことが最適の事業であると思ひ、まづ木屋町線を敷くことにきめました。就いては今後萬事どうかよろしく御應援を願ひますと頼み込むものだ。満座は一議に及ばず、なゝるほど、そりや面白い、御盡力しませうといふことになつた。私や田中はそれを黒幕から見てゐたが、恠うして會社が出来て愈々株を募集することになると意外の好景氣で、株券にプレミアムが附くといふ勢ひで仕事はどむどむ進捗した。これが同君が後に電氣王とか電鐵王とか呼ばれるに至つた其の振出しとなつたのである。云云。

京都市電氣鐵道株式會社は、右の如くにして明治二十六年四月十一日、高木氏を筆頭に、樋口文助氏及び府下北桑の河原林義雄、大阪市の藤本一二の二氏を發企人とし、資本金三十萬圓株券一株五十圓、四分一拂込を以て、市内及び市近接の名區勝地に電鐵を敷設するを創立趣旨として之が許可を政府に出願し、

同年八月二十日認可の指令を得直ちに工事に着手せるが、線路敷設目論見書中には、疏水路鴨川落合南側を東へ、第四回博覽會開設場南隣を南禪寺水利事務所前迄の一項あり。即ちこれに徴し、我が國最初の電氣鐵道が、所謂世界の巴里に先むじて京都市街に敷設を見しは、取りも直さず翁等の隠れたる努力により市に開設の第四回勸業博覽會の人氣を當てこみて計劃せられし結果なるを知られ、今日顧みて何人も興味の津津たるを覺えずむばあらざるべし。

第貳章 翁の政治的事業的發展時代(下)

一 第四回内國勸業博開設の運動(上)

財界の景況は一陽一陰、循環して極りなきを其の常軌とし、米作の凶歉、銀貨の暴騰等に起因し正貨の頻りに海外に流出せる結果、明治二十三年末より沈衰の足取りを辿りつつありし斯業界は、不景氣の試練によりて、各方面の事業の整理すべきを整理し、その基礎の脆弱なるを一掃し終り、陰極まりて一陽の來復を見、政府及び日本銀行の金融市場救済策また相伴ふて奏效し、二十五年を迎へ、商況頓に活氣づき生糸製茶の輸出隆盛となり、銀行預金の増加、金融緩漫等の狀勢に促され、金利の低落は自ら企業の勃興を將來せむとするに至れるが、此の機運に乘じ、京都市に於ては、第四回勸業博の開設、桓武天皇奠都千百年記念祭典の執行、京都舞鶴間の鐵道敷設の三大目的を旗幟とせる活潑

*政府の公債一部償還、日本銀行の兌換券増發とすの手形割引等
的市の三大目

地の運動こそ喚起せられたれ。

勸業博と奠都祭典との舉行を要望して、先づ起ちたるは京都實業協會にして明治二十五年五月、會員有志は、京都市參事會並びに京都商業會議所に之を建議し、商業會議所にては翁直ちに役員會を開き全員一致を以て可決するや、進んで實業協會と力を協せて全市の商工業者を糾合し、此の年七月、商工同盟會を組織し、市當局と提携して、之が達成を期するに決定。更に京鶴鐵道敷設を加へて同會の三大目的とし、其の運動方法としては市内各商工組合の總會を、一齊に開設して其の決議を以て右同盟會に参加せしめ、目的貫徹のため委員を選出すること百六十餘名、委員中より常議員及び幹事を選擧し、博覽會、奠都祭典、鐵道の三部に分ちて各員全力を盡して、運動に當るに至り、其の規模の濶大にして組織の整備せるが上に全市協戮一致の熱中振を示せる點、疏水運河以來の事とし注目すべき也。

奠都祭典は京都市に限られ、他に競争者を見ず。その執行時期の如きも便宜

上多少繰合はすを得べく、商工同盟會にては、勸業博が或ひは明治二十七年に開設し難き場合あるべきを見越し、其の開設まで祭典の延期を決議せる程なりしが内國勸業博覽會の開設地は當時未だ京都市に限られず、又關西にも限られず明治十年第一回を東京にて開きし以來、引續き二回三回を東京に開き、先例を以てすれば第四回もまた東京に限られたりとすべく、之を關西に移さむとして關東方面の競争あるを豫想し、更に之を京都に開設せむとし、惹いて關西各都市の競争の激甚なるを豫想せざらむとして得ず。關東を排して關西とするには關西各都市の努力を要し、關西各都市を抜いて京都市とするには京都市民の大努力を要し、これが爲め委員を派して正面より政府に請願し運動すると同時、裏面より各地の競争者を抑へ、政府當局を動かすべき人物の活躍を必要とするが、必要より謂へば前者よりも後者。效果より謂ふもまた然り。而して翁は此の必要を満たす爲めには殆むど理想的の人物として局に當りしなりき。

これより先き、六月十八日。即ち京都商工同盟會創設の前月に於いて、京都

大阪、神戸、堺、大津の五商業會議所會頭發企のもとに、大阪市中之島なる洗心館にて關西各商業會議所會員有志の大懇親會を開き、劈頭第四回勸業博の開設地問題を議したるが、翁は此の日、副會頭中村榮助氏の外京都商業會議所議員十四名を同行して出席せしに、會員の間より各地の出席者は少數なるに、斯く京都側のみ多數にては勢ひ數に壓されて議事の公平を期し難きにあらずやなど云ふものあり。翁笑つて、左様の御心配があるやうならば京都側は余と中村との二名に減すべしとて、同行の十四人にその旨を含め去つて堺に遊ばしめつこれにより、發企會議所以外、鹿島、赤間關、高知、熊本等の各會議所會員を合して出席者六十七名を算し、まづ大阪商業會議所副會頭田村太兵衛氏は開會の辭を述べて後座長席を翁に譲り、堺の岡村議員起つて博覽會の開設地問題を説くに及びて、滿場頓に緊張し來り、中村副會頭は京都説を主張して熱辯を揮ひ、大阪側またこれに對峙して下らず、滿場兩説に分れ賛否の聲喧囂を極め來れる時、翁、徐ろに座長席より此の形勢を見、悠然として曰、全會一致ですか

翁の機智滿
場を啞然た
らしむ

ら別に異議はないと認めます、依てこれで議事を終りますと。會員驚いて京都大阪の二説いまだ孰れにも決せざるにあらずやと云へば、翁は之に答へて、京都は關東の京都にあらず。大阪また東京の大阪にあらず。本日は博覽會を關東關西その孰れに開設すべきかを議し、次いで關西に之を開設するために出席各會議所關係者は、互に協同して政府に出願する件を附議したることなれば、余は此の點に滿場の御異議なきを認め、依つて議事終了を告げし也。その開設地の京都たるを、將た大阪たるを共に枝葉の論にして他日の問題のみと云ひ放ちたれば、滿場しばし啞然として語なく、斯がて誰からともなく拍手の音破るるが如く起つて、會議はここに滞りなく終りつ。さしも險惡なりし場内の空氣も翁の意表に出でし答辯のために緩和せられ、一同うち寛ぎて宴に移りしが、酒盃の獻酬裡に、出席者は懇親會を今後時開くことを申合はせ、翁は更らに田村(大阪)副會頭をして次回を京都にて開催するの議を出さしめ、一同の賛成を得て、此の日は散會せり。

翁の策圖に
當る

翁の策は巧みに圖に當り、間もなく京都にて第二回の懇親會を開催したるが博覽會の開設地問題の劈頭議に上せらるべしと何人も豫期し居たりしに反し、翁は一言も之に觸れず、談笑怡怡として他事に互り、大阪側があせつて之を提議せむとすれば、翁はまだ早い、早いとて發言を許さず。けふはインクラインの見物、船が山へ登る設備を御覽下さい。晩は祇園の懇親會、京美人の酌は如何で御座ると云つた様に會員を歡待し、會員またこれに酬いて翁等を招待し、招むだり招ばれたりして、交、歡を盡くすうちに、一同いづれも自ら知らずして京都熱に浮かされ了むぬ。斯がて散會の日となるや、宴も果てむとする頃、翁は會員諸氏の遠來の厚意を謝し、語を轉じて、いかがです。博覽會を京都で開くのに、大態皆様に御異議はないやうですがと軽く切り出し、流石の大阪側がそれはともいふの隙なく一瞬の裡に滿場一致、第四回内國勸業博の開設地は首尾よく翁の筋書通り京都説に決定し終つてけり。

筋書通り京
都に決定

翁、東上し
て要路に運
動す

*京都開設希
望の意見書
の一節

二 第四回内國勸業博開設の運動(下)

翁は斯様にして悠悠競争者を屏息せしめたる一方、之に先むじて此の年五月二十八日、勸業博委員會を開き、翁は中村榮助、内貴甚三郎、中野忠八、西村治兵衛の四氏と共に、農商務大臣並びに大藏大臣宛に、博覽會を京都に開設の希望意見書を作成し東上委員として活動せしが、翁はまづ博覽會が東京にのみ開かるるの理由なきを述べ、第四回はこれを關西地方にて開設すべしとて、その開設場所に須要なる三要件を擧げ、製産物の多額なる地方、物品の運送に便利なる場所、世人の最も多く來覽する所是なりと説き、先づ最初に關西地方を推し、その結論として當然、京都に開設すべきを主張し、^{*}殊に來二十七年は、桓武天皇が當地に都を開かせ給ひしより正に千百年に當り當京都市に於ては其の記念大祭を執行するの擧もあれば政府に於ても此の舊帝都の記念祭を盛むならしむる爲め第四回内國勸業博覽會を當地に開設せられむ事を特に希望して止

まざる所なり」この意見書を提出して、正面より政府に請願すると同時、翁は豫ねて親交ある要路の各大官を歴訪して、委さに京都市民の希望を披瀝し、之に對し、全力を濺いで應援せられ度き旨を懇請し、應諾を得ずむば止まざりしなりき。翁の曰、

大阪側は九州方面までも宣傳委員を派遣して大に大阪説の熱を煽つてゐたが、私は之を一顧にも附せずして東京に急行した。從來の経験で、斯様な問題は政府をさへ動かせば他は意とするに足らないことを熟知してゐたからである。唯當時の農商務次官の西村捨三氏が大阪府の舊知事であつた關係上、少し面倒ではなからうかと思つた。然かし京都側には確たる合理的の根拠がある。至誠を以て之を説けば聽かれぬことはない筈だと考へてかかつた。殊に京都を盛大にすることは、聖駕東幸以來、畏き邊の有難き御思召であるし、元老の人人は京都には多大の同情をもつて居たのであるから私は自信を持つて運動に着手したのである。私達の熱心が酬いられたといふものか不思議な因縁で、後に西村次官は一番熱心な賛成者となつて、奠都千百年祭のため次官

運動上の便宜

明治二十五年八月發行「京都商業會議所月報」第十號參照。

を辭して後、桓武天皇の御尊像を染めた羽織を着て全國各府縣を行脚し基金を募集して呉れたのであつた。云云。

當時の大藏大臣は松方(公)にして首相を兼ね、翁とは紙幣切斷以來の舊知にして、取りわけ親密なるが上に、農相には、河野敏謙氏辭して佐野常民氏翁の東上中に新任せられしが、佐野氏また翁とは相識の間柄なりければ、萬事極めて好都合に運び、佐野新農相の手にて博覽會の三府輪開の議は纏まり、超えて八月五日千田京都府知事は府廳官房に翁を招致して政府の意見を内示するところあり。果然翁の運動は見事に奏效して全市民の要望の此日芽出度く到達せるを知り得たりき。内示の要旨左の如し。

第四回内國勸業博覽會は來る二十七年に開設の筈なりしも明治二十六年には米國閣龍世界博覽會も開設せられ該會に參同の事務は二十七年中にあらざれば終了し難く又各實業者に於ても第四回博覽會の出品準備も整はざるべく且該會經費は繼續費として帝國議會の協賛を経ざる可からざれば旁、以て同年には開設する運びに至らざるに依り

曩に勅令を以て延期せられし次第なるが元來勸業博覽會の開設地を一定するときには勸業の主旨を全ふする能はざるの嫌なきにあらざり各地より地を換へて開設相成度旨の意見開申等も之あり政府に於ても之を是認し第四回以後の開設地に付ては三府輪環の順序に依り先づ第四回を京都に第五回を大阪に開設し爾後更に東京に復する事とし而して第四回は來る二十八年に開設する事に内定したる趣。云云。

要旨中、勅令とあるは明治二十五年八月一日を以て公布せられしものにして翌二十六年四月四日に至り愈、第四回内國勸業博覽會は「二十八年四月一日より七月三十一日まで京都府京都市上京區岡崎町に開設す」と、重ねて勅令第十六號を以て公布せられつ。

會の總裁には、大勳位彰仁親王殿下の御任命を拜し、會長近衛公爵、副會長佐野常民氏、幹事には翁を始めとして澁澤子、伊丹男を始め、内貴甚三郎、辻信次郎、熊谷直之、西村治兵衛、中村榮助の諸氏を任じ、全國の羨望の的となりつつ、京都空前の盛舉は、斯くの如くにして行はれしものなるが、京都の殖

産興業が、此の博覽會を機として、如何に新たなる開展を竟ぐるに至りしやは敢て冗冗しくここに説くを須ひざらむ。

三 桓武天皇奠都祭典に關する翼賛

第四回内國勸業博覽會が明治二十八年の開設に決せしと同時に、桓武帝の奠都祭典は茲に一ケ年を延期して、博覽會の開設中に舉行のこととなるが、祭典に關しては京都市主として之を管掌し、二十五年五月の市會に於いて、祭典計劃委員に内貴甚三郎、西村治兵衛、西村七三郎、雨森菊太郎、中野忠八、東枝吉兵衛、碓井小三郎の七氏を擧げ、内貴氏を委員長に推し、六月十三日、市參事會の會場にて第一回委員會を開き、祭典に支出すべき費用を市經濟より提出するの件を始め、祭典の順序、餘興の種類、寄附金の募集方法に就き協議せるが、次いで七月二十六日には同委員會を京都商業會議所に移し、翁並びに中村副會頭より奠都祭典に對する東京側の意向を、委員一同、委さに聴取したるなりき。

明治二十五年八月松方内閣に次いで第二次伊藤内閣成り井上侯内相に任ぜらるる翁の井上侯訪問

既に商工同盟會の奮起を見、祭典と博覽會とが、絶対に不離不可分の關係に置かれし以上、その運動は兩者を合せて、共に行はざるを得ざるより、翁は東上に際して、特に井上侯を訪問しつ。これ翁が、奠都祭を盛大ならしむるには何よりも侯を動かすを肝要とし、侯の一諾の直ちに東京側全體を響應せしむるに力あるべきを、豫ねてより看破せしが爲めなりとす。

翁の井上侯訪問には、千田京都府知事の同行せるありしが、翁は寒誼の挨拶終るや、侯に對し、從容としていふ。京都市の盛衰は畏くも 天皇陛下 明治初年東幸以來、夙夜叡慮にかけさせらるるところと拜承し奉る。不肖等の恐懼業に當るの微衷もまた一に是に出づるが、閣下は、恐らくは之を諒とし京都市の興隆のために力を假すを辭したまはざらむと。侯、言下にそれは勿論のことであると答ふ。翁、然らばとて奠都祭典執行の旨を陳じ、市の爲めに是非とも侯の斡旋を以て費用の調達を計り度しと述べ。侯の曰、よろしい、承知した。京都でせめて二萬圓だけ作つて來たまへ。さうすれば東京と横濱とで十萬圓は

乃公が請合つて集めてあげよう。翁また言下に之を諾す。侯の邸を辭して後千田知事のいふ、大丈夫かね、あんなに井上さむに安請合してと、心配するごと一方ならず。

翁は知事に對し、必ず三日間に金を作つてみせると約し、歸洛するや直ちに正傳院現在の花見小路歌舞練場の所を會場に當て、市内實業界の代表者三十餘名を會同せしめつ。翁は劈頭、簡單に寄附金募集の次第を述べ、金がないとお祭も出來ぬ。博覽會も開けぬ。どうか諸君、此の際しつかり出して貰ひ度いと云ひしに、翁を信頼せる滿場の有力者は、快く之を諾して、見る見る寄附金の申込み高二萬圓以上に達す。時に千田知事は座長として臨席せしが、翁は知事を顧みて、さあ、出來た。井上さむに電報を打つて下さいと云へど、知事はなほ容易に之を信ぜずして、本當かね君。大丈夫かね君を繰返へして止まざりき。斯がて知事の手より飛電、侯の許に着するや侯の一言、京濱間の十萬圓また立ちどころに調達せられつ。翁の曰、

然し、愈々悠して祭典の設備に取りかかってみると、應天門も建てたい、平安神宮も設けたいといふことになつて、十萬圓や二十萬圓で行かなくなり、到頭西村前農商務次官の奇抜な全國勸財行脚まで見たわけだが、それや是やで人氣は非常に沸騰し、京都市だけでも十五萬圓以上の金が集まり、之に各府縣の寄附金を合はすと五十萬圓以上にもなつて、滞りなくこれらの建築が出来たのみならず、その上に平安通史の紀念出版までも出来たことである。當時の廉い物價ですら、應天門の建設費だけでも約三萬圓かかつてゐるのだが……。

さて斯様な未曾有の盛況裡に第四回勸業博も開かれ、二十八年夏、近衛文磨公は會長として來朝中の外國使臣全部を京都に招待して大饗宴を開くことになつた。時恰も日清戦争が終つて 天皇陛下には廣島の大本營より還幸仰出され、京都に御駐蹕遊さるるに御治定相成つたが、俄然三國干渉の爲め物情洶洶の狀となり、千田知事の後任として來た京都府知事渡邊千秋氏は萬一を慮つて使臣招待に反對し、竟に近衛公と衝突するに至り、招待の事は沙汰止みとなつてしまつたのは、寔に残念であつた。云云。

奠都祭典や、博覽會や、二十八年戦勝の凱歌洋洋として春波の湧く如き際に行はれ、京都全市宛ら人を以て埋まるの殷賑を呈したるが、商工同盟會の所謂三大目的のうち、二大目的は斯く豫期以上に達せりとし、不知、いま一つの大目的に擧げられし京都舞鶴間の鐵道敷設事業計劃は、爾來如何に進捗し如何に實現の機に到達するを得たる歟。

四 京都鐵道株式會社の創立

翁は夙に宮津港の開発に留意し、京都府會に席を置きし當時、京都宮津間の道路敷設の通過に力め、なほ往年關西鐵道株式會社を起すに及び、宮津、四日市、京都間の循環線路を企劃せしは前に述べしところなるが、明治二十三年に於ける財界の不況、時に漸く散ぜむとするに當り、翁は京都商業會議所會頭として山陰鐵道の敷設を建議し、二十五年五月第三回帝國議會に於いて舞鶴鐵道は第一期豫定線に加へられしが、此の年七月、京都商工同盟會の決議として

*本書第二編
第三章第五
節及び第四
章第五節參
照

京鶴線と阪
鶴線との競
争

舞鶴京都間に鐵道敷設を要望するの聲高まるや、翁は小室信夫氏と心を合せ、田中(源)、中村(榮)氏等を促がして、商業會議所を代表して起ち、京都市會より委員として出でたる人人と提携し京鶴鐵道希望委員會を組織し、政府に對し極力之が運動に着手する事となりし也。

政府の可決せる舞鶴鐵道は、京都より起工するものと兵庫縣土山より工を起すものとの比較線とせられ、爲めに京都兵庫間の大競争を惹起し、府下の有志は一齊に蹶起し、商工同盟會並びに前記委員會以外に京都府鐵道期成同盟會を創設し、富田半兵衛氏委員長に擧げらる。第三議會の後、松方内閣倒れて第二次伊藤内閣の成立を告げ、二十五年十二月第四議會は開かれしも、政府對民黨の抗爭熾烈にして、停會に次ぐに休會を以てし、鐵道比較線の如き竟に之が上程を見るに至らざりき。

斯くて明治二十六年を迎へ經濟界の活況に伴ひ諸事業の勃興を來し、私設鐵道熱また從つて旺盛となり、奈良鐵道株式會社の出願に係る京都奈良間の鐵道

私設鐵道熱
旺盛

京都鐵道株
式會社の創
立と起業目
論見書

が政府の許可を得たるを始め、大阪の有志に依り丹波綾部より大阪に至る攝丹鐵道、及び大阪神戸の有志の發企に依る大阪より福知山を経て舞鶴に達する阪鶴鐵道等、相次いで私設鐵道とし計劃せらるるに及び、翁は外遊以來、鐵道官營論を抱けるも、京都市として博覽會開設、並びに奠都祭執行の日を目前に控へ、輿論に従ひ速成を望む場合、私設鐵道に依るの外なしとし、奮然として京都鐵道株式會社の創立に全力を傾け、明治二十六年七月十二日、商業會議所に於いて市内の有力實業家を會し、其の賛成を得るに及べり。

會社は資本金を五百萬圓とし、創立事務所を翁の經營する關西貿易會社内置き、翁の外、田中原太郎、中村榮助、膳平兵衛、小室信夫の四氏を創立委員とし、石原半右衛門氏を請願委員に推し、同年七月十五日、氏は創立願書を携へて東上せるが、願書に添へし會社の起業目論見書に依れば、京都鐵道は起點を官線京都七條驛に取り、龜岡、園部、山家、綾部を経て舞鶴に達するを第一區とし、此の工事は三ヶ年間に竣工を期し、第二區工事は綾部龜岡間より分岐

して宮津に至るもの、竣工豫定二ヶ年、更に綾部より分岐して福知山に至るものを第三區とし、工事一ヶ年に竣工の豫定とせるが、鐵道期成同盟會及び商工同盟會は、會の趣旨より推し翁の京都鐵道を後援して攝丹鐵道の發企人等と提携すると同時、阪鶴線側に對して一層激烈なる競争を開始することとなりき。然かも、二十六年十二月に開設の第五回帝國議會は、野黨たる改進黨、國民協會等、聯合して自由黨出の衆議院議長星亨氏を彈劾し、次いで條約改正勵行の建議案を以て政府に挑戦し、伊藤首相は敢然衆議院の解散を奏請せるため、鐵道會議は決を採るに至らずして止みたるが、翌二十七年五月總選舉後の第六議會の開かれむとするに臨み、委員の熱心なる運動は竟に當局者を動かし、鐵道會議にて、京鶴線及び京都鐵道敷設案の可決となり、次いで五月二十四日衆議院を、同月二十九日貴族院を各通過し、ここにその比較線たる阪鶴線に勝ち、翁等の發企に係る京都鐵道線の確定を得、六月十一日、右敷設に關する法律の公布を見つ。さもあれ、時は二十八年四月の博覽會の開催期迄に最早幾干

の餘裕もあらざりければ、翁や、田中氏や、關係者一同、夜を日に次ぎて線路敷設に急がざるを得ずして、その狀、宛ら俗に謂ふ壁に馬を乗りかけしが如く爲めに種種の出來事を惹き起すを避け難かりき。翁の曰、

遮二無二督勵して敷設を急がせるので、沿線の田畑を踏み荒らしたり、籾を切つたりなどして、工夫と村民達の衝突は隨處に起つてゐた。或る時など太秦村の人達が大勢村役場へ遣つてきて、こむなに田や畑を荒らして乍麼するつもりだ。損害を出せ謝罪をせよと怒鳴りたてるので、私は其處へ出て、こちらが悪ければ謝罪もするし損害をかければ辨償もせねばならぬ。然かしちよつと聞くが、お前さむところの村ではお祭を毎年するか乍麼かと尋ねた。すると變なことをきくと思つたらしい、怪訝な顔をして、云ふまでもないお祭はしますといふ。そこで私はお祭をすれば人も出るだらうし、神輿を出せば随分路傍の田畑を神輿昇きが踏み荒らすこともあるだらう。その時お前さむ達は一一損害をとるかと重ねてきくと、そむな馬鹿なことはせぬと答へる私はそこだ、今度の鐵道は千百年目に一度といふ前代未聞の大きなお祭をするので、

其の道をつけるために敷いてゐるのだ。愚圖愚圖してゐるとお祭の間にあはぬから急いで遣るので行届かぬ事は澤山あらうと思ふ。だが、さう云ふ譯だから腹が立つても勘辨して貰ひたい。然かし損害はもとより賠償するから云つてほしい、と云つたものだから、いや、よく解りましたと引取つてしまった。あとで聞くと濱岡さむが来るのなら役場へ行くのぢや無かつた。常から威張つてゐるので癢に障つてゐたその男が來るとばかり思つて、あやまらしに行つたのだがと云つたとかで、思はず笑ひ話になつてしまつたのであつた。云云。

斯くて博覽會開設までに鐵道は七條驛より嵯峨驛まで開通し、次いで園部驛まで開通し、貨客の運輸上、非常の利便を與へつつありしが、鐵道國有法により、後年政府の買收するところとなり、京都鐵道は山陰線の幹線に編入せられて、一層その機能を發揮するに及べる也。

由是觀之、翁の直接經營に當れる鐵道事業は、此の京都鐵道を最後とし、他に明治二十三年直江津鐵道發企人となり、二十九年に西成鐵道株式會社の監査

役、三十年に北海道鐵道發企人委員たりし等を擧ぐべきが、彼の明治十四五年翁が「中外電報」に據つて全國鐵道幹線の調査を提唱せるより、次いで官民共營論に移り、更に鐵道官營論の主張となり、翁の鐵道に對する見地は以上三段階を経て、竟に鐵道國有法の實施を迎へ、其の主張と、其の事業と、併せて共に完全に所期を達したりとすべく、當年、京都府鐵道期成同盟會の有志が、熱烈なる運動も、また翁等のありしによりて、始めて其の意義を發揮するを得たるに庶幾し。

五翁の貿易事業の發展附當時の家庭

明治二十七年、第六議會は、開會前より政府對民黨の衝突の避くべからざるを豫想せられ、開會後、民黨は條約勵行を武器として政府に肉薄し、政府は竟に再解散を決意せる程なりしに、此の議會に於て右の如く京鶴線並に私設京都鐵道法案の採決を得たるは眞に望外の幸とすべく、斯く政局の一變せしは、日

戦後の好況
と事業の發
展

清の國交、議會中に俄然として急迫し、我が朝野をして政争の違なからしめし
による。兩國の戦端は此の年七月を以て開かれ約一箇年にして平和の克復を見
たるが、當初開戦の報を入れ、財界は一時非常の不安に脅されしも、間もなく
皇軍連捷の報を得て頓に活氣づき、連捷の後三國干涉のため稍氣勢を削がれし
が、新領土と巨額の償金とを擱得するや景氣は急に奔騰し、殆ど未曾有の好況
を呈出するに及び、鐵道、海運、紡績、織布、其の他諸種の製造業は續續とし
て起り、戦後、即ち明治二十九年中に於ける會社の新設と増資との金額は總計
三億三千九百八十餘萬圓に達し、日本銀行兌換券發行の制限額は償金受領の結
果擴張せられ、通貨流通高の膨張せる結果、物價騰貴して商業界の活動眞に目
覺ましきものあり。翁の經營せる關西貿易合資會社が、此の時に於いて、跳躍
的發展を爲したるも、また以て蓋し自然の數と謂ふべき哉。
資本金三十萬圓を計上し當年此の種の事業の極めて小規模なりし京都實業界
を驚かしたる翁の關西貿易は、創始以來、不況に堪へ好況に乘じ、寸退して尺

村井吉兵衛
氏翁に援助
を求む

進し、竟に全國の斯業者をして驚嘆せしむるの隆昌を示しつ、その本店を京都
市三條通御幸町西入る處に置き、支店を大阪、東京、名古屋等の各地に設け、
大阪支店にて輸出品の工場を經營せるのみならず、海外の方面にては、上海を
始め、ロンドン、マンチエスター、紐育等の主要都市にも支店若くは出張所を
設置し、營業高は漸次増加して資本金に比し三十倍乃至二十餘倍し、日清戦後
に於いて一箇年數百萬圓の取引額を計ふるに及びぬ。彼の一時、我が實業社會
の大成功者とし、長者鑑に載せられたる村井吉兵衛氏が、關西貿易會社を訪ひ
て辭を低うし、米國煙草の輸入につき、翁の援助を求めたるも實に此の時代の
事に外ならず。翁の曰、

私が關西貿易に出勤してゐると、をりをり、働き手らしい三十五六歳位の商人が會
社へ遣つてきて、社員連中に愛嬌を振り撒いてゐる姿が見えた。あれは誰だと社員に
聞くと村井吉兵衛といつて、當時サンライズとかヒーローとかいふ兩切煙草を賣り出
してゐる男ですとのことであつた。すると或る日、村井は社長さむに會ひたいと云つ

て私の前へきて、どうぞ會社の援助をお願い致したい。五千圓位の取引高を限度にして今後關西貿易から亞米利加煙草を引いて戴きたい。決して御損はかけない、私の全財産を會社に擔保として提供しますからといふのである。私は一見して仕事の出来る男と思ひ、且つその言ふことが氣に入つたので、よろしい、君の申し出でを聞いてあげようと承諾した。會社と村井との取引は恚うして始まつたのである。云云。

當年に於ける翁の貿易事業はその發展斯く著大なるを得しと同時に、翁は他方にては、京都商業會議所會頭、日出新聞社長、京都鐵道會社社長等の重要な地位を占め、其の勢力は隆隆として斯業界を壓するの觀あり。轉じて翁の家庭をみれば、長女久子の君は妙齡の才媛とし、福岡縣山門郡柳河町士族徳永精是氏の五男なる五雄氏との間に婚約成りて、氏は米國に留學し、後夫人の生める恭子の君は明治二十年の誕生なりければ、此の時代、可愛いざかりの令嬢として家庭に一段の歡諧を加へ、翁が多年の勞は漸く報はれて社會的に、家庭的に、その清福の狀、人をして轉た健羨に堪へざらしむるものありにき。

第參章 我が國交及對外發展上の業績

一 翁の國家的信念の發露

翁が明治二十年代以後に於ける政治的事業的發展を述べ、而して此の間、特に逸する能はざるは、我が國交及び對外發展の政策に關し、翁の拮据努力して止まざりし一事なりとす。翁が専ら京都の繁榮を念とし、概ね其の事業の基礎を京都に置き、一身の窮達を問はずして、之が經營に任じたるは、祖考が殉忠奉公の精神を繼承せる翁として、特に岩倉右府公より桓武帝以來の帝都に對し畏き邊の御軫念の次第を拜承し感激措かざりし結果に出で、京都の爲めに盡くすことの、即ち國家に盡くす所以なるを信ぜしに出づ。従つて翁は、此の信念の上に立ち、足、一步も京都を離れざりしかど、その眼は常に國家の大局を洞觀し、世界の太勢を看取して怠るところなく、苟も機會あらむか、翁は寸刻

此の編に記
載する所以

も之を逸せず、直ちに其の機會を掴みて、國家の發展を期すると同時、世界に於ける日本の位地を向上せしめむことを力めて止まず。翁が京都商業會議所會頭として、絶えず、海外の貴賓、事業家の入浴し來れるを迎へ、常に臂をとり膝を交へて歡和し、我が國交の親善に資し、惹いて國家の對外的發展に裨補するところ多大なるものありしは、實にこれが爲めに外ならざりし也。

在態にいへば、此の方面に關する翁の業績は、或る時代、或る時期に限れるものならず。翁の終生を通じてのことにして、此の意味よりすれば、七十七年史結論に於いて之を總括するを至當とし、特に此の編に記載する所以は、翁が三十九歳の時に、有名なる大津事變あり。四十二三歳に日清戰爭あり。五十歳にして日英同盟の締結を見たるあり。これらに關係し一應翁の業績を擧げ置くを以て、編年史としての態を得たりと思へば也。敢て他意あるにあらざる也。

二 大津事變の追懷

濱岡光哲翁七十七年史 二二四

濱岡光哲翁七十七年史 二二五

伊藤公の手
記より引用

「明治二十四年五月十一日、余、塔の澤温泉に在り。岩倉公爵電信を以て報じて曰く、至急の使命を帶て小田原に來問せんとす、須臾にして松方總理大臣の電報を接受す。曰、大津に於て、道路配置の巡查、其の帶る所の劍を以て、露國皇太子の頭部に負傷せしめたり、直に上京すべしと。余電文を読み、驚愕に勝えず、晩食半にして不覺箸を投じ、直に人力車を命じ、上京の途に上り、小田原に立寄る。岩倉公爵の來着するに會す。相伴て小田原を發す、蓋し即刻上京すべきの内旨を拜す」云云。こは大津事變に對する伊藤博文公の手記の冒頭の文章にして余とあるは公自身を指せり。聰明多智、大事に臨みて自若たる公にして喫飯中、覺えず箸を投ずとあるを見、事變の中心に位地する大津京都の兩市が、如何に此の一大不祥事の突發に震駭せしや想像に餘りあるべく、當時京都市長は特別市制に依り北垣知事之を兼ねしが、知事は此の日午後三時前後疏水インクラインの専用電話により、報を得るや愕然色を失し、直ちに翁を招いて市としての應急對策を協議するところあり。皇儲來朝の爲め露國軍艦三隻

大津京都兩
市の震駭

露艦乗組員
を引揚げし
む

は神戸港に碇泊し、當日は乗組將卒一同上洛し來りて三三五五、市街を散索し
つつありしなれば、此の事變にして彼等の耳にするところとならむか、一氣に
激して如何なる事態を惹起せむやも保すべからず。知事の最も憂慮せしは此の
點なるが、翁は速かに策を設けて乗組員を神戸に引揚げしむべしとし、知事を
して即刻、府、市當局に命じ、市内に人を放ち、露艦乗組員を見るごとに、汽
車急に發す、早く乗らざれば歸艦する能はじと云はしめ、これによつて三百有
餘の乗組員を見るがうちに京都より引揚げしむるを得つ。

右を對策の手始めとし、次に當面の急務は、我が國家とし此の事變が、單に
一巡査の發狂によりて生じたるものにして、國家の毫も與らざるころなるを
知らしめ、同時に國民全體が如何に皇儲に對し多大の厚意を有しつあるかを
皇儲以下露の臣僚に見せしむるにありとし、知事、翁、其の他府市の代表者一
同協力して一般市民に其の意を傳へければ、刻を経ずして、露太子御見舞とし
てその御旅館なる河原町御池の京都ホテルに市民の參集するもの櫛の齒を引く

市民の露皇
儲慰問

翁、伊藤公
を訪ふ

が如く、翌十二日伊藤公に先發して京都に着きたる青木外相等、皇儲旅館の門
前に設けたる見舞人受付所にて、市民の差出せる名刺の數、無慮六千餘に上り
なほ續續市民の集まり來るを見て、その盛むなるに一驚を喫したる程なりき。
此の日午前六時、畏くも 明治天皇陛下には、御見舞のため東京御發輦。伊藤
公は午前十一時發の汽車にて陪從し、十三日午前六時京都に着し、中村樓に投
宿せるが、翁は明治十四五年頃より公に親炙せるものから、同日夜、公をその
旅館に訪ひ、その京都皇居より退出して歸れるを迎へ、公より親しく事變に對
し、至尊の御軫念たとしへなき御模様を拜聞し、且つ 陛下の非常事を燮理遊
さるその御才能の絶倫におはします有難き事どもを拜承し、公とともに低頭
して落涙數行に及びき。翁の曰、

至尊の御英
明に感泣す

聖上陛下 の御英明に渡らせらるるは、夙に拜聞して恐懼に堪へず存じてゐた次第
であるが、御所より此の夜退出してきた伊藤公は、私の顔をみるなり、恐れ入つた。
恐れ入つたといつて感涙とどめあへぬさまであつた。事變突發以來畏くも、陛下には

重臣達に、これは恚うせよ、彼れは斯くせよと御親しく、勅命を賜はるのであつて、それが恐れ多いことではあるが、一一事態の要點に觸れて確乎として寸毫の動きなき御立派なものであるには驚歎し奉るの外はなく、今度と申す今度ほど、至尊の御聰明に打たれたことはない。陛下はまことに神であらせられると、公は私に謹話したことである。

さて露太子の遭難以後、御旅館である京都ホテルの前には詰所を設けて、府市の當局者、名譽職、商業會議所關係、其の他府市官民が交詰切つて徹宵してゐたが、市民有志は御見舞ひであると云つて、金魚鉢を持つてくる、活花を持參する、酒樽を昇ぎこむといふ風で其の熱誠の溢れたさまには、流石の露公使や、皇太子扈從の人達も驚かされてしまつてゐた。その中で忘れもせぬのは烏丸四條下るところの米屋の作が、母から御國の爲めに御用に立てと云はれて參りました何でも命じて下さいと云つてきたことである。私はその若者に志はまことに結構だがさう心配するには及ばぬからと諭して引取らした。ところが暫くすると鳥籠を持つてまた遣つてきて、これは母の可

愛いがつてゐる小鳥ですが、どうぞ此の小鳥を露國の皇太子様の御目にかけて下さいと云つたのには、思はず私も涙がこぼれた。可憐なる市民は當時國事のために、こむなにまで誠を竭し志を運むでゐたものである。

青木外相はホテルに来て、市の露皇儲慰問に對する設備や取扱ひを種種聽取し、私があるとしてある。これも出来てゐると云ふので、外相は注文の出しようがなく、それぢやあ此の上はお寺の鐘でも撞かしたら乍麼だ、といつたのには噴飯ふくだしてしまつた。祈禱祭などで教會の鐘を鳴らす基督教國の慣例を思ひついたものと見へる。青木といふ人は元來さういふ男で、獨逸から歸朝早早、地價の高い歐羅巴の都市と同じやうに當時まだ空地の澤山ある東京市内の自分の家にわざわざ地下室を設け、その地下室で乗用の馬を飼つてゐた逸話もある位である。

事變の終結は世人の知れる通りである。露皇儲はその負傷は極めて輕微であつたに拘らず、我が皇室の御懇請を屏けて、東京へ行かずに、十三日遮二無二神戸の自國軍艦に引きあげてしまひ、聖上陛下には長くも御同行で神戸港まで御見送りに相成つ

たのである。當日、私どもは七條驛に奉送いたしたのであるが、陛下と露皇儲の御同行のさまを拜すると、陛下の御威風堂堂として四邊を拂つておいでになるのに比べて露皇儲はいかにも見劣りがして、まるで庸弱國の王子のやうに思はれ、陛下がその側に御寄りになると、宛ら大國の君主が御年少の殿下でも連れてお歩きになつてゐるやうであつたので、奉送諸員は無限の感激にうたれたことであつた。

露皇儲は、始め日露の親近を圖るために、川上將軍等の發意で、來朝をお勧めしたのであると私は聞いてゐる。然かるに結果は斯様な不祥事を來したばかりか、至尊が神戸港へ御見送り遊された砌、露艦の將卒が我れに加へた倣岸不遜な態度は拭ふべからざる反感を我が官民に與へてしまつた。日露兩國は必ずや將來干戈を交へねばならぬであらうといふ考へが、この當時既に私等の頭にしつかりと植ゑつけられたこと
は否み得ないのである。云云。

三 對支政策の調査研究

日清戦後の
我が國際的
地位

日清戦争により、世界に於ける我が國際的地位の、遽然として高まれること
もに、列強の嫉視、反感、頓に相加はるを免れ難く、我が國力の進展を控制す
るため、其の策動の所謂三國干渉となりて現はれし以來、我が國の對外關係は
著しく多事多難に赴き、事ごとに一種の壓重を感じざる能はざりしと同時、支
那に對する列強の態度の急變に至り、一層云ふに忍びざるものあり。戦前、支
那は歐米人より極めて其の實力を過大に買ひ冠られ、國際間の待遇に相當斟酌
を拂はれつつありしが、戦敗の結果、意想外に實力の庸弱なるを暴露したりし
より、列強は争ふて各、其の穿ちたる手套を脱し、此の老大國を帝國主義の俎
上に置きて、遠慮會釋もなく爪牙を加へ來らむとしつ。外交史家はこれを稱し
て「鐵道及び銀行による征服政策」の遂行なりといふが、當時列強の對支的態
度は、實に有らゆる政策を超え、獨は山東省に、露は滿洲に、英は揚子江沿岸
に威海衛に、山西省に、及び西藏に、佛は廣東、廣西、雲南三省に、いづれも
益、露骨に其の勢力を扶植して、虎視眈眈の狀を示せるなりき。

翁の支那調査

*荒尾精氏は明治二十七八年戦役前日清貿易研究所を上海に起し、生徒百餘人を養ひ支那内地を行商し戦争に當り一齊に通譯官として軍事に竭さしむ、明治二十九年不幸渡臺中に病死す。享年三十有八。その海臺の要件は翁等の助力を得て臺灣に生産事業を起

翁は日清戦役の唯中にありて、夙に此の趨勢を洞察し、戦役の終はるや、直ちに時の京都商業會議所書記長田村武治氏を、支那に簡派し、南支一帶、揚子江沿岸より遠く重慶の邊まで踏査せしめつ。田村書記長は、世に知られし東方齋荒尾精氏と友とし善く、其の出發前即ち明治三十八年九月、氏の許に送り來し東方齋の左の書信を見るも、翁が當年の重要な其の使命を果たすには、氏は殆むご絶好の適任者と謂ふべかりし也。

華翰拜讀、段々御辛折の趣感銘此事に御座候、何卒名古屋聯合會に於て卑見互細申述其上にて否決候はば最早無致方次第に奉存候得共一旦我より提出して力及ばすとして引込ますは如何にも無氣力の様にて外交上不體面なれば東方齋の説尤なれども最早致方なしとは朝野多數の様に候趣承及候然るに馬關係約は已に横面を打たれて遼東迄還付に決し其不體面而已ならず過を知つてあらたむるは大人の小人に優れたる所にて又よし瘦我慢を出して實行するも歐米人は能く我の實力を熟知するが故に適々過を悔ひながらも生意氣に自國の工業を犠牲に供して徒に一時の外面を飾りしを嘲笑可仕如

さむとせしものにして當時翁と往復せる東方齋の書面は數多く翁の筐底に保存せらる

對支意見書を伊藤公に提出す

何にも遺憾至極に被存候間迂生の滿腔の熱血を聯合會にて冷淡なる頭腦にあぶせかけ度候間何卒右御盡力被下度候扱又印刷物は追て各地會議所が要求致來最早廿五六部より無御座候間此にて宜敷候はば可差出候

又新開交易場へ御出張の趣御決定相成候由喜入候御請求の物は大略其内取調御參考に可供上候先は右御回答まで草々拜具 九月廿日 東方齋 田村武治殿 梧右

翁は、田村氏が實地踏査の報告をうけて之を基礎とし、自家の講究、審知せし一切の資料を傾倒して、綿密精洽なる對支意見書を認め、伊藤公に提出して政府が東方經營の資に供したるが、意見書の範圍は、支那の内政外交より、金融、理財、産業、交通、運輸、貿易等に互り、當時我が國策の確立に裨補せしこと尠なからず。爲めに翁は公より厚く其の勞を謝せられたりといへり。就中理財の方面に關して、翁は爾來益其の調査研究を怠らず、その往年、我が國の紙幣切斷政策を援助せし經驗に徴し、一層、支那の貨幣政策に留意するの深く支那政府をして對外關係の方面のみにても、一日も早く金本位制度を採用せし

翁、支那の
貨幣制度確
立に助力す

め紛亂せる貨幣制度を整へて、支那の國富を充實し、惹いて日支貿易の進展を圖り、彼我の親善を増進すべく、或ひは官府を通じ、或ひは民間實業界の有力者を通じて、之を提議、勸説して止まず。翁は自家の對支政策を一貫するや四十年、彼の大正八年阪谷男の支那財政顧問とし赴任するに臨み翁はその經綸を男に傳へ、大に支那の理財當局を動かせるが、梁士詒氏の如きは太く翁の提議を徳とし、これが實現に努力しつつ現在に及べる也。

四 日英同盟に關する準備的活動

翁の渡支及び翁の支那に於ける事業經營のことは第四編に譲りて、翁の我が國交に關する業績の一とし、彼の日英同盟の準備時代に、商業會議所會頭として活動するところありし次第を茲に述べむ。

英國の外交は、由來名譽の孤立を以て、其の政策とし、「我が英國には永久の同盟者なくまた永久の仇敵もなし、吾人の進退を支配するは唯英國の利害ある

パーマース
トーンの語

日英同盟當
初の主唱者

のみ」なるを公言し、所謂機會均勢主義を持して列強に臨み、時に、機に應じ變に應じて國際的去就を決するを、其の外交の本領とせしが、第十九世紀末年より露佛の接近、獨逸の進出並びに米の膨張に伴ひ、英國の對外關係は著しく窘迫せられ、殊に露國とは近東、中東及び極東に於ける反目、反感を激成して一層その孤立的地位に危惧を感じるに至り、等しく露國の傍若無人なる侵掠政策の脅威をうけつつありし我が國と、利害の緊密なる共通を見、竟に兩者の握手により、竟に積年の孤立政策を放抛して、一千九百〇二年即ち明治三十五年一月、日英同盟協約を締結するに及びつ。

然かも所謂事は成るの日に成るにあらずして、之が準備に多くの歲月を要すとし、日英同盟の如き其の締結二十有餘年以前に溯り、その最初の主唱者は大旅行家アーチバルド・コクーン氏なりしと謂はる。氏は一千八百八十五年(明治十一年)前後、英國は須らく日清兩國と提携して其の利權を保護せざるべからずと論じたるが、後、パーロー中佐の出でて日英同盟の利益多きを説きしを、一千

前南阿總督
ベレス・フ
オード卿の
來朝と翁

九百年(明治三十三年)に入りてのこととすれば、翁が同様の意見を立てたるは、一千八百九十一年(明治二十四年)に於ける露皇儲遭難以來に屬し、その所見に於いて、翁の遙かにバ中佐に先むげしを知るべし。想起す、翁が明治三十一、二年の頃、彼のベレス・フオード卿の全英國商業會議所代表者として來朝し、大阪に入れりとの報を得るや、早くも卿の帯び來れる使命の尋常一様のものにあらざるを感知し、直ちに身を起して卿を大阪の旅館に訪へることを。翁の曰、

ベレス・フオード卿が來朝したに就ては、日英國交上重大なる用件を帯びて來たものに違ひないと感じ、これは捨ておけないと思つて、私はすぐ大阪へ行つて卿に會ひ、それとなく來朝の目的を聞き出さうとしたが、唯貴國の産業に關する視察に過ぎないと云つて仲本當の肚を明さない。兎に角、京都へ來てもらひたい、京都の實業家が會同して晚餐をさしあげたいからと云つても、卿は何分時間がないと云つて、その招待をも斷はるといふしまつた。私はその日はそのまま冗く云はずに、あつさり引取つて京都に歸ると、すぐ歓迎の準備に着手し南禪寺の金知院を會場にして、陶、

銅、漆器、織物等の市の特産品を陳列し、出品者へはベレス・フオード卿がきて何なりと卿が欲しいと云つたものは代金を取らずに渡してくれ、金は後で私が拂ふからといつて打合せておき、また一方では市役所の議事堂に商業會議所の議員諸氏を集めることにしておいた。

さて其の翌日、午後三時にベレス・フオード卿は京都驛に着いたので私は氏に京都の重要物産を集めて御覽に入れるからといふと、卿は非常に喜び、驛から直ちに同行して金知院に遣つてきた。金知院で、卿は、あれやこれや品物を熱心に觀覽したが、卿がその品物を手にとつて見てみると、傍らから誰もが皆、どうかお氣に召したらお持ち下さいといつて、さうして代金はいつても、いやお持ち下さればまことに本望ですと、受取らうとしないものだから、卿は餘程面食つてゐたやうだ。一應その觀覽が終はる頃を見計つて、私は卿に、どうでせう、京都市の實業家が舉つて閣下にお目にかかりたいと云つてお待ち申してゐますが、時間もあるやうですからと切り出すと、卿は言下に、有難う、それではお會ひ致しませうと快諾した。

そこで私はすぐ車で卿を市の議事堂に案内した。会場には、豫ねて通知しておいたので皆が待ちうけてゐた。さうして歓迎の挨拶は、内海府知事が述べたが、ベレス・フォード卿は金知院以來こちらの心からの接待が非常に嬉しかったものと見へあればど堅く結むてゐた唇を解いて、答辭に、滔滔として雄辯を揮ひ、自身の今回の來朝の目的を述べ、到頭日英同盟の意志を打明けてしまつたので、私はやつぱり此れだつたのだなと思ひ當つた。しかしべ卿が段段熱してきて、しまひに此の席には貴地の實業界の有力者がお集りになつてゐるのだから、ここで諸君が此の同盟を要望する旨を決議して戴きたいとうち出したのには、今度は私の方が驚かされてしまつた。そこで次の挨拶には内貴市長が起つ答だつたのを、私はこれはよほど慎重にやらないと、我が國の對外政策上、非常の重大事になると思ひ、市長に代つて私が起つた。さうして日英同盟は非常に喜ばしいことであつて、此のこと自體は日本全體の重大なる問題である。それゆゑに、これが決議は全日本の輿論によつて爲すべきものであり、それでこそ權威があるのであつて、敢て一都市、一地方に於いて爲すべきでないといふ意味を

川上操六子
は明治三十
二年五月十
一日薨去、
その死期を
早めしは日
清戦役以來
強度の心勞
の結果なり
しと謂はる
子は軍事の
みならず外
交に委しく
列強の國情
に通じ且つ
産業經濟に
關する理解
また頗る淺
からず、子
は翁と親善
の間柄にし
て入浴する
ごとに必ず
翁と會し、
國事を談ず
るを樂しみ
としたりき

私は諄諄乎として辯じたが、これには至極同感だと云つて、ベレス・フォード卿は自身の提議を快く撤回した。此の時の通譯は横井時雄博士(同志社々長)だつた。
當時、露國の南下に對する極東の危機を思へば、日英同盟は私の持論として歓迎すべきであるは云ふまでもない。然かし、外交の事は極めて機密を要する。私自身でさへ英國の意嚮が、そこまで進むのであるかと驚いた位だから、況して、此の事が輕卒に、露や、獨や、米や其の他列國に漏れるとなると、國交上意外の事態が発生してきて、成るべきことも成らずに、わが國は非常に不利な立場に置かれねばならぬ。私は此の點を省慮して、右の如く此の場を切りぬけたことである。云云。
べ卿は、次いで東京に赴き各種の重要事務を辨じ、且つ滯京中、卿のために催されし大招待宴に列したるが、我が軍部よりは桂陸相出席し、川上參謀總長は缺席せるも、川上子の許にはそれ以前、翁より日英同盟に關するべ卿の消息は詳細に通ぜられ、我が政府は、子の報告によりて機密裡に之に對する慎重の對策を講ずるを得て、爾來、日英兩國間の交渉に資すること淺少ならざりしと。

第四章 翁の雌伏時代

一日清戦後の恐慌と關西貿易の破綻

日清戦後好況の反動來
氏は明治二十五年十二月二十八日に物故せるが翁の談によれば、氏の國家に對する隠れたる一大貢獻とすべきは明治十年に於いて氏が久保木戸等の元勳に對し山林保

反動は竟に來れり。明治二十七八年戦役の結果、我が國は清國政府より二億兩の償金を一定の時價にて英貨に換算し、磅を以て請取ることとせる爲め、一時に巨額の金貨を得るに至りしより、これを機とし、明治三十年十月、山本覺馬氏や、翁や、其の他我が財界の先覺が夙に翹望せる金貨單本位の貨幣制度の確立を得しが、之を以て戦争に基ける好景氣の一大收穫とすべく、當時、既に反動の兆、恰も火の牀下を這ふが如く財界の各方面に及べるを如何ともすべからず。即ち戦後の好況は一般の企業熱を煽つて、新設會社の濫興となり、既設事業の擴張となり、放漫なる商取引の頻發となり、物價並びに株式相場の昂騰に伴ひ旺なる思惑買の流行となるに及び、果然之が反動の火の手は、急激なる

護の忽せにすべからざるを説きしことにして帝室林の今日ある氏の當時における其の獻策に與るところ極めて大なりとす。氏はまた山林ととも刀劍の保存の必要を説き日本刀の如き精良のものは今後再び現はれ難しと云ひ帶刀を廢せし以來世人の之を輕むじて顧みざるの風を戒めしもまた此の當時の事なりと

資金の需要に依る金融の硬塞を以て發し、牀を剝し、棟を落して、炎烟切りに渦巻き起るを見つ。

加之、米國の不況に起因し輸出の減少せるに拘らず、事業濫興に依る器械原料類の輸入増加と、關稅増率の決定に依る見込輸入と、二十九、三十年の凶作に對する外米輸入の増額等、相俟つて巨額なる正貨の海外流出を表はし、金利は次第に昂騰して、新設會社は資金の拂込みを得るに途なく、既設事業もまた決濟資金に困難を生じ、不況襲來の勢を助長せしが、此の時、幸ひに政府は清國よりの償金の一部を割いて斯界の救濟資金に當て、其の對策宜しきを得たる。三十一年の米作豊穰、三十二年の蠶絲、綿絲、絹布等の輸出の意外に好況なりし爲め、斯業者は漸く愁眉を開き、金利もまた少しく低落を告げ、市場平穩に復せむとしたるに、端なくも此の時、英杜戦争、北清事變等、相前後して東西に並び起り、再びこれが爲めに金融は引締められ、對清貿易また大打撃を蒙り、其の不況前回のそれよりも一層甚しく、明治三十三年末より翌三十四年一、

再度の不況

二月に互り、九州其の他に於いては預金取付け騒ぎを起し、その結果銀行中に支拂停止をなせるあり。次で桑名の百二十二銀行は破綻を暴露し、東京方面の銀行にも預金取付けのことあり。殊に三月二十八日、大阪松島に本店を有する北村銀行の支拂停止、名古屋方面の著名呉服店並びに綿毛布業者の閉店、大阪第七十九銀行及び難波銀行の閉鎖等續出して、京阪神の金融市場に大動搖を惹起し、財界の不安は各地に波及せるが、斯くの如き我が國未曾有の全國的恐慌の犠牲とし、翁の經營に係はれる關西貿易合資會社は、竟に此の時を以て無慘にも破綻の運命に見舞はるることなれり。

關西貿易の
打撃

在態に謂へば、關西貿易の事業はこれまで、餘りに順調に發展せしなりき。順調に過ぎて樂觀し、發展に乗じて膨張し、會社の資力に超過すること無慮三十倍に達する巨額の取引を行ふて憚らざるに至り、戦後好況の反動による此の際の大打撃は、如何に之を回避せむとするも得て及ぶべからず。彼の明治二十二年、三年の不況に際し、逸早く未然に之を豫察して我が財界を戒しめ、且つ

事業家に對し、當時一刻も早く株主より株券の拂込みを完了せしめ、以て其の事業の基礎を鞏め置かむことを警告せるが如き先見の明と、周匠の用意とを有せし翁にして、自家經營の事業に此の事ありたるは、後、顧みて寧ろ不審の感を禁じ難きが、時の勢は人力を超え、語に所謂「斯くなれば斯くなるもの」と知りつつも、結局行くところまで行かずむば止まざる底のものなりしと思はる。其の一例を舉ぐれば村井吉兵衛氏と關西貿易との取引に於いて、過度に氏を信用し、不知不識、其の取引金額を増大し、其の結果夥しき輸入煙草を背負込みて大損失を招きたるの、惹いては會社が破綻の誘因となりたる如き即ち之なりとす。

村井氏が輸入煙草思惑の顛末
いますこしく事の顛末を述べむか、此の年以前、我が政府は、關稅政策を改正し、外國の輸入卷煙草に多額の關稅を課するに決し、次いで卷煙草のみならず原料品即ち煙草の葉のそれにも課稅するに決定するや、商機を見るに敏なる村井氏は、新關稅實施前、關西貿易會社に依頼し會社より米國に注文を發せし

め、一時に三百萬圓以上四百萬圓に達する巨額の米國煙草の思惑買ひを行はしめき。然かも當時、氏は一方に於いて、亞米利加のエーチ・コンパニー會社と、氏自身經營の煙草製造會社との合併の交渉を着着進行せしめつつありしなりき。而して氏は此の交渉の成立に依り、一舉、五百萬圓を擱取するを得たるが、當然、氏は其の合併の條件とし、豫ねて關西貿易をして思惑買を行はしめたる前記米國葉の引取り方を相手方に引繼ぎ置くべきに拘らず、斯様な條件を附するがために先方の機嫌を損じ或ひは合併の不成立に終らざるなきやを憂ひ、氏は竟に此の事に一言も觸れざりしものから、關西貿易は、爲めに一時に三四百萬圓の輸入煙草をストックとして持ち越さざるを得ずなりて、資金の運轉に非常の支障を生じたるが、翁の打撃を受けしは、これのみに止まらず、村井氏の合併により新會社の愈々開業すると同時、手腕あり經驗ある關西貿易の有力社員は、氏の爲めに續續引き抜かれたるなりき。斯かる打撃の最中、戦後の反動的大不況の暗波の如く洶湧し來るに及び、何會社か、よく倒産の運命を免がる

を得む。

關西貿易閉
店に決す

關西貿易破綻の報は、不安に脅かされつつありし世人に異常の衝動を與へ、京都市内にありては商工銀行並びに鴨東銀行等の預金取付騒ぎを來し、市場は大混亂に陥りて、恐慌は直ちに阪神兩市に及び、人氣は沮喪し、取引は杜絶し容易に之が恢復を見る能はざらむとす。翁は此の時まで毅然として諸般の打撃に堪へ來りしも、最早萬事既に休せるを見、創業以來茲に十有五年、新興日本の貿易事業に市の業界を代表し、幾多の貢獻を爲し來りし記念すべき會社を閉ぢ、一身を挺して債務の整理に當るべく先づ神戸に急行して、正金銀行支店を訪ひ應急策を講ずるに決しつ。正金銀行は京都商工銀行、鴨東銀行、露清銀行等と共に關西貿易の重なる債權銀行なりければ也。

二 破綻後の整理と翁の引退

翁の覺悟は、會社の破綻より來る一切の損害と責任とを潔く自己一身に負擔

一切の責任
を負ふ

辭表と聲明書

し、出來得るかぎり各債權者の迷惑を輕減するにあり。翁はこれが爲めに全資財を抛つを辭せざるのみならず、社會に對し飽くまで謹慎の意を表せざるべからずとし、これまで自己の有せしあらゆる公職より身を退くに決し、神戸に赴かむとせる日の早朝、翁は遂に商業會議所に立ち寄りて、辭表を認め、且つ筆を聲明書に下して、自己の心事を述べ、最後に余は斯くて今日限り諸君に別れ社會上より死せむとす云々と記し、卒直にその決意の存するところを示し、終つて神戸に着くや、正金銀行頭取不在の爲め、取り敢へず、副頭取三崎龜之助氏を訪へり。

三崎氏は中外電報以來の舊知にして、後、議院生活を共にし、翁とは最も親密なる關係者の一人なるが、翁は此の日氏に會見するに當り、劈頭にいふ。君よ、余は本日、副頭取としての君を訪ひし也。余の庶幾するところは一切の舊誼を排し、凡べての情實を除き、余と君との友情關係につき、君は秋毫も累せらるるところなく、債權者對債務者の交渉として、冷靜且つ直截に談を進めら

三崎正金副頭取と會見顛末

れむこと也と。氏は之に答へて、いや、實は君からどんな要求を持ち出されるかと思つてたいへむ心配してゐたのだつた。然かるに今、そのお言葉を聽いて非常に安心した。勿論それは當方の望むところである。これより兩人は要談に入り、翁は氏の前に關西貿易の營業成績及び現在の收支計算表を提示し、一數字に就きて貸借状態を明かにし、而して其の缺損に對しては自己所有の不動産及び有體動産を全部提供し、余は一紙半錢も剩さむとするの意思なければこれにより債權者に於いて任意に整理案を立てられよ。唯、執達吏を差向けることだけは、余の家門の名譽のため取止められ度し、要求としてはこの一事あるのみ也といふに、三崎氏、貴意は善く諒承せり、公明正大、廉恥を重むること斯くありてこそわが濱岡君なれ。さりながら、關西貿易は元來有限責任の會社なれば、いま君の決意せるが如く全財産を投出すには及ぶまじく、また君の示せる會社のバランスシートを通覽するに、目下の營業状態より見て、必ずしも破産を宣するの要なきに似たり。われら君の爲めに策つて今一應盛り返し

凡べて債權者に一任

の策を講ぜむとす。君、以て奈何と爲すと。翁、有限責任とはいへ、此の際余は秋毫の財物といへども自己の身邊に残し置かむとは思はず。凡べては債權者諸氏の意志に一任し、余は唯唯としてその決定に従はむと欲するのみ。此の場合、自ら進むで何の希望するところぞ。三崎氏の曰、よろしい。よく解つた。

翁と三崎副頭取との要談は、大要右の如くにして終り、それより平常の交りに復へりて二三の雑談を交換せるが、氏は、折柄中餐の時刻なれば久方振りに會食してはと勧めしも、翁は世間の誤解を招くの恐れあればとて之を辭し、即刻、京都に引返せるに、翁の留守宅にては、此の日早朝、翁が商業會議所に認め置きし聲明書の文意の誤り傳へられて、そのため、巷間に翁が自殺せりてふ風説を生じ、諸方より頻頻としてそれとなく實否を聞き合せ來れるより、大騒ぎをなされる最中にてありき。翁の曰、

會頭辭任の聲明書に、余は爾後、一切の公職より退き社會上に死せむとすと認めて置いたのを、自殺するのだと早合點せられ、時の府知事高崎親章君や其の他から度度

翁、自殺の風説起る

電話がかかるので宅でも非常に心配してゐた。高崎君は到頭宅へ遣つてきて、私の帰宅してゐるのを家人から聞き、座に通つてからも、變な顔してジロジロ見るので、私はこの通り生きてゐると云つて思はず笑つたことである。が一方では、また濱岡は會社が破産したのに、藝者をつれて遊び歩いてゐるといふ噂が立つた。それには考へてみると成程思ひ當ることがある。

といふのは、三崎君にわかれて京都へ歸る途中、その汽車は大阪で乗換へねばならなかつたので、暫く梅田驛の待合室に休憩してゐると、其處へ客に聘ばれて大阪へきてゐた歸りだに見へ、祇園の藝者が二三人遣つてきた。その中に宴會や何かで顔見知りのものが居つて、私に挨拶をするので、私もそれに答へて雑談してゐたが、そこへ汽車が着いたので降りて來た連中に、それを見られたものらしい。

自殺も誤解、遊興も誤解、取るに足らないことだが、私はその時熟熟感じたのは、人間は得意の絶頂と、失意のどん底に處する時には、一舉手一投足といへども注意せねばならないといふことである。ウツカリとさういふ時にしてゐると後に大變な結果

*この数字は
高橋眞一氏
著「京都金
融史」に據
る。

を惹き起すものである。まことにこれは何人も氣をつけて居ねばならぬ大切の事と思ふ。なほ私の當時の自殺の風説は東京へまで擴まつて行つたと見へ、それから、暫くして、私が東上して馴染みの旅館に泊り、入浴してあがつてくると、女中が私の腹の邊を變に注意してみるので弱つた。濱岡が腹を切つた筈なのに縋帯をしてゐないのがをかしいとも思つたものらしい。呵呵。

斯くて關西貿易合資會社は、破綻後、三崎氏等の同情ある債權者の手によりて、再興を圖られしも不調に終り、三十四年五月三日出資者總會を開き、止むなく解散を決議せしが、當時の債務總額は百二十六萬四千六百餘圓にして、其の大部分は支拂手形關係に屬しつ。翁は、豫ねて言明せるが如く、同時に凡べての公職を辭し、一切の資財を投げ出だし、明治三十七年まで、京都上京區押小路烏丸西入の宅に蟄居して愛甥清次氏を對手に債務の整理に没頭し、漸く一段落となれるを以て、其の邸宅をも、愈債權者に引渡して洛東吉田山麓なる上大路町の假寓に移轉することとなりき。移轉に際し、飽くまで清廉なる翁は僅

翁の浪人生
活

かなる手廻りの物さへ、所持せずして、身ひとつにして立ち退きしを、後にて債權者の人人は之を知り、それは餘りにお氣の毒なり、さやうの御遠慮には及ばざりしを、いたく翁の人格に服しけるとなり。

關西貿易の破綻せしは、翁の四十九歳の春にして、吉田に引き移りしは、五十二歳の秋なり。翁はこれより以後、おのづから時運の循環し來りて再起を促すに至るまで、肅索簡素なる浪人生活を營むに決したるが、翁やその齡、知命を超え、秋風浙瀝たる夜半の燈下に、枕を敲てて觀じ來れば、世上の富貴や、顯榮や、宛ら盧生が夢の譬に洩れざるなりけり。

三 雌伏時代に於ける東本願寺の整理援助

翁は事業に蹉跌せし以來、謹慎を旨として蟄伏し、債務整理に没頭するを專とせしが、人の困窮を訴へて援助を請ふあれば、翁は溫顔をもて之を迎へ、救濟を諾して奔走するを辭せざりき。たとへば彼の大谷派本願寺の寺債整理に當

大谷派本願
寺の寺債整
理

翁、井上侯
と會見す

り、井上侯を動かして其の整理を進捗せしめし如き其の一例とし見るべき也。
大谷派本願寺は第二十二世の法主に光瑩伯を戴き、豪放にして才氣潑刺たる伯が、宗門に於ける積極的施設により毎年多額の經費膨脹を見、加ふるに石川舜台師の内局を組織するに及び、一山の經濟は收拾すべからざる破目に陥りしため、明治三十四年、廣橋堅光伯の斡旋にて愈、井上侯は東京より之が整理のため乗出すこととなりしが、翁は石川内局瓦解後の寺務總長たる渥美契縁師の懇囑をうけ、侯と會見して整理の方法に就き懇ろに協議する處あり。同年十月末翁は藤田傳三郎氏等と共同調査の結果に成れる寺債整理の次第書を携へて、鎌倉に侯を訪ひ、之を手交して委さに自家の意見を述べ、終に侯に念を押して、本年十二月三十一日までは拙者に於いてお引受け致すべけれど、それ以後は閣下自らお遣り下され度しと云ひ、侯より、もつと遣つて呉れたら乍麼だと請はれしに對し、翁は、さればに候、拙者が十二月三十一日までと限りて、當初よりお引受けせるは、甚だ理由のあることにて、實を申せば、拙者自身の經營せ

る關西貿易は破綻して今日のしまつとなり、なかなか外の整理に携はるところの沙汰ではなかりしなれど、京都にとりては至大の關係ある大本山の興亡に關する事柄ではあり、その上に、遠來の閣下のみを煩はし、その膝元にある拙者等が關係者よりの依頼をうけながら、御盡力致し兼ねたりとありては、洵に相濟まざる次第なりと思ひ、現在自身にふりかかりつつある萬障を排して、今日まで斯くは整理事務を鞅掌し、且つ今年末までは、如何に都合を繰合はしても閣下の御相談に與らむと御約束申せるに候と答へ、侯をして太く感動せしめたりき。斯くて翁の歸洛するや、此の年、偶ま十二月末に至り、二萬圓の現金なければ本山は越年するを得ずとて、阿部(惠水)會計課長等、翁の許に來りて援助を求むること切なるに會ふ。

翁、信徒を
勵ます

翁、依つて寺務所に至りしに、折柄、一山の信徒總代の集會中なりければ、役員は翁を迎へ其の席上に案内せり。翁は一應總代等の意見を聽き番りて後、これまでの事情は兎まれ角まれ、苟も大本山の信徒總代ともあらうものが寄り

翁に對する
信望の力

集りて、斯様に少額の金さへ調達し難しといふことであれば、他人のわれわれが如何にしてお世話が出来るものぞ。整理のことは今日限り、すつかりお断り致すと辭色を厲して述べしかば、満坐これに打たれて感奮し、勸財に應ずる者相次ぐに至り、やがて三十日の早旦、役僧、翁の門を叩きて來意を告げ、貴下のお庇を以て、所要の金額は全部調ひたり、只今御挨拶のため參上せりとてあまたたび禮して去れりとなむ。

四 宇治川水電の發企及び支那視察

翁は、斯くの如く自家經營の會社が破綻後の整理のいまだ緒に就かざるに、他の財政整理の任務を托せられて之に従事し、然かも何人も翁の心事を誹議せざるのみならず、その一言、よく衆の心を統べて、たちどころに二萬金を醜緊せしむるを得し如き、翁に對する社會の信望の如何に厚きやを知るに足るべく而して此の信望の力は、財界の同情と相俟ち、一切の公職より引退して塾居中

*此の項主として宇治川電氣株式會社刊行の「第一期水力電氣事業沿革志」に據る

なりし翁を動かし、翁を起して宇治川水力電氣株式會社の創立に參せしむるに及べり。

*宇治川水電の發企は、その端を明治二十七年に發す。即ち同年八月二十日、彼の高木文平氏外三名より京都府宇治郡池尾村より同郡志津川迄の間に於いて淀川沿岸に發電用水路を開鑿せむことを京都府知事に出願し、この願書は一旦却下となり、翌二十八年二月再出願を行ひしが、時恰も大阪の有志者間に同様の出願を企圖する者ありしを以て之と合同し、次いで同年四月滋賀の小泉新助氏外三名より瀬田川沿岸に發電用水路開鑿の許可を滋賀縣知事に出願したるをも、これまた協同するに及び、二十九年六月發起人總數九十九名を算し、同年九月、改めて資本金を一千萬圓として宇治水電株式會社を組織し、滋賀縣滋賀郡石山村宇南郷を起點とし、京都府宇治郡宇治村に至る延長三里の間に水路開鑿の許可を、府及び縣知事に出願するに至り、これを後に京阪派の出願と呼びき。然るに此の年四月に、東京の岩谷松平氏外三名より、資本金六百五十萬圓の

京阪派及び
東京派と滋
賀派

宇治川電力株式會社の設立を出願せるありて、世に之を東京派といひ、翌翌三十一年一月には、續いて滋賀縣の河村彦三郎氏外百三十四名が、同縣大津町字三保ヶ崎を起點とし、京都府紀伊郡堀内村を終點として、此の間に發電用水路を開鑿せむとする琵琶湖運河株式會社の設立出願を見てこれを滋賀派と稱し、以上の三派は各政府に對して熾烈なる運動を行ひ來りし結果、政府はほとほと其の競争に困じ、互に合同一致して事業を遂行するの利益ある旨を諭し一應の願書を却下せしを以て、爾來三派は屢交渉を重ねつ。翁は此の間にありて、京阪側を代表し、或ひは松方老公を訪ふて斡旋を乞ひ、或ひは翁と共に最初の水電計劃者なる外山修造氏等大阪側の有力者を説きて議を進め、また或ひは高木文平氏を諭して競願の意を撤回せしむる等、奔走至らざるなく、竟にその勞は報はれて、明治三十四年中に合同の協議は成立し、これにより、水路及び工事の設計は大體京阪派の調査を採り資本金を一千二百五十萬圓とし三十五年二月六日、之が起工の許可を京都府滋賀縣兩知事に出願し、三十九年四月四日を

合同と創立

以て許可を見るに至りしものとす。

創立委員には翁を始め、高崎親章、藤田傳三郎、田中市兵衛、高木文平、法橋善作、土居通夫、上野彌一郎氏等二十八名。即ち發企人全部を擧げ、創立委員長に土居通夫氏を推したるが、果然この前後社長選任の競争は委員間に於いて猛烈に擡頭し來り、高木氏の熱心に之を望める一方、田中市太郎、田中市兵衛、法橋善作氏等は主として中橋徳五郎氏を擁立し、翁は藤田傳三郎氏等と共に高崎親章氏を擧げ、而して、高崎氏は自ら立たむとするの意なく、却つて翁を推薦して社長に就任せむことを懲懲するに及び、會社は創立總會を前に控へて、端なくも排他、陥擠、混亂、動搖の場面を呈露せるなりき。

此の時に當り、翁の自重するの篤き、なほ雌伏の念を捨てず。社長競争の場面を見るの煩に堪へざるものから、斷然會社關係より身を脱し、自己の持株全部を處分し終つて、其の一半を資に當て三十九年十月、會社が創立總會を開きて中橋徳五郎氏を社長に、土居通夫、岩谷松平、高木文平、淺見文藏氏等を取

社長競争始まる

締役に、田中市兵衛、大倉喜八郎、田中源太郎の三氏を監査役に、各選舉せし以前、翁は早くも白雲の岫を出づるが如く心も輕やかに支那視察の途に上りぬ。

五 雌伏時代に於ける翁の家庭

翁の支那視察は、上海に始まり、次いで揚子江沿岸より、蘇州、杭州等の土地、交通、産業、民情等を調査し、終つて北京に遊び、此の年三十九年十二月に歸朝せしが、その渡支の目的の奈邊にありしやは、次編に於いて中華企業會社發企の條に之を叙すべく、また翁は右の事業の外に、此の年前後、日韓併合の議に就いて伊藤公、宋秉峻等と屢相會し、惹いて朝鮮開發の事業に着目し、人を派して之が實地踏査に従はしめつつありしが、その結果の如何なりしかをも後に朝鮮無煙炭鑛株式會社の創立の條に併せ記すべし。之を要するに明治三十四年より同四十三年に至るまでの十年間、翁としては焦らず急がず、その瘡痕を醫するに力めしと同時に、不屈不撓の氣力を振起し、着着捲土重來の準備を重ね

渡支の目的

ねつつありしものに外ならずとし、翻つて此の雌伏時代に於ける翁の家庭を見む。

長女結婚と
長男出生

關西貿易の破綻を來せる明治三十四年は、恰も翁の長女久子の君と婚約ありし五雄氏の業を卒へて米國より歸朝せし年なりき。翁はこれにより氏を日本銀行本店に就職せしむるに臨み、五月中旬、家族をして同時に東京に引き移らしめ、六月十五日には氏の結婚式を擧げつ、翌三十五年七月十四日、初孫なる雄一氏誕生。なほ此の年三月二日、章子夫人は長男達郎氏を分娩せしが、翁は始めて設けし愛息の初誕生を祝へる後、僅かに十數日ならずして、明治三十六年三月十七日、夫人の享年三十八歳を以て、出養生先なる湘南鎌倉にて病歿せるに會ひき。

章子夫人逝
去

章子夫人は、その容姿のすぐれて美しかりしのみならず、秀でし才藻の持ち主にして、翁にはまことに双びなき好配偶者にてありき。その女學校に通ひし頃、疾のために一箇年間、殆むど缺席にて打過ぎたる年とても、學年試験の成

夫人の日常生活

績は優等を以て、同窓の人人を驚かせしほどに天性聰慧なりし夫人は、翁に嫁ぎて後、翁の文書一切をひきうけて代筆し、且つ翁の留守を預りて公私の來客に接し、なにくれとなく其の用務を辨ぜしものから、翁にとりて、夫人は絶好の助手たり、また理想的の秘書役たりしなりき。而して翁當年の生活が各種の事業に關係して、極めて繁劇なりしと同時に、夫人が日常の多忙さも、ほとんど一方ならざりしが、夫人の健康はそのために著しくそなはれ、三十三歳の頃疾を得て醫師の勧めにより、轉地療養として夫人は暫らく須磨に赴きてありしも、ほごなく癒えしをもて、歸邸して後、從前の通、翁を助けて家事にいそしみつつありしに、關西貿易の破綻後、東京にて長男達郎氏を分娩しける頃より宿痾は心勞とともに一時に發し、病勢日に日に亢進しつ。

翁は事業の蹉跎に累せられし不如意の唯中より、藥餌の資を調達しては、之を送り、最初、夫人を東京より葉山に轉地療養せしめ、次いで此の年の冬、鎌倉に移らしめ、ひたすら、病のおこたらむ日を祈りつつありしも、竟にその甲

斐とてなく、翁の切なる祈念は、行く水の流れに浮かぶうたかたと消えて、哀別の涙に咽ぶ日の斯くも來りしものなりき。逆境の日に妻の柩を送くる翁のころ、失意の良人と愛子とを後に残してよみ路に旅だちし夫人の思、その悲しみはいづれをまさり將たいづれを劣れりとせむ。彼の明治三十五年十二月二十八日、夫人が鎌倉の假寓より、京都の宅に寄せし左の書信を讀めば、翁ならずとも誰れか暗涙の頬に冷やなるを覺えざるべきぞ。哀夫、不治の病に悩む身とは心づかずして、「肺の方はわるくなく」とよるこび、病床に臥しながらも、當時の世帯とてささやかなる失費にも氣を使ひつ。わけて、京都の家に残りて、ただひとり新年を迎へらるる夫君のいかに不自由におはさむかと、道具の類の在りどころなど、こまごまと心にかけて筆を運びし夫人の姿の、この消息のうちに髣髴としてあらはるるに。

夫人の書信

拜啓御歸西後御疲れも御座なく候や、御日限延引に相成り岩村の方御都合如何御座候哉、御案じ申居候。私事御分れ申候即日彼家へ引移り二日間住ひ候へ共、六帖の間

は話しになり不申、風が吹けば障子はづれ疊はやぶれ壁も處處くづれ、(略)其上少少増にて米炭などは費へ不申、却而利方に相成候。此家は中中上等にて新築十帖六帖二帖臺處二帖外に板間浴室付き南東丸明きにて終日暖かに御座候、これならば何時御越被下共大丈夫に御座候、家賃は唯今の内十圓に岡本にわけありてまけ申候、葉山の事を思へば二十圓も尙安き位に御座候、岡本のトキ殿大張込み何もかも持運び不自由なき様なし呉られ、仕舞に私の夜具が薄きとて夜具まで私の知らぬ内に送り置れ赤面の次第に御座候。何卒無駄の様に候へ共私の絹夜具と座ぶとん二枚、通運の尤も安き便にて小町園宛御送り被下候はば私も少しは面目御座候、何卒宜敷御願申上候。下痢はただ同様に御座候に付昨日より薬をかへ申候、幸にも肺の方はわるくなく候に付、早く下痢を直して滋養を用ゐざれば肺にひびきては困ると醫師も申呉れ候。最早年内餘日も御座なく嘸嘸御繁忙に御座候らん宜敷御願ひ申上候御機嫌克宜敷新年を迎ひ遊し度奉祈候。來春は御用御すみ遊し候はばゆるゆる御來倉被下度、此家ならば小町園よりも宜敷位に御座候まづは用事而已不恭

正月の鏡餅は二升少し餘の一重二升位の一重とにて、内支關に一つ、荒神様に一つ星付は八つが神様分、六つが佛様分

神、神様、大黒様、稻荷様、天満宮様、年徳様、水神様、かはや様及土藏、佛、本尊様、先祖様、鳩叟様、只樂様、義融様、温譽様。

神様の物は二階の長持に堺重に入れあり候、嘸嘸御分り難く菊野様にも御困りと存じ御察し申居候へ共何卒宜敷願上候。尙今少し委敷御供へ方など申上度候へ共唯今の醫師も肺はさほどあしく無之にこれまで衰弱するは餘程神經の疲勞と存じ候間、必ずこみ入りたる事ならぬとの事に御座候間、是にて失禮仕候御ゆるし被下度候也
章子、二十八日朝、御良入様。

明治三十七年、翁は母を失へる次女と長男とを、東京より呼び迎へて共に吉田町の假寓に住し、翌三十八年京都西洞院下立賣の邸に移り、翁が支那視察を終りて歸洛せしその翌四十年には、現在の邸宅(下長者町室町西入)に卜居することなりつ。而して翁の愈再起して公職に就ける明治四十四年には恭子の君二

第
四
編

自明治四十四年、至昭和四年

十五歳、達郎氏十歳。この時、翁の家庭もまた麗らかなる陽春の來復に恵まれ
驩和の聲、漸く屋に滿つるものあらむとす。

第壹章 翁、捲土重來す

一 翁再起當時の我が財界

日清戦後の反動に依る不景氣は翁の引退したる明治三十四年を以て、その絶頂とし、翌三十五年には日英同盟協約の發表ありて人心を新たにせると同時、財界また此の年よりして漸次順調に向へり。即ち同年、輸出貿易は好況を告げ正貨の流入、銀行預金の増加等相俟つて金利の低落を來し、三十六年には銀價回復して對清貿易の振興を見、養蠶米作また好況なりしかば、之等により財界は、曩に一頓挫せし各種既成事業の整理を終り、今や大に活動期に入るべくして、偶ま三十七八年戦役の勃發に會しき。

日露戦役は、その勝敗實に一舉皇國興廢の決する大戦争とし、財界の方面にても大警戒を加へ、民心の緊張するや日清戦役の比ならず。然かも幸に曩日の

三十四年以後の財界

日露戦争の影響

戦後の活躍

日清戦後の
五倍の出資

不況にて自然的整理を行ひ終り、充分に所謂底力を養ひ得たりし當時の我が金融界は、莫大なる戦費を公債及び増税によりて支辨し、なほ綽綽として餘裕あるを示し、戦時中却つて銀行預金額を増加せるのみならず、皇軍連勝の報をうけ、戦後の好況は、最早、動かすべからざる事實として何人もこれを豫想しつゝ、戦後、豫想に反し急に人氣の出でざりしは、媾和條件に對し國民の不滿大なりしと、斯業者が日清戦後奔騰せる景氣に乗ぜし往年の失敗に鑑みて自重せしに依りき。これが爲め事業資金の需要容易に起らざるに、外債の募集、外資の輸入等相次いで行はれければ、金融愈々緩漫、金利息、低落するに及び、久しく抑へ來れる企業熱は俄然として昂り、三十九年下半年に入るや一齊に株式市場の活躍を現はし、次いで、この氣勢は事業界を刺戟し、彼の南滿洲鐵道株の應募高の如き募集額を抜くこと一千餘倍。諸餘の新事業また此の風に倣ひ、同年中に會社新設及び擴張の資本金は無慮十六億圓臺を抜くに至れり。之を明治經濟史に徴するに、日清戦後の好景氣を當時空前の現象とし、その

果然反動到
る

明治二十九年中に於ける會社の新設と増資との金額合せて三億三千九百八十餘萬圓に上りしを、何人も舌を捲いてその巨額なるに驚きしが、これすら、日露戦後のそれに比すればなほ及ばざること約十三億圓、總額より云へば僅かに五分の一弱に過ぎず。國力の増進もさることながら右の如く日露戦後の五分の一にも足らざる出資の反動が、なほ三十三四年の恐慌とならざるを得ざりしとせば、これと五層倍の出資による日露戦後の好景氣は、斯がて幾層倍の反動となりて現はるべきや。何人も豫じめ略ぼ想像し得べくして、然かも反動は想像せしよりも一層大。宛ら迅雷耳を蓋ふの暇なく、翌四十年一月中旬、株式相場は一氣に大崩落を來たし、投機者流は全滅を告げ、基礎薄弱の會社銀行は續續踵を接して倒るるを見き。而して反動の斯く意外に早く起りしだけ、その恢復もまた早かるべきに四十一年上半期は依然として不況。外國貿易の入超と生糸の不勢とに壓せられ、漸く下半期に入り輸出超過、米作豊穰等の好材料を得て生色少しく當業者の面上に浮び出でつ。

翁の再起せ
るは斯かる
時

されど財界は容易に警戒の手を緩めず、反動に對する一般の氣構へより放資を見合はせ、大勢は底堅く且つ陰鬱の裡に終始し、殊に四十二年米價低落の結果は太く地方の購買力を削ぎたれば商況また不振を脱せず。經濟界は外債の成立、内國債の償還等にて遊金巨額に上り、四十四年に至り金融引續き緩漫なりしが、此の年七月關稅改正に基く見越輸入のため資金の需要を喚起し、これより後、貿易の好況、米作の豊穰等、徐ろに入をして商界の大勢次第に好況に轉じ來らむとするを想はしめつ。翁が雌伏十年の身を起して、京都工商株式會社の取締役となり、更に京都電鐵の監査役となり、次いで社長に就任し、また一方に於いて再び京都商業會議所會頭に擧げられ、且つ衆議院議員に再選せられたるは、實に斯様な我が財界の希望に充ちし年なりし也。

二 京都電鐵の社長に就任す

京都工商と
關西貿易

京都工商株式會社は、往年關西貿易の整理に際し、債務の抵當として京都商

工銀行に引渡されし貿易附屬の大阪浦江の工場を基本とし、同銀行頭取田中源太郎氏によつて創設せられしものにして、會社の主たる事業は、關西貿易當時より營まれしブラシ製造並びに之が販賣に外ならず。資本金は最初百萬圓、後に減資して五十萬圓とせるが、明治四十四年翁が起つて取締役となりしは、京都商業會議所會頭たる資格を作るの便宜に出でしとすべく、而して同年翁が京都電鐵株式會社の社長に擧げられたるは之と大に趣を異にせり。

*本書第三編
第一章第四
節參照

京都電鐵は前編既述の如く、設立當時、翁は田中氏と共に、高木氏を援けて大に盡力せしが設立の後、翁は之が經營に參することなかりき。高木氏歿し大澤善助氏社長として立つに及び、京都市に於いて別に電鐵市營の計劃あり。市會の協賛を得て愈、之が實施を見、市電と會社線との競争を來たし、京都電鐵の事業はまた既往獨占時代の如く單簡なる能はず。偶ま會社が逋稅事案に觸れて大澤氏の引退を見しものから、氏の後繼者として社長たらむ人は、その任として先づ何よりも首腦者を失へる會社の内部を整頓し、從來の情弊を一掃して社

市電と會社
線との競争

後繼社長の
任務と人格

業の振興を期せざるを得ず。而して對外的には市當局との折衝宜しきを得て所謂六線共用問題等幾多錯綜せる案件を圓滿に解決し、市電の出現により壓迫を蒙りつつある會社が刻下の行詰りを打開すると共に、出來得る限り市民が交通上の利便を計りて會社の信望を恢復せざるべからざるにより、その後繼社長は清廉にして公平無私の人格を有し、株主と市と市民との鼎立環視の間に處して堂堂として自家の所信を行ふ底の貫祿ある人物たるを要せるなりき。

翁の就任

會社の大株主たる田中氏等が此の點に留意し、翁を迎へて社長とせしは流石によく翁を知れるものにして翁の人格、翁の貫祿は斯くの如き同社の多難なる過渡期に處し多くの難關を突破して事業を順調に導くに殆むご理想的たるや云ふを俟たず。翁は四十四年より大正二年まで社長として事務を見しが、果然此の期間、會社は對市關係の多くの難件を處理し、社内の整理を行ふて連稅問題以來の舊觀を一洗し、後更に發展して市電に併合するの基礎を作るに至りし也。翁を社長とし迎へし會社は、斯く非常に好都合なりしも、翁にとりては、必

翁と會社

すしも然らざりき。即ち京都電鐵の社長たりしたために、翁はその公人としての立場を、可なり不利ならしめ、或ひは市電側の策士の乗するところとなり、或ひは政敵の讒構に累せられて一時渺なからず迷惑を感じし事實さへ存せしを否み得ず。たとへば翁の京都市長として市の有力者より推薦をうけ識者より最適任を以て迎へられつつ竟に之を辭退するの餘儀なかりし如き、次いで憲政擁護運動に面し政商の煽動により群衆の襲撃をうけむとせし如き、其の顯著なる例とし擧ぐべかりき。

三 衆議院に再選當時の政界と翁

翁が再起して中央政界に出でし明治四十四年は所謂情意投合の名目のもとに彼の桂公が西園寺公に内閣を明け渡したる年なりき。此の年五月、翁は舊友西村治兵衛氏の逝去により氏の後任として京都商業會議所會頭に再選せられしと同時に、氏はまた衆議院議員たりしを以て、翁は其の歿後の補缺選舉に、氏の遺

桂公政權を
西園寺公に
譲る

翁、唯伏以
來の政界

せし地盤を承けて當選せしものとす。これにより商業會議所は十年振に、衆議院は第二議會解散以來二十年振に、翁を迎へしわけなるが、十年二十年の歲月は匆忙の世態によく一時期を劃するに足り、或ひは以て數時期を隔するに足り就中、變轉止まらざる政界にありて時とし隔世の感を與ふるの變化を來たすに足る。即ち、翁が再選當時の政情を略述すれば次の如し。

翁が多年敬慕せる伊藤公は、明治三十三年四たび内閣を組織し、翌三十四年後進に道を開きて野に下り、重ねて内閣の首班たることなく、或ひは樞密院議長となり、或ひは韓國統監となり、老軀國事に奔走し、竟に哈爾賓驛頭に落命するに至りき。そは翁の再起せし年の前前年、即ち明治四十二年の事なりしが當時の内閣は第二次桂内閣にして、その以前は第一次西園寺内閣。内閣は斯くいつしか所謂元老の手を離れて西園寺公か。桂公か。俗にいふ親の代より子の代に移り、政黨もまた、自由改新兩黨の對立より政友、憲政、國民の三黨鼎立の形に變り、其の他に政治的環境や、政治的雰圍氣や、その幾變遷したるを看

翁は依然と
して不偏不
黨

過すべからず。昨の政友會員は、今日憲政會の人となり、朝の憲政會員は夕に國民黨に籍を移し、昨非今是。或ひは昨是今非。口舌の輩のみ徒らに多く、操守あるもの甚だ尠く、而して翁は其の尠き代議士中の一人として再び議場に列せしなりき。

翁の主義は、不偏不黨、いづれの政黨にも籍を置かず、何の政派よりも制肘を受くるなく、徹頭徹尾公正無私に國事を輔翼せむとするにあり。政黨の結成は立憲政治の發達に伴ふ自然の勢なりとし、何人もまた其の存在を否定し得ず。自由黨や、改進黨や、政友會や、憲政會や、其の他何何黨や、入黨せむと欲する者は入黨して可。入黨する者のある限り、政黨存在の理由を認むべきが、これと同時に、黨弊に懲り、黨臭を嫌ひ、黨外にありて政治に關與せむとする者に對し政黨政派以外、別に政治的存在の理由あるを認めざらむとして得ず。況むや其の人にして毅然として自己の操守を持し、終始一貫、國事を念として立つに至り、國民の選良とし萬人の尊敬に値ひすべく、代議士としての翁、政治家

政治家とし
ての翁

としての翁は、實に斯かる存在の典型的のものにてありし也。翁の曰、

明治十四五年、板垣伯の自由黨の運動が猛烈に近畿を席捲したころ、私は黨の有力者から種種入黨を勧められ、また一方では、當時の御用黨である帝政黨からも手を盡して引つ張られた。私は斷乎としてどちらにも加盟を拒否したが、それでは自分の方に好意をもつてゐるに違ひないと云つて、しまひに改進黨からも勧誘にきた。後、改進黨は憲政會となり黨首の大隈侯に對しては、伊藤公などといつしよに、私も舊くから可成り懇意であつたので、親しく侯から入黨を勧められたこともあつたが、これもまた斷つてきた。

元來、私は中央政界に野心を毫も持たない。明治十年岩倉老公に謁した際に京都振興を堅く誓つて以來、私は何よりも先づ京都の繁榮といふ立場から、凡べての事を割出して考へるのであつて、此の立場からする以上、私が一黨一派の人になるといふことは甚だよろしくないのであつた。即ち京都は自由黨乃至政友會の京都ではないやうに改進黨又は憲政會のその孰れの京都でもない。然るに私が或る政黨に身を置けば他

京都は一黨一派の京都に非ず

の政黨から京都の爲めに私のせねばならぬ事業に妨害をうけるやうな恐れが無いとは謂へない。それゆゑに私は徹頭徹尾不偏不黨で通してきたのである。

濱岡はいくら勧誘しても駄目だといふので、しまひにはドノ政黨からも前ほど八釜しく云はれなくなつて結構だつた。然かしここに聊か困つたのは明治三十三年、伊藤公が政友會を創立した時のことである。松方公から私に東上を促してきた。公に會ふと、伊藤が政黨をこしらへるので君に入黨してくれとのことで自分は勧誘方を頼まれた。一つは、いつて遣つて呉れないかといふ話である。私は、宜しい、貴方がおは、いりになるなら入黨してもいいといふと、公はいや、自分は入黨しないと云はれる。これは怪しからむ、自分が入黨しないで人を勧めるといふことは理窟が立たぬ。私は斷然お斷りしますと云ひきつた。

元來これは松方公が政友會に入らないのを、よく承知の上で私は云つたのだが、公は當惑してそれでは致方がない。君の返事を僕から伊藤に傳へようとのことだつた。私はそれは御氣の毒である。私自身これから伊藤さむのところへ行つてお斷りしてき

ますと云つて、すぐその足で伊藤公を訪ふた。公は私を迎へて、善く来てくれたといつて、政友會の主義綱領を公親ら巻紙に書いたものを繰りひろげて私に見せて、どうだ、僕はこれで遣つて見ようと思ふ。君も一つは、いつて力を盡くして呉れと云はれた。私は主義も結構、綱領も至極結構ですが、中中實際上にはその通りに行はれるものでありませむ。譬へてみれば貴方は、よその舊るい別荘を引きうけられた様なもので、私にその舊るい別荘の普請を手傳へとお言ひになつても、それは困りますと卒直に返事した。

これは政友會が策士星亨などの献策によつて出来たもので、星が山縣公と握手せむとして、狡慧な公から跳ねられた結果、自分の乾分連を連れて伊藤公を昇ぎだした芝居に外ならない。他人のふる別荘とは星一派の自由黨の殘骸をさして云つたのだが、聰明な公は私の言葉をきいて暫らく沈吟して、さうか、では致方がないと云はれた。別に左様不機嫌でもなかつた。この點は公の非常に偉いところで、公のやうに度量の廣い心事の明るくてスツキリとした立派な人格を他に私は見たことはなかつた。寔に

當代の第一人者であつた。この人の折角の依頼を斷はるといふことは相當苦痛であつたが、私自身の主義を枉げることは到底出来なかつたのである。云云。
翁は以上の如く不偏不黨を主義とし、再び議會に出で續いて四十五年の總選舉に會し、三たび京都市民より擧げられて衆議院に議席を占めける也。

四翁の京都市長候補辭退

明治四十五年七月三十日、允文允武、不世出の英主におはします 明治大帝陛下の崩御を仰ぎ奉り、即ち大正と改元。此の年十二月、第二次西園寺内閣は二箇師團増設問題の暗礁に乗りあげ、上原陸相の挂冠せるため、竟に總辭職の止むなきに至り、時の内大臣兼侍從長たる桂公の出でて所謂第三次桂内閣を組織するや、公の出所進退を糺彈し、元老閥族の横暴を膺懲するため所謂憲政擁護運動は宛ら燎原の火の如く全國に及ぶに到れり。

翁が京都市長候補者とし、田中、内貴、雨森、石田(喜兵衛)氏等其の他、京都

明治大帝の
崩御

翁を市長候
補に擁立す

翁と前市長
との對比

實業團の人人に擁立せられしは將に此の時のことなりとす。京都市長川上親晴氏は、桂内閣の成立により大浦内相の拔擢をうけて警視總監に轉じ、市はその後任市長を物色し、先づ指を翁に屈せるものにして、前市長が上司より一片の電命に接し、宛ら弊履の如く其の椅子を棄てて遽遽然として東上し市民の負托を毫末も顧みざりし態度は、太く一般の憤慨を招き、市民はこれを明治初年以來、造次顛沛も市の休戚を念とせざるなき翁の人格と對比して、一層翁に對しその信頼を深くせるが、翁の愈、市長として擧げらるる曉、これが爲めに自家の算盤に狂ひを生ずる一部人士の存在するありて、これらの人人は、徹頭徹尾、翁の當選を妨害するの舉に出で、當時翁が京都電鐵の社長たるを見て巧みに策動し當時、翁が第三十議會に臨みれるを奇貨とし、これを護憲運動に結びつけて事情に通ぜざる市民を煽動し、翁を毀けすむば止まざりしなりき。

此の時、翁を擁立しつつありし有志は右の形勢を觀、竟に初志を抛ちて翁の出馬を止め、翁は言下に筆を執りて、一派の策動に先むじ直ちに市長候補辭退

翁の市長たるに反對の
一部人士

の聲明書を發表せり。翁の精神は、唯、市を愛し市に盡するにあるのみ、その市長たるを否とを格別の問題とせざりしに拘らず、當時策士の蠢動はいやが上にも執拗を極め、或ひは翁を以て桂公の藥籠中の人物となり了れりと傳へ、或

煽動家翁の
邸宅を襲ふ

ひは同志會の議員と密かに聲息を通じつつありと云ひ觸らし、百方、可憐の市民を使喚して、大正二年二月十日桂公の再び議會停會の詔勅を奏請するに至るや、名を護憲運動に假りて翁の邸宅を襲ひ焼打すべしと揚言し、白晝盛むに瓦礫を飛ばす等暴狀いふべからず、十一日早朝、竟に市民の敵と大書せる紙片を翁の門前に掲げしを見るに至る。翁の曰、

桂公が私を自分の傘下に入れたいと思つてゐたことは事實で、これは伊藤公が政友會に自分を入黨せしめようと思つてゐたのと別に變りはない。政治家として己れの黨勢を張るため努力することに何の不思議もないのであるが、唯、他人の黨勢擴張の具に供せらるることは、私として迷惑千萬だからお謝りする外はなかつたのだ。私は當時、桂公にも、貴方は政治家であり私は實業家である。實業家として國家のために、

また京都市のために、爲すべき事の多くを有してゐるから貴方のお供は出来ないと云つた次第であつた。

衆議院では私は花井卓藏氏や早速整爾氏等と一所に一人一黨主義から同志會といふのをこしらへてゐた。同志會は後に亦樂會といふのに名を改めたが、我々の同志會と云つた前の名を、桂公がその新政黨につけたものだから、兎もするとこれが誤聞を生ずる原因となつた。京都の留守宅が襲はれたのも此等の誤聞に關係すること多く、またその頃私が桂公の乾分と途上、偶然に出會つたのを尾鱗をつけて東京の新聞に報道せられ、それが或る一派の煽動の種にも使はれたものである。云云。

衆議成林無翼飛、三人成市虎一里撓椎と淮南子にいひ、誤聞虚傳も一度世に布かるるに至つてその勢力また侮るべからず、十一日群衆包圍の状を目撃したる翁の知人は、將來翁が公人として、その商業會議所會頭の位地を保つことすら至難ならざるかを憂慮せしほざなりしが、颯風は朝を終へず驟雨は日を終へざるの類、民心の亢奮漸く鎮靜し、策士策に倒れてまた起つ能はざるに至り、

誤聞虚傳の
勢力

翁の眞價は
蔽ふ能はず

翁の眞價は竟に如何にするも之を蔽ふ能はず。市の恩人とし、將た業界の慈父として業界よりも市民よりも敬慕欽仰せられ、爾後京都商業會議所を宰して晩年に及び、其の偶ま市長候補者に推されつつ、市長たらずして止みたりしは我が國商工界の爲めに至大の欣幸なりきと、今にそを語り傳へらるる。

第貳章 翁、再び京都商業會議所を宰す（上）

一 世界大戦亂勃發當時の建議

明治四十四年、翁の再び推されて京都商業會議所會頭に任じ昭和三年に至るまで在職約二十年間、その光輝ある各種の事業中において、彼の世界大戦亂に會せし時代に行へる經濟調査の如き、最も刮目すべきものなりとす。いま之を傳ふるに先きだち、大戦亂勃發に至るまでの我が財界の状況を如何にといふに大正元年は、前年金融緩漫の後をうけ、再度米作豊穰を告げて地方購買力の著しく増進するあり。日露戦後の反動的不況は、この時地を拂つて去らむとするに臨み卒如、明治天皇の崩御に際し、國を擧げて大喪に服せるものから財界の景氣また俄然銷沈し、京都にては起業銀行の破綻を見、大正二年は前年後半期の不振をうけて、一般の氣勢頗る揚がらず。翌三年、櫻島の大爆發は一層人

明治四十四
年以後の財
界

世界戦亂勃
發

氣を阻喪せしめし上、第三次桂内閣の後に現れし山本内閣がシーメンス事件によりて瓦解し、豫算不成立に陥りし結果、市場に幾多の悪影響を及せるに、四月皇太后陛下の崩御を拜し、諒闇につき大正天皇の御大典御延期となりて京都の景氣は愈々沈衰しつ。加ふるに一般財界もまた悲觀材料に満ち、ここに七月に入り、端なくも未曾有の世界戦争開始の報を得しなりき。斯くして我が國が愈々青島出兵の擧に出づるや、戦亂に依る綿糸類の暴落は、機業界に大打撃を加へ、諸株は一齊に低落して商工業者の蹉跌するもの頻出。八月、北濱銀行の臨時休業を發表するに至り各方面の影響淺少ならず。翁が京都商業會議所を宰し無比の變局に處して財界の急を救はむため、敢然として起ては、實にこの時にてありける也。

翁は日獨戦争の宣戦布告に先だつこと七日なる此の年八月十五日、まづ會頭名を以て山本内閣の後繼たりし時の内閣總理大臣大隈重信侯並びに大浦農商務大臣に宛て、左記の建議書を提出し、次いで青島陥落の十數日前、即ち九月二

日獨戦争に
先むじ翁の
建議

十二日には、翁の主唱により、京都府市及び商業會議所の三者聯合にて組織せる時局經濟調査委員會第一回を開き、翁は委員長、副會頭稻垣恒吉氏は副委員長として、會に臨み、調査部門を三つに分ち、第一金融、第二染織、第三染織以外の商工業とし、その調査を各委員分擔。翁は各部の調査を總括して、現在大戰亂の爲めに蒙り、且つ將來一層蒙るべき我が國及び京都商工業界の影響を考查し、銳意之が對策を講ずることとなりき。

建議

近時對外商權ノ益擴張セラレントスル際忽然歐洲干戈紛擾ノ餘波我が對外貿易ヲシテ殆ド中止セシメントスル狀勢ニ至ラシメタルハ遺憾ニ堪ヘザル次第ニ御座候仄聞スルニ戰爭國タル英國ノ如キハ兵馬倥傯ノ現況ニモ拘ラズ自國商業ニ對スル保護ノ周到ナル既ニ東洋ニ往來スル船舶及輸出入ノ物貨其ノ他商業機關ニ對シ夫夫特殊ノ保護ヲ加ヘ商業ヲシテ安定ノ位置ニ獨立セシメ自國從來ノ政策ニハ聊カモ動搖ヲ來タサザラシメツツアリト。我が政府ニ於テハ對外商業ニ對シ素ヨリ相當御保護ノ方策御企畫可

翁の建議書

有之事ト確信仕候へ共刻下商業者ノ尤モ苦痛ヲ感ズルハ海上保險率ノ益、騰貴スルト荷爲替ノ杜絶スル等ニシテ其損失ハ獨リ商業者ニ止マラズ此ニ由テ國家ノ蒙ル損失ハ甚大ナルモノト存候猶各業ニ對スル影響等ハ調査ノ上追テ上申可仕候得共目下緊急ノ事項ヲ具陳仕候間冀クバ時局ニ對シ相當ノ御保護一日モ早ク御詮議相成候様致度此段建議仕候也。大正三年八月十五日、京都商業會議所會頭、濱岡光哲、内閣總理大臣伯爵大隈重信殿、農商務大臣子爵大浦兼武殿。

二時局經濟調査會の報告書成る

當年、翁を委員長とせる右時局經濟調査會の機構を、茲に委しく述べれば、委員に府市の代表者並びに商業會議所の有力議員を網羅し、その上に京都帝大より財政、經濟、化學工業の各專攻教授の參與せる極めて權威ある一大調査機關にして、その統制の整然たる、その委員の資質の卓絶せる點等。之を中央政府のそれに比するも、斷じて些の遜色を見ず。今其の委員諸氏の名を列すれば

調査會の統制及び資質

調査委員の
顔觸

次の如し。

井上利助	井上金治郎	「法博」井上密	伊藤平三	飯田政之助
稻垣恒吉	池田有藏	石田喜兵衛	濱岡光哲	西村總左衛門
西池成義	堀貞	「法博」戸田市	富田直詮	大澤徳太郎
小篠長兵衛	川島甚兵衛	金子篤壽	香川静一	田中源太郎
田島錦治	竹上藤次郎	棚橋文作	津田榮太郎	塚本惣助
塚本清治	「工博」中澤岩太	永田秀次郎	内貴甚三郎	「理博」久原躬弦
松村甚右衛門	前川彌助	藤村岩太郎	藤江永孝	舟阪八郎
雨森菊太郎	錦光山宗兵衛	湯淺七左衛門	松風嘉定	後川文藏
島津源藏	(イロハ順)			

大正四年委
員總會を開

第一回開會以來、翌大正四年の春に至るまで右の委員諸氏は會合を重ねること十數回に亙り、委さに各方面の資料を蒐集精査し、此の年三月二日愈々委員總會を開きて各調査事項を上程審議の結果、全員一致の意見として時局に須要な

報告書の概
要

る報告書の發表を見るに至れり。

報告書は其の冒頭に於いて「時局經濟調査委員會各部の報告に依て之れを稽ふるに戦亂勃發以來當市の蒙りたる經濟的影響は或る一二特種のものを除ては一般我が國の蒙りたる經濟的影響と略ぼ共通的なるもの如し」と斷じ、而して我が國商工業界の蒙れる影響の原因を擧げて、日本の産業狀態の極めて幼稚なる點にありとし、堂堂たる立論の歸結として「今後我が國は現時の狀況に鑑み官民共に奮勵努力益、我が産業の改善發達を期する方法を講じ以て之れが實行に努めざるべからず茲に於てか吾人は此時機に當りて緊急必須なる施設と信ずる所のものを列擧し之れが實行を期せむとす」とて、左の五項を擧げたるなり也。

時局に必須
の各施設

- 一、實業教育ヲ改善シ一層實用的タラシムルト共ニ併テ之レガ普及ヲ圖ルベキコト
- 二、各種金融機關ノ完備ヲ計リ低利資金ヲ潤澤ナラシムルコト
- 三、交通ノ改善擴張ヲ計リ其運賃ヲ低減セシムルコト

京都市の必
要施設

- 四、貿易ヲ獎勵シ之ヲ誘導スベキ諸機關ヲ設クベキコト
- (一) 領事ヲシテ任地ノ事情ニ精通セシムル爲メ永ク其地ニ駐在セシメ容易ニ轉任セシメザルコト
- (二) 海外實業視察團ヲ獎勵スルコト
- (三) 貿易組合ヲ新設シ以テ粗製濫造及賣崩等ノ弊害ヲ防止スルコト
- (四) 需供兩品巡回展覽會並ニ國產獎勵展覽會等ヲ開催スルコト
- 五、關稅政策ヲ改正スルコト
- 以上を我が國に於ける共通的のものとし、特に京都市に於いて時局に際し施設の急を認むるとしては
- 一、府立工業試験所ヲ設置スルコト
- 二、染料藥品製造所ヲ設置スルコト
- 三、労働者ニ對スル生活費ノ低廉ヲ圖ルベキコト
- 而して報告書にはその國家的なると地方的なるとの別なく各事項には盡く精

憂國の赤誠
に溢る

細に其の理由を記して、或ひは政府當局に獻策し、或ひは民間當業者を督勵して餘さず。最後に戦後の世界的經濟競争に言及して「經濟的要素を完備するの國は之れが勝利者たり、之れを備へざるものは必ず敗者なり或ひは永久に回復するの途なからむことを恐る」と喝破し、憂國の赤誠浸浸として筆端に滴らむとす。

此の報告書こそ、未曾有の大戦亂に處する我が産業界の指南車とし、當年、我が國朝野の識者が視聽を聳動せしめしものにして、大英倫敦の商業會議所が戦時に對する意見書の發表せられしも、右と殆むど時を同じうし、その趣旨また之と多く異なるどころなかりしと謂はれ、爾來、之により時局に對する京都商業會議所の建議を重からしめし事幾何なるやを測るべからず。然かも翁はなほ之を以て安むする能はず。翌大正五年一月、東京に於いて開かれたる第二十二回商業會議所聯合會に出席し、時局に關する調査委員を設置するの件を提議して翁は全國當業者が戦亂の影響に就きて深甚の省慮を望み、滿場一致の承認

翁全國商議
聯合會に提
議す

を得たるが、此の年五月、翁は更に進むで關西各商業會議所を聯合し時局及び戦後經濟調査會を組織するに至れり。

三 關西商業會議所聯合調査會を組織す

世界戰亂勃發當時に於ける財界の不景氣は既に前項に述べしが、日を逐ひ月を重ねて愈、戦局の擴大するに伴ひ、歐洲の産業界は全く其の活動を休止せしかば、我が國は端なくも戦時物資の供給に當ることとなりて、大正四年下半年より著しく輸出の増加を來たし、同年の出超一億七千萬圓に上り、これより海運界の盛況、貿易商の活躍、生糸市場の殷賑等盡く好材料に滿ち、十一月京都にては、大正天皇御即位大典の御舉行ありて、人氣湧くが如く大正五年の輸出超過額は前年に倍加して三億八千萬圓に達し、これがため、事業界は異常の活氣を帯びて幾多の新設擴張計劃を立て、世を舉げて所謂戦時成金の出現に陶醉せずむば止まざりき。

關西商業會議所聯合調査會成る

翁等の主唱により關西商業會議所聯合經濟調査會の組織せられしは、此の年五月三日にして、京都以外、大阪、神戸、名古屋、四日市、和歌山の五商業會議所の参加を得、特別會員に、戸田、末廣、神戸、小川各博士等を舉げ、調査部門を産業、貿易、理財、交通の四部に分ち、定期會を毎月一回、別に必要に應じ臨時會をも開くこととし、會の目的を「時局及び戦後の經濟に關し調査審議し決議し決議事項の實行を圖る」に置き、調査と實行との兩方面より斯界に貢獻せむことを期すべく、同會一流の確乎たる調査方針のもとに調査事項及び其の順序を左の如く定めつ。

調査項目及び順序

- 一、聯合國ノ輸出入禁止及び制限ニ關スルコト
- 二、國際支拂ニ關スルコト
- 三、國際運輸ニ關スルコト
- 四、東洋及び南洋ニ對スル輸出入ニ關スルコト
- 五、内外金融ニ關スルコト

戦時及び戦後の緊急事項を包括

翁、發會以來の活動

六、戦争中ニ發展セル事業ニ關スルコト

七、關稅改正ニ關スルコト

八、技術ノ發達ヲ促ス方法ニ關スルコト

以上の如く其の調査範圍は戦時及び戦後に互り國際的に、將た國內的に經濟施設の緊急事項を包括して餘すところなく、此の年六月九日例會に於いて、第七項の關稅に關する條項に基き聯合國經濟同盟に對する決議を、七月十日同じく巴里經濟會議決議に關する件を各附議し、同調査會の名を以て政府當局並びに聯合國の各商業會議所に宛て、精細綿密の意見書を申達するに及べり。

翁は斯くて發會以來、常に審議調査の中心人物として不斷の活動を續け、或ひは東上して主務大臣に面接し、或ひは當業者を招致して時局に須要なる指導警告を與へ、戦時及び戦後を通じて翁自身轉た老の至るを知らざるが如くなりしかば、戸田、神戸、末廣博士等、翁が憂國の精神に動かされ、財政、經濟、外交に關する各専門的見地より滿腹の蘊奥を傾けてその調査に資し、當時の京

大正五年以後の景氣

黄金時代の現出

都商業會議所書記長西池成義氏また志士の熱情を以て、翁の事業を賛げ、關西商業會會所聯合經濟調査會の名を以てする意見、請願並びに建議書は、曠古の大戦亂に會し、我が財界の津梁として一世の信頼を博したるなりき。

戦局は大正五年十二月、獨帝の媾和提議により一轉回を試みむとし、戦時成金をして一時脅威を感じしめ斯界の氣勢また幾分頓挫するかに見えしが、媾和提議の卻けられて獨逸の中立國船舶に對する無警告撃沈の頻發するに會し、六年春、米國また竟に參戰に決するに及び、時局はここに愈轉回して、一層平和より遠ざかり、戦亂は益々擴大して大規模に赴き、我が國の戦時物資の供給は激増に次ぐに激増を以てし、景氣は再燃して止まるどころを知らず。當時歐洲諸國製品の缺乏を補ふために、我が生産品は、支那、印度、南亞弗利加、南亞米利加等にも輸出せられ、大正四年より大正七年までの、歐洲其の他全輸出總額は五十四億圓、輸入總額四十億圓、差引十四億圓の出超を告げ、加之、此の期間に於ける我が國貿易外の受取勘定として船舶運賃十億圓、保險料二億五千萬

萬人の誤想
原内閣の妄
斷

圓、在外移民の送金及び持歸金一億六千萬圓、この合計十四億一千萬圓。兩者通計約三十億圓に達せるより、何人もこの一時的成金時代が、永久の黄金時代なるかに意識し、そを意識せる時は既に、幻滅の日に近づきをを思はざりき。殊に大正七年九月、寺内内閣の後を承けし原内閣は、所謂積極政策を呼揚し、藏相高橋是清氏の如き、専ら薪に油を濺ぐやうなる極めて陽氣なる財政方針を取りしより、國內宛ら狂せるやうに戦争成金熱にうつつを抜かしつつありし也。

翁、政府を
警しむ

翁が政府より經濟調査會の委員を囑託せられしは大正五年七月の事に屬す。翁は専ら關西商業會議所聯合調査會の意見を代表して中央財界に臨み、好景氣の絶頂において夙に緊縮的施設の忽かにすべからざるを力説して政府當局を警め翁の提撕をうけし和田豐治氏の如き、高橋藏相の放漫政策を攻撃して置かず。財界の有力者が會合の席上に於いて、和田氏と藏相とは互に論難して相下らざりし末に、双方摺み合ひにまで至らむとせしも此の時。翁の意をうけて西池書

翁の大聲、
俚耳に入ら
ず

記長が京都實業界の有力者連に會ふ毎に、來るべき大反動に具ふるため、一刻も早く擴張せる業務を整理して、専ら緊縮方針を執るべきを頻りに警戒したるも此の時。その京都商業會議所に於いて聯合調査會に臨み、特別議員たる田中源太郎氏と神戸正雄博士と戦後の理財金融上の意見を闘はし、互に卓を叩いて激論數時間に互りしもまた此の時にして、翁が徹頭徹尾、事業緊縮を主張して商工業者の反省を促がせしため、人をして濱岡さむの話をかいてゐるさ氣が減入つてくる。現にこのやうに毎日金が儲つてゐるのぢやないかと不審がらしめしも、ひとしく將さに此の時の事にてありし也。

四 恐慌前の警告、恐慌後の施設其他

好景氣の頂天に於いて、翁の憂慮し、翁の警戒せしところは斷じて秋毫も誤らざりき。戦時の好況に乘じ膨張するに委せし政府の通貨政策は、物價をして極度に暴騰せしめたりしが、就中米價は空前の高値を呼び竟に大正七年八月の

米騒動と寺
内内閣の總
辭職

戦前戦後の
歳出比較

米騒動を醸し、九月、寺内内閣のこれがため總辭職せしより、原内閣の成立を見たりき。我が國の財政は此の前後、既に青島戦争、南洋獨領占領、海軍の印度洋警備及び地中海出動、西比利亞出兵等にて臨時軍事費總額八億九千九百餘萬圓を消費し盡くし、内治の方面には歳計益増加して戦前即ち大正二年度の歳出(一般會計)豫算は五億九千四百餘萬圓なりしものが、戦亂の終熄せる大正七年度には十億千七百餘萬圓を計上し、數次の増税を行ひてなほ足らず。政府は更に公債政策によりて之を辨せしが爲め、戦前二十五億九千餘萬圓の公債は大正七年末に三十億餘萬圓(臨時國庫證券を含む)に増加しつつありし也。

偶ま大正七年十一月、休戦條約の締結を見るや、このとき、早くも戦時關係の事業は打撃をうけて染料、洋紙業者の間に蹉跌を生ずる者ありしに拘らず、歐洲の産業状態は容易に疲弊を脱せざるため、我が國は依然、戦時の好況を續け、殊に、京都市の如きは米價の暴騰に伴ひ地方購買力の振起をうけ、織物界は空前の大盛況を呈しつ、翌八年四月米國市場の景氣恢復により生糸羽二重等

大正七、八
年の好況

大正九年四
月迄の財界
熱狂

の輸出好調を示せしを以て、内地一般に吳服太物綿布其の他諸商品の賣行いやが上に良好にして、これらの品拂底は市場に思惑賣買の風を生じ、綿絲、紡績諸業者は所在に巨利を占め、地方は養蠶に、米作に、多大の利益を博したれば政友會内閣の積極政策を謳歌するの聲都鄙に滿ち、何人も顧みて翁や、翁の宰する經濟調査上の審議に耳を傾くるものなく、大正九年に入り諸物價はなほも日一日奔騰し、事業熱は愈熾烈を極む。これを數字に現はせば、即ち同年一月より四月に至るまで事業の新設及び擴張資金とし計上せられたる金額は、三十億二千萬圓の巨額を算し、政府も財界もこの天井知らずの好景氣に煽られて我を忘れて狂奔するに至り、果然反動は此の年三月十五日の定期株式の崩落に端を發し、四月中旬及び五月に於いて重ねて凄じき大崩落を現はし、綿糸、生糸、織物、米穀の暴落となり、大阪の増田ビルブローカー銀行の破綻、横濱七十四銀行、横濱貯蓄銀行の支拂停止に及び、竟に、大恐慌は、海嘯の如く全國に波及し來れる也。翁の曰、

大正九年の
恐慌

恐慌の打撃
に屈せず

大正九年の恐慌襲來に就いては、その一、二年前から如何にわれわれが全力を擧げて警戒に力めてゐたか知れないのであるが、不幸、目前の大好況に浮かされて何人もその警告に注意するものは無かつたのである。亞米利加の如きは戦時中、あれだけ各事業の膨張を來たしたのだから眞つ先に恐慌に襲はれねばならぬ筈であつたに拘らず米國政府は大正七年末、世界戦の休止と共に一刻の猶豫もなく、直ちに緊縮政策を斷行し、巧みに戦後の經營に當つて恐慌を免がれ得た。當時我が國の政府當局や事業界の有力者がわれわれの警告をそのまま受けられて、大正七八年に於いて反動の到來に具ふところがあつたならば、大正九年の大恐慌は未然にこれを防ぎ得たのみならず其後十年にわたりてなほ醫し得ざる不況の打撃に悩み今日金解禁も出來てゐないやうなことは絶対に無いと思ふ。まことに痛歎に堪へない次第である。云云。

然かも翁は恐慌の打撃を受けて、その意氣頓に沮喪せる全市の商工業者を慰撫し、督勵して屈するの色なく、斯界の先登に立ちて景氣挽回の策を講じ、關西商業會議所聯合調査會の後、翁は更に京都商業會議所のみを以て戦後經濟調

戦後經濟調
査會を起す

戦後工業博
覧會の發企

店頭裝飾共
進會の開辦

査會を起して、財界の指導に任じ、また別に京都商業會議所議員全員を以て常設調査委員會を起し、商業、工業、理財交通の三部に分ちて調査研究に従事し多多益、業界の爲めに盡くして倦むところなかりき。彼の大恐慌襲來の後六ヶ月即ち大正九年十月には一齊に銷沈せる京都市の人氣を振興せむため、翁自ら會長となりて戦後發展全國工業博覽會を開催するに決し、これが會期を大正十年七月五日より九月五日までとし、會場を市岡崎公園に撰し、後藤新平子を總裁に、京都府知事馬淵銳太郎氏を副總裁に擧げ、専ら其の準備に着手せしが如き、また十年十一月一日より京都商業會議所の主催を以て店頭裝飾陳列共進會を開催し、斯業界の人氣を鼓舞せしが如き、また翁の進取的氣象の艱苦に會すること益、旺にして、業界に對するその考慮の親切なる好例とし見るべき也。

第參章 翁、再び京都商業會議所を宰す(下)

一 祇園祭鉾巡行差止めの撤回交渉

翁の會頭と
しての兩面

翁が我が國商業會議所會頭中の元老として、財界に於ける各種重要な調査に従事し、或ひは政府の諮問に應じて答申し、或ひは自ら進むで政府に建議し、堂堂たる經濟政策的見地より、絶えず斯界に緊密の新施設を講ずるを怠らざりし顯著なる多くの功業以外、その一方に於いて、翁は表面に立たずして東奔西走し、商工業者の爲めに、將た一般市民の爲めに寄與せる事功また甚だ渺ならず。斯かるは所謂隠れたる翁の働きにして、翁の一生を通じてその眞面目は却つて此の邊に發露し、偶まこれが世に傳へらるるに至り、人をして翁ならではと歎服せしめずむば止まざる底のものあり。京都府の當局者が、彼の祇園祭禮に山鉾の巡行を差止め、翁が市民有志の懇請を容れて談笑裡に知事を説破し

*京都市電の
四條通西洞
院小橋間は
明治四十五
年四月に竣
成す

鉾巡行差止
めの府令發
布

市の年中行事を支障なく舉行せしめし如き、また數多きその中の一例に屬す。事は明治四十五年、^{*}京都市電の始めて四條通を運轉せし際に起りつ。七月、愈、恒例により祇園祭典の舉行に際し、市の當局者は鉾の巡行により四條通の架線を一時取拂はざるべからざるを迷惑に感じ、大森府知事にその事情を具申して、急に府令を以て斷乎として鉾の巡行を差止むることとなりたり。抑も祇園祭は古來日本三大祭の一に擧げられ、京都の夏を彩る大年中行事なるに、唯僅かに交通機關に少時間の支障を起すといふのみなる理由をもて、大都市の恒例を無視して顧みざるは以ての外的事なりとて、此の府令は、端なくも多數市民の物議を喚起し、就中、京都實業界の中心に位置し、八阪神社の氏子をもて組織せられたる清清講社の如き、一齊に蹶起して、幾度か府市當局者に陳情せるも、竟にその容るるところとならざりしたため、激昂すること一方ならず。止むなくむば山鉾を盡く破壊して横暴なる府市當局者に思ひ知らすべしと息捲くに至りつ。

講社の年寄連中は、萬策盡きて、竟に翁のもとに來りて事の成行を述べ、翁の盡力によりて府令を撤回し、圓滿に紛擾の落着するやうにと太く懇請しけるより、翁は之を諒として快くその請を容れ、事態のこの上險惡に赴かざるやう注意を與へ、講社の人人の輕舉を戒しめて、元來祇園祭禮の山鉦は市の所有物にてはなく、さればとて講社にその所有權を有するわけにてもなく、昔より八阪神社を氏神とする各町が、相傳へて大切に之を保管し來れるばかりのものにて、謂はば神よりの預り物なれば、吳吳も勝手氣儘にこれを取扱ふなかれと云ひ置き、翁はそれより即刻、京都府廳に至り、大森知事に會見するや、徐ろに知事に問ふていふ。聞くところによれば彼の長崎にては、恒例として毎年盂蘭盆に墓まつりを催し、墓地内にその墓の遺族、親類達など相集りて賑やかに飲食するの風ありと、貴下は前任知事として彼の地に在りし際之を差止められしや否やと。知事答へて、いや別に差止めなかつたといふに、翁の曰、暑熱の時期は腸胃を害し傳染病の生じ易き時なるに、貴下は何故に斯様なる非衛生的な

る行事を差止めずして黙認せられしぞ。知事の答ふ、あれはあの土地の風習で祭りのことゆゑ差止められなかつたのである。翁の曰、お祭りなるが故に之を差止めざりしと云はるる貴下の言はまことに道理千萬なり。さらばわれ試みにお尋ね致すべし、貴下は京都の祇園會の行事を以て祭りなりとは思はれざるか。若しこれを祭なりと思はるるならば、彼れも此れも同様に祭りのことなるに、何故に貴下は前任地の長崎にては之を許し、いま京都にては此の祇園會に對し斯くも鉦の巡行を差止めらるるぞと、知事爰に至つて頓に答ふる能はざりき。翁は是に於いて、語を次いでいふ。貴下は祇園祭の鉦の囃子を聞けりや。世にいふ祇園ばやし即ち此にして、悠揚として然かも律呂の冴えたる此の祇園ばやしが一たび響きわたる時は如何なる場合とても人人は鳴を鎮めて傾聽せで止まず。これ他のあらゆる鳴物音曲に比して此の祇園囃子の一段立ちすぐれたる所以なるが、この意味に於いて、鉦の巡行は音楽上よりするも廢する能はず。次に貴下は鉦の裝飾を觀られしや、優雅典麗を極めしさまさまの古代の織物は

銚の巡行により、此の日に限り、一般人士の前に開放せらるるにより、市民は自由に之を觀覽して鑑賞眼を養ひ、これが惹いて京都の美術工藝の發達を助けしこと幾干なるやを知り難し、この意味に於いて、銚の巡行は美術工藝上よりするも廢する能はず。第三に銚の巡行は、之を觀覽するために、平生、屋内に蟄居して容易に外に出でざる中京の婦人を、舉つて店先または街頭に誘ひ出だし、當日着飾れるその婦人達の美しき服装は、往昔より染織吳服の業に従事する人人にとりて多大の参考となり、これがまた斯がては地方の流行を形づくるための最も大切な資料となり來れることを忘るべからず、これ銚の巡行が市の産業上よりいふも廢する能はざる理由にてある也。第四は、市に古來斯様な大年中行事のあるによりて、地方の商人は、これを好機として毎年この時期に多く入洛し、市の特産たる織物吳服類などの仕入を爲すを常とせり。これ銚の巡行が市の商工業上より考へても廢する能はざる理由なりとす。さらに第五には、銚の巡行により當日の京都の賑ひはまことに非常なるものにて、市の景

知事の承服
と府令の無
期延期

氣はこれがために頓に引きたち、毎年夏枯れの不振より免るを得ること役人達の想像の外にあり。以上の如く一一その理由を挙げれば、祇園祭禮に於ける銚の巡行は市のためには非缺くべからざるものなるを貴下とても會得せぬわけに參るまじ。長崎の墓まつりさへ默認したりし貴下は、即時、不穩當至極なる過般の府令を撤回すべきにあらずやと。

知事の曰、君のやうに、そむなに勿體をつけてきては、成程さうかと云はざるを得ない。然かし一端府令を以て差止めたものを、今更ら許しては、府の威信に關するから甚だ困る。翁、府令を撤回することが府の威信に關するならば撤回せずともよろし。撤回せずに本年は府令の施行を延期すといふことにせられよ。來年は來年で本年延期、來來年もまた本年延期、かくして毎年延期すればそれで可なるにあらずや。知事、苦笑していふ。ではさういふ事に致さうと。翁は斯様にして、やすやすと府市間の暗礁に乗りあげつつありし銚の巡行問題を圓滿に解決し、歸邸して此の由を講社の年寄連に告げ知らせしかば、その

講社の喜び
市民の慶幸

喜び譬ふるに物なく、直ちに講社の人人は祭禮の準備に取りかかり、市民もまた翁の斡旋により何等不祥事を醸すことなくして、尊き傳統をもつ此の京都の大祭禮事の、年年舊に依り滞りなく舉行せらるるを觀、翁の盡力を徳として止まざるなりき。

二 御即位大典後の御式場拜觀申請

祇園祭りの銚巡行差止めの府令問題は前節に述べしが如く、翁の有する貫祿と、翁一流の機智とによりて、極めて無難作に解決し、影響の及ぶところ大なるに關らず翁としては別にさしたる程の苦心もなかりしなるべけれど、後、大正四年、大正天皇 御即位大典後の御式場拜觀に關し、翁が京都市の爲めに盡瘁せしところの深甚なるに至り、市民は之に感銘して永久に忘るる能はじ。

時維れ、大正四年秋十一月、愈、曠古の御大禮を京都市に於いて御舉行相成る旨發表せらるるや、全国各地より、鹵簿の盛觀を拜し奉らむため入洛する人人

永久に市民
の感銘すべ
きこと

全市の期待
畫餅に類せ
むとす

の如何に多數なるかを豫想し、全市七百の旅宿業者は、競ふて建物の修繕及び改、新築に着手し、地方人を顧客とする各商業者また、これに對し設備をささ怠りなく、市を舉げていづれもひたすらその日の到來を待ち望みつつありしが、知事大森鍾一男は、御大典直前、京都市未曾有の混雜を來たすべきを慮つて豫じめ之が防止策を講じ、各府縣に通牒して出來得るかぎり入洛者の人數を制限せられたきよし申し送りけるより、各府縣當局はその旨を承け、なるほど尤のことなりとて管下の各團體其他の上洛希望者を抑止せしものから、御盛儀を目前に迎へて京都市内の旅館全體に投宿の申込みをなし來たる地方人は豫期に反して甚だ少なく、市内一般、孰れの方面にても案に相違の色あり。これがため旅宿業組合の當事者は急ぎ商業會議所に至りて、不振の狀を懇へ、翁に善後策を講じられたき旨を懇請せるが、翁は考慮の末、大典後御式場拜觀の儀に思ひを廻らせ、市の景氣振興の爲めにも、また廣く國民精神作興の上にも、これに勝される良策なしとし、直ちに翁は大隈首相並に宮内大臣を始め關係當局

翁、御式場
拜觀許可に
極力運動